

島根県浜田市遺跡地図V(旭自治区)

浜田市治和町鰐石試掘調査

平成23年度 市内遺跡発掘調査報告書



2013年3月

島根県 浜田市教育委員会

序

浜田市教育委員会では市内の遺跡を確認するため、平成11年度から国庫補助事業を受けて市内遺跡の発掘調査を実施しています。平成18年度からは市町村合併に伴い、旧那賀郡（金城町・旭町・三隅町・弥栄村）も含めた新浜田市を対象として事業を実施しています。

本書は旭自治区の遺跡位置を示した地図をまとめており、文化財保護のための基礎資料です。学校教育や生涯学習・開発事業との調整などひろく活用され、文化財保護思想の普及、地域史研究への一助となることを願っております。

おわりに、本書を刊行するにあたり御協力をいただきました地元の皆様、島根県教育委員会をはじめとした関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成25年3月

浜田市教育委員会

教育長 山田洋夫

例 言

1. 本書は浜田市教育委員会が平成23・24年度に国庫補助を受けて実施した市内遺跡発掘調査事業の報告書である。事業は遺跡分布調査と台帳整理、試掘確認調査と関連遺物の整理作業を実施した。

2. 調査は以下の組織で行った。

調査主体 浜田市教育委員会教育長 山田洋夫

調査指導 阿部志朗（浜田高校教諭・元島根県歴史の道調査委員）平成23年度

大谷晃二（島根県古代文化センター客員研究員・矢上高校教諭）平成24年度

島根県教育委員会 文化財課

調査員 柳原博英（浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係 主任主事）

藤田大輔（浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係 主事）

事務局 浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係

文化振興課長 岡本好明・文化財係長 川本裕司

3. 調査にあたり協力および従事していただいた方々は次のとおりである。

調査協力 島根県合板協同組合 浜田針葉樹工場、島根県古代文化センター

角田徳幸（島根県古代文化センター）、千葉 豊（京都大学文化財総合研究センター）

林 健亮（島根県埋蔵文化財調査センター）、柳浦俊一（島根県古代文化センター）

調査参加 坂倉ひとみ、中田貴子、原田勝義、半場利定

4. 遺物実測図は軒瓦と土器・石器類が1/4スケール（石錐は1/2スケール）、丸・平瓦が1/5スケール、土器の回転糸切りは記号で示している。土層図は1/50スケールである。

出土遺物、実測図及び写真、台帳類の記録は浜田市教育委員会に保管してある。

5. 本書の執筆は調査員が分担して行い、文責は文末に示した。全体の編集は藤田が行なった。

本 文 目 次

第1章 事業の経過	1
第2章 旭自治区遺跡地図（遺跡分布図・遺跡一覧・参考文献）	1
第3章 埋蔵文化財の事務手続きフロー	66
第4章 旭自治区の埋蔵文化財について	68
第5章 浜田市治和町鷲石試掘調査	103
第1節 調査の経過	103
第2節 調査の概要	103
第3節 総括	103

第1章 事業の経過

浜田市教育委員会では国庫補助事業を受けて市内遺跡の試掘確認調査を平成11年度より実施している。平成17年（2005年）10月1日の市町村合併により、那賀郡（金城町・旭町・三隅町・弥栄村）を含めた新浜田市の範囲を対象とする事業となった。

これまでの調査結果については、以下の報告書を刊行している。

- 『浜田市遺跡詳細分布調査—国府地区Ⅰ—』浜田市教育委員会 平成14年3月
 - 『史跡 石見国分寺跡・県史跡 石見国分尼寺跡』浜田市教育委員会 平成18年3月
 - 『浜田市遺跡詳細分布調査—周布地区Ⅰ—』浜田市教育委員会 平成19年3月
 - 『史跡 周布古墳・藏地宅後古墳・市史跡 金田1号墳』浜田市教育委員会 平成20年3月
 - 『島根県浜田市遺跡地図I（浜田自治区）・仕切遺跡』浜田市教育委員会 平成21年3月
 - 『島根県浜田市遺跡地図II（金城自治区）・七渡瀬II遺跡』浜田市教育委員会 平成22年3月
 - 『島根県浜田市遺跡地図III（三隅自治区）・史跡 石見国分寺跡』浜田市教育委員会 平成23年3月
 - 『島根県浜田市遺跡地図IV（弥栄自治区）・浜田城下町遺跡試掘調査』浜田市教育委員会 平成24年3月
- 本報告書に収録した内容は、平成23年度に実施した浜田市治和町鰐石試掘調査と市内分布調査・台帳整理に基づく旭自治区の遺跡地図である。

第2章 旭自治区遺跡地図

島根県教育委員会2002『島根県遺跡地図II（石見編）』に基づき、M1から一連番号を付した。

指定文化財には別番号（史跡：国史、県史、市史・天然記念物：国天、県天、市天・登録文化財：国登）を付した。このため、埋蔵文化財と史跡の番号は二重になっており、史跡指定範囲（一点鎖線）と埋蔵文化財の範囲は異なっている。なお、旭自治区には指定文化財は所在しない。

遺跡は種別によって下記のとおり分け、赤色の記号であらわした。種類が複数になるものは主なもので代表させている。遺跡の範囲が明確なものは塗りつぶし、不明確なものは白抜きで示した。

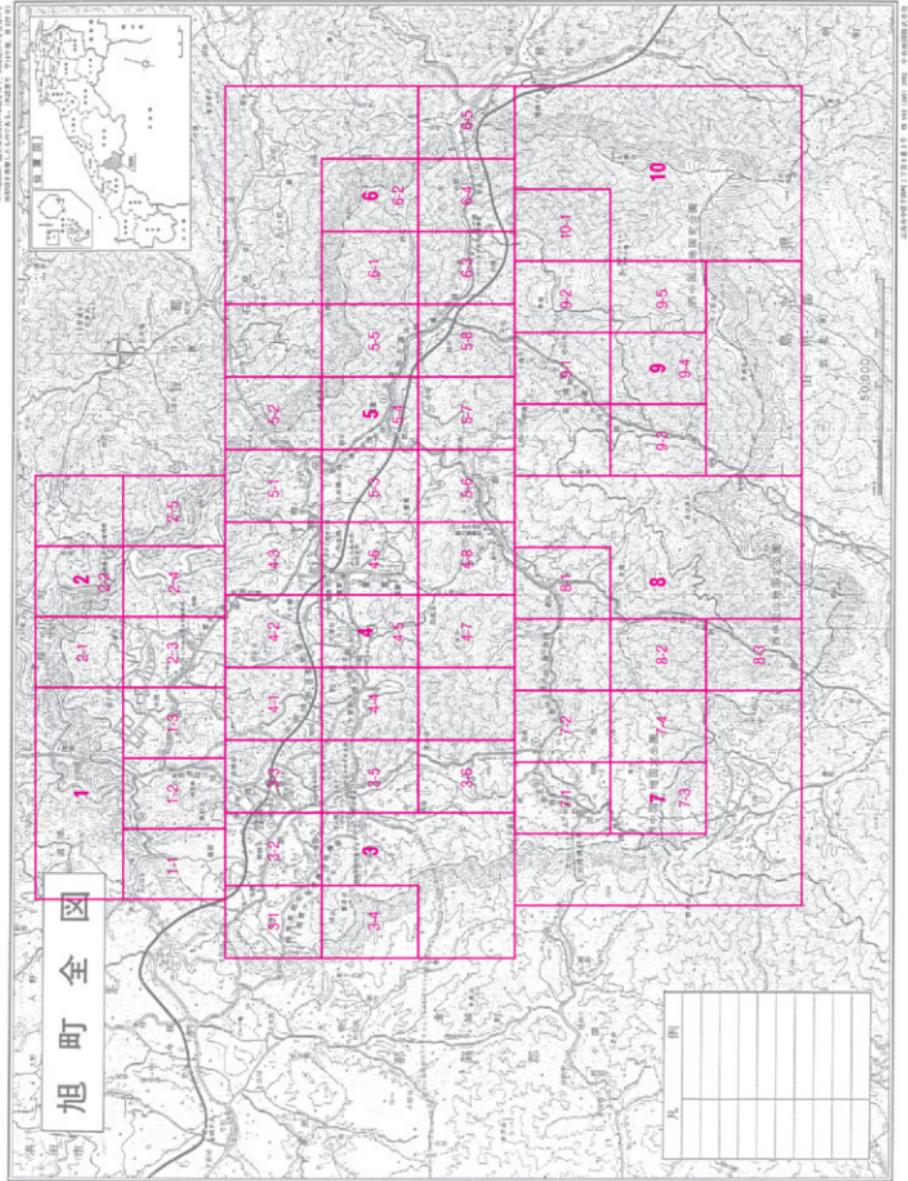
街道跡は島根県歴史の道調査報告書と調査指導者の補足を反映したものである。およそ江戸時代後期から近代にかけてのものである。

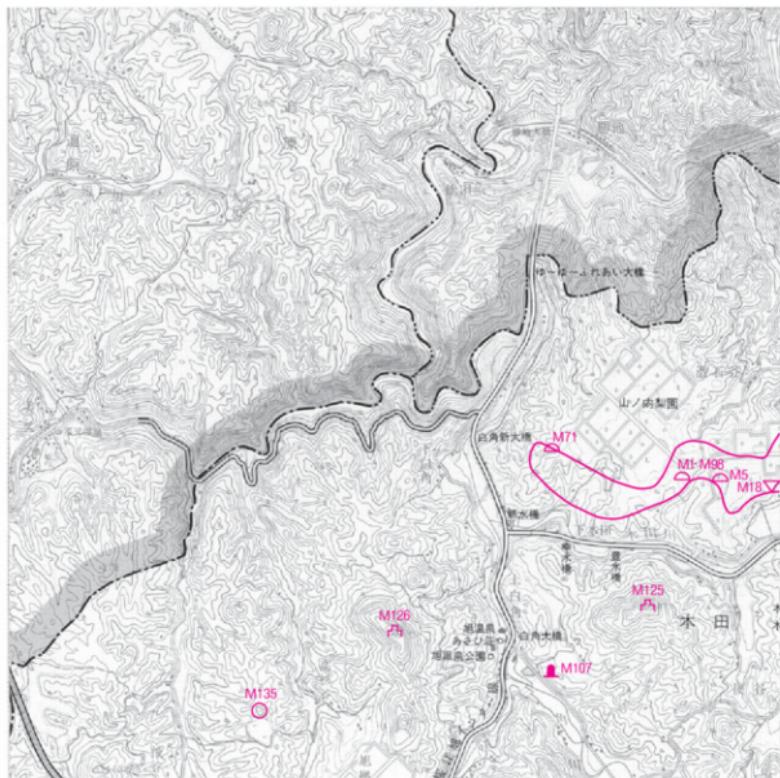
● 遺跡	○ 遺跡（不明確）
- 遺跡範囲	.. 遺跡範囲（不明確）
▲ 古墳・墳墓	△ 古墳・墳墓（不明確）
■ 古墓・石碑など石造物	■ 古墓・石碑など石造物（不明確）
▲ 烟草関係遺跡	△ 烟草関係遺跡（不明確）
▼ 製鉄関係遺跡	▽ 製鉄関係遺跡（不明確）
△ 寺院跡	○ その他の遺跡
■ 調査実施地点・遺跡確認	□ 調査実施地点・遺跡なし
一点鎖線 指定範囲（史跡・登録文化財）	凸 城館跡
◆ 天然記念物（樹木）	★ 天然記念物（樹木以外）

地図上に示した遺跡は、現段階で確認できたものを掲載しています。図示されていない地点にも遺跡が存在する可能性があるため、現地確認などの予備調査（分布調査・試掘調査など）が必要になります。開発行為を計画する場合は浜田市教育委員会に照会していただきたい。

掲載した地図（1/90,000、1/25,000、1/8,000）は、浜田市旭支所で保管している1/50,000、1/25,000の旭町全図、浜田市で保管している1/5,000の浜田市地形図（平成21年測図）を使用した。平成17年の市町村合併により、那賀郡旭町は浜田市旭町になっている。





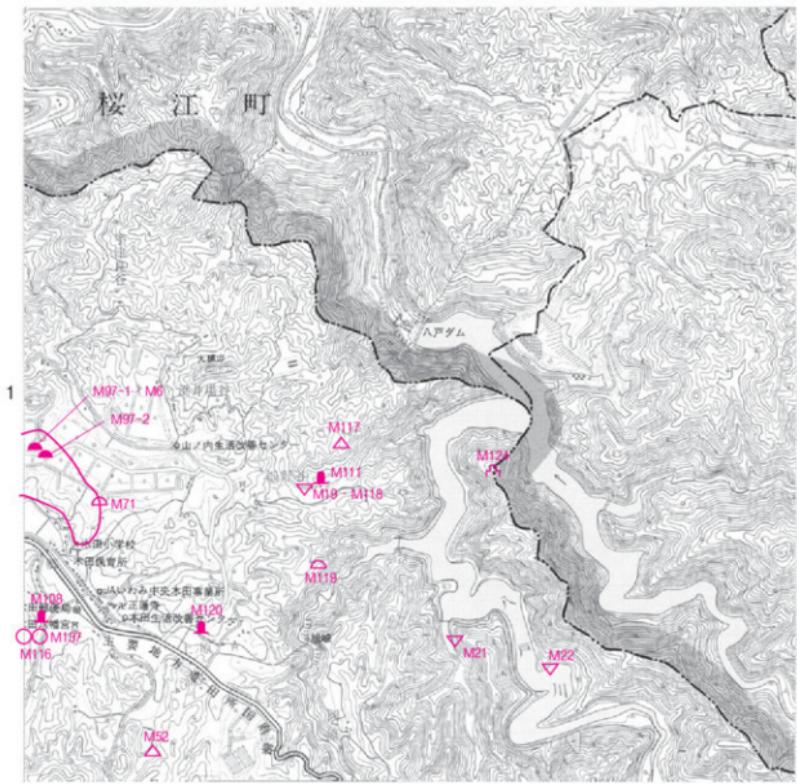


3

4



M1 横尾原火塚古墳（M98 柏尾原古墳と同一） M5 犬立古墳 M18 坂本奥鉄跡
 M71 (M71-1~36) 山ノ内古墳群 M107 古屋古墓 M125 高幡山城跡 M126 矢苦山城跡 M135 岐田遺跡

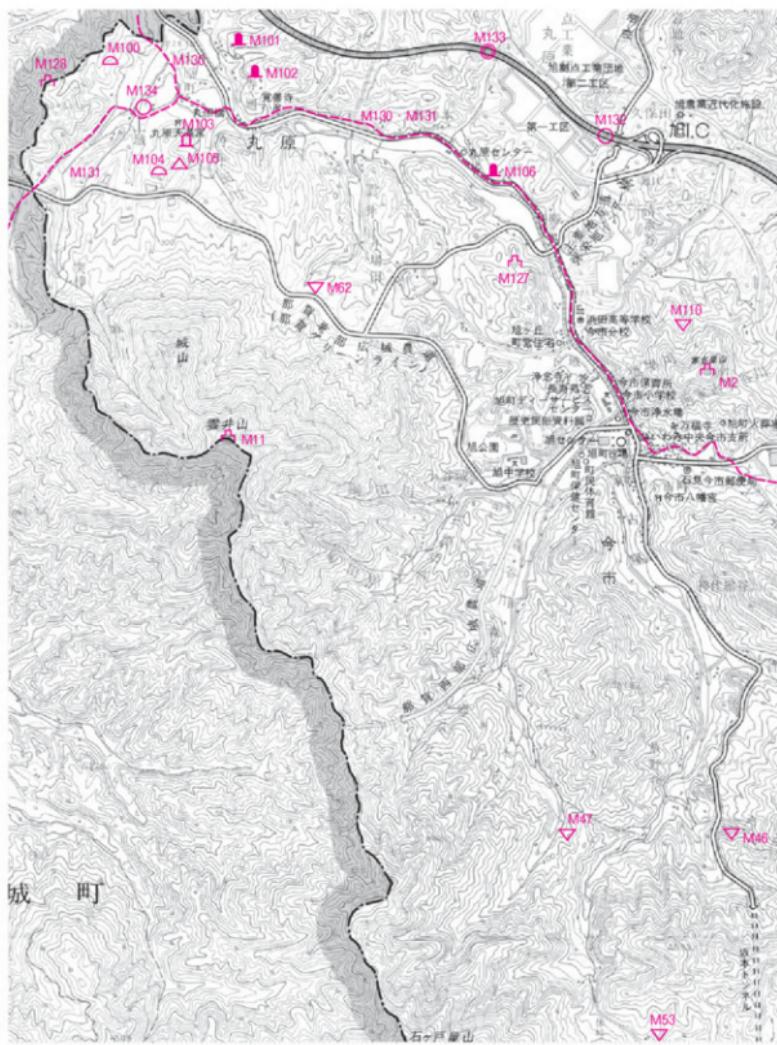


4

5

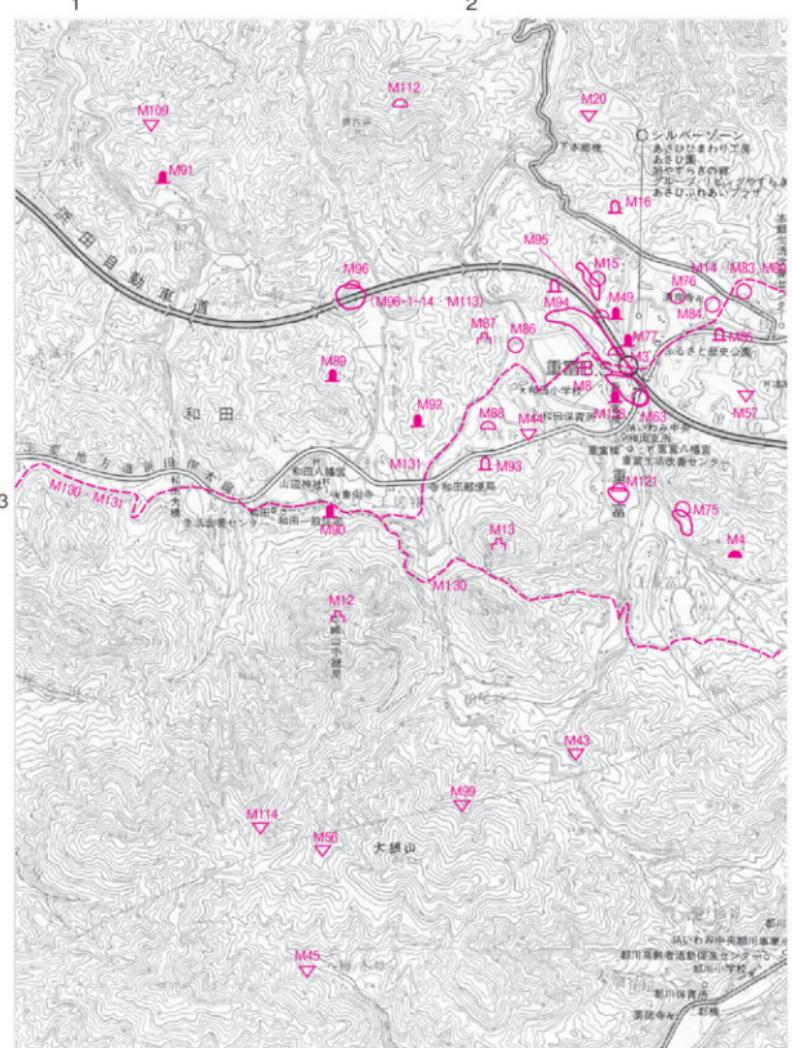


M19 下土居鍛冶屋跡 (M118 鍛冶屋屋地鉢跡と同一) M21 鉢床鉢跡 M22 今川鉢跡 M52 大迫堤窯跡
 M71 (M71-1 ~ 36) 山ノ内古墳群 M97-1 坂本奥1号墳 (M6 坂本奥火塚古墳と同一) M97-2 坂本奥2号墳
 M108 二宮古墓群 M111 侍屋敷古墓 M116 泉屋古墳 M117 峠谷遺跡 M119 鴻煙古墳
 M120 佐々彌重古墓 M124 杭ヶ内城跡 M137 泉屋遺跡

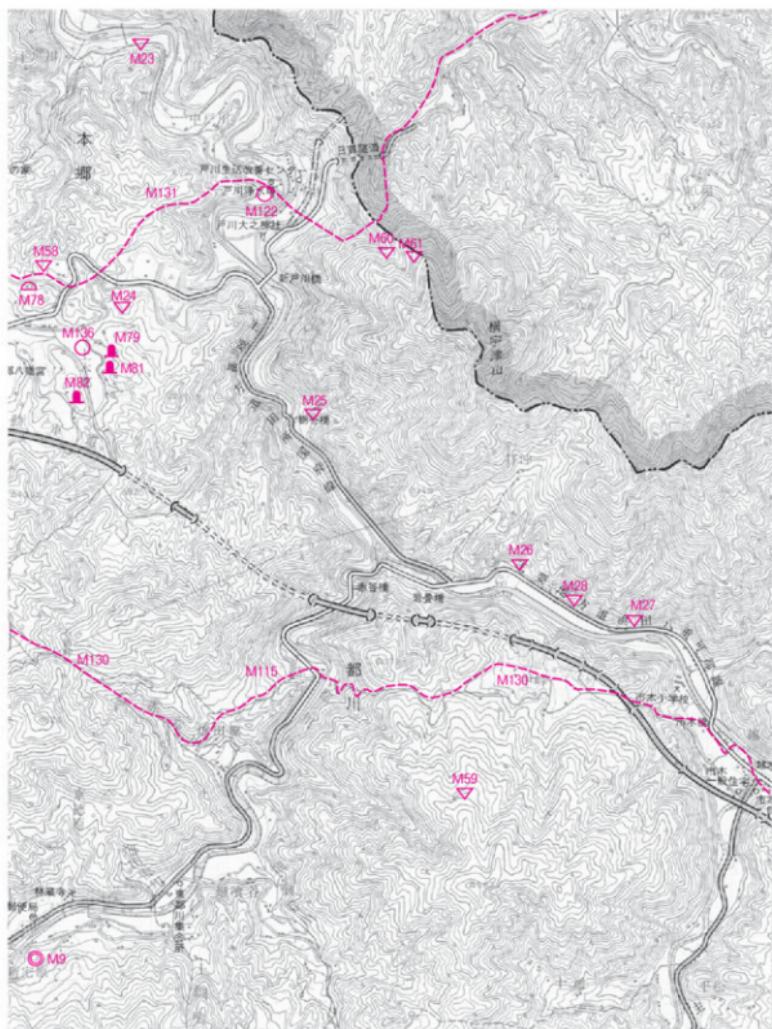


0 1,000m

- M2 加古屋城跡 M11 雲井城跡 (N191と同一) M46 神代屋谷鉢跡 M47 森谷鉢跡 M53 鉢溢鉢跡
 M62 雲井山鉢跡 M100 春日山古墳 M101 惣源寺古墓群 M102 覚善寺跡古墓 M103 田中古墓
 M104 角井田古墳 M105 瓦谷遺跡 M106 花手セド古墓群 M110 竹の下の奥鉢跡 M127 太鼓丸城跡
 M128 遠見城跡 M130 浜田広島街道 M131 津和野奥筋往還 M132 十文セド遺跡 M133 十文後溢遺跡
 M134 木戸遺跡

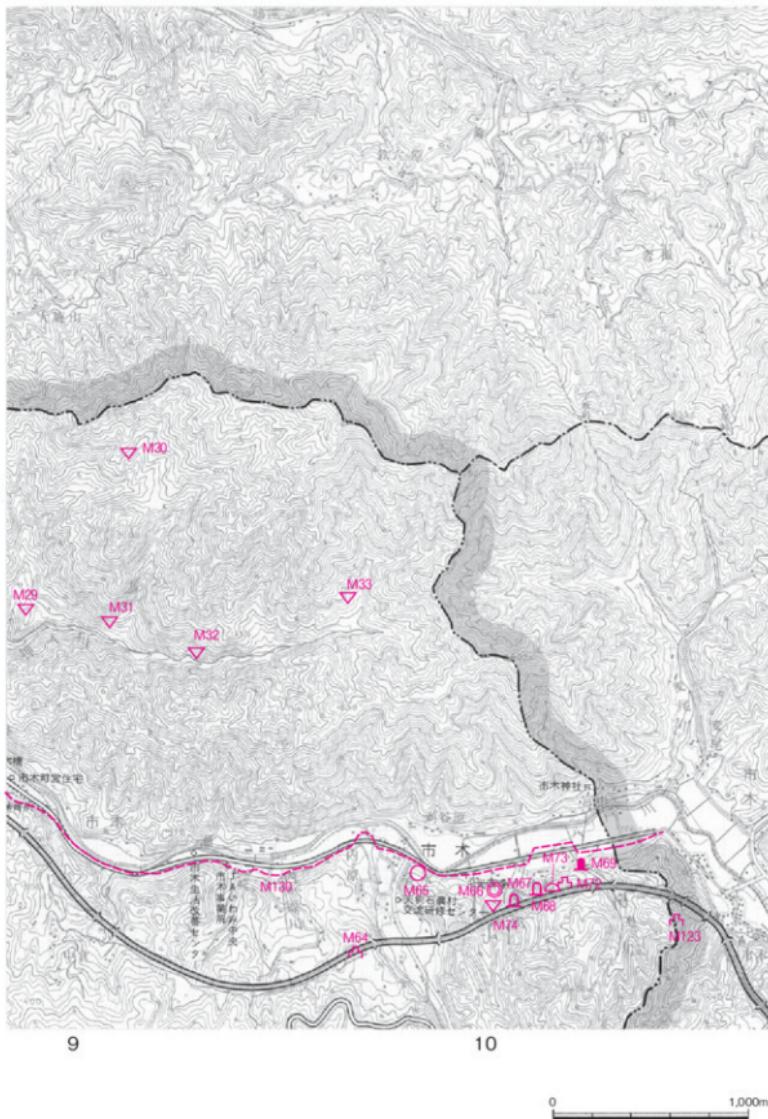


- M 3 (M 3-1 ~ 24) やつおもて古墳群 M 4 福原宅裏横穴群 M 8 重富寺跡
 M12 大石谷城跡 M13 重富城跡 M14 本郷の大墓 (M83 大墓石塔群と同一)
 M15 (M15-1 ~ 6) 新塚古墳群 M16 生塚 M20 小池鍛冶屋跡 M43 戸谷丘鉄穴溝跡 M44 柏尾谷鉄穴溝跡 I
 M45 梅ノ木鉾跡 M49 朝日宝鏡印塔 M56 枝田鉾跡 M57 叶山鉾跡 M63 重富遺跡 M75 土居ノ内遺跡 M76 追田遺跡
 M77 曽川石塔 M80 大墓横穴群 M84 桜ヶ坪遺跡 M85 小堀石塔 M86 野地遺跡 M87 野地背戸山城跡 M88 向山古墳群
 M89 奥寺石塔群 M90 神宮寺石塔 M91 東田石塔群 M92 向山石塔 M93 高山石塔 M94 柳ヶ谷古墓 M95 後河内古墓群
 M96 (96-1 ~ 14) 小才遺跡 (M113 小才3号墳と同一) M99 柏尾谷鉄穴溝跡 II M109 カジヤ床鉾跡 M112 防六古墳
 M114 岩山鉾跡 M121 丸山古墳群 M130 浜田広島街道 M131 津和野奥筋往還 M138 重富石塔



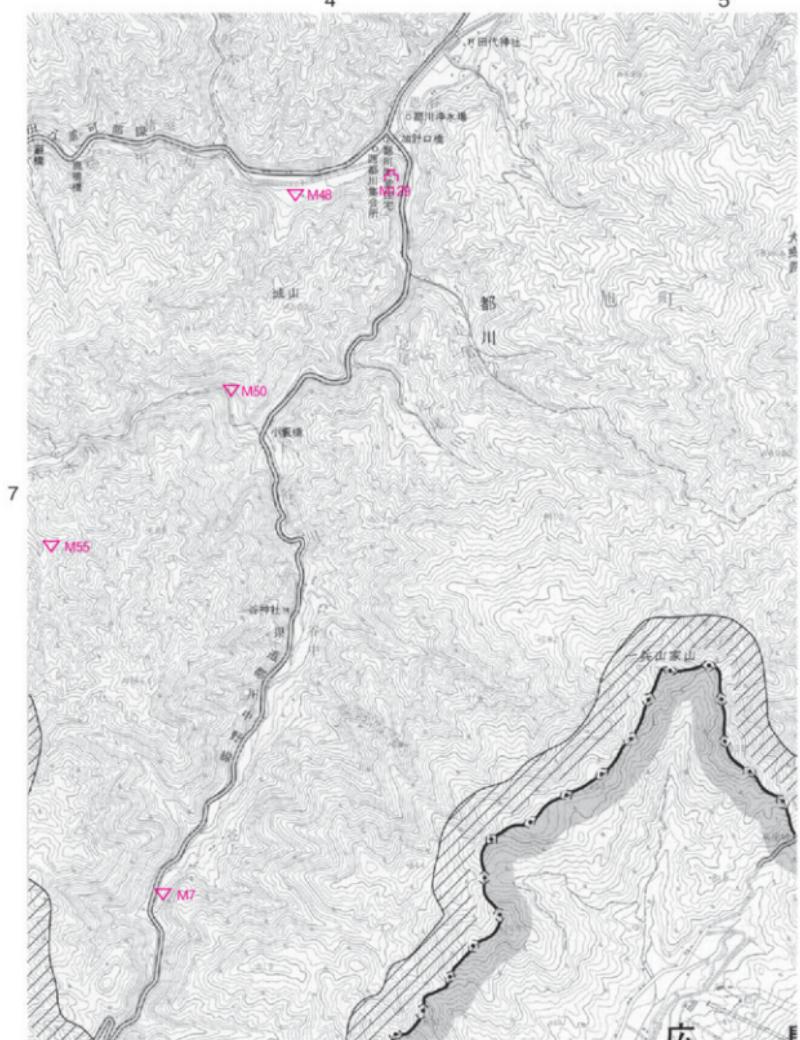
0 1,000m

- M9 京山経塚 M23 赤瀬鉄跡 M24 大槻崎鉄穴跡 M25 大賀鍛冶屋跡 M26 夏川鍛冶屋跡 M27 吉川鍛冶屋跡
 M28 奥の谷鉄跡 M58 すづか谷鉄跡 M59 中鉄跡 M60 烧板鍛冶屋跡 M61 ホトコロ鍛冶屋跡
 M78 五歩一ソラ古墳 M79 後屋敷門石塔群 M81 正利庵石塔 M82 別名石塔 M115 赤谷石疊道
 M122 坂井原遺跡 M130 浜田広島街道 M131 津和野奥筋往還 M136 上本郷遺跡



M29 四百谷鉄跡 M30 大原鉄跡 M31 新所Ⅰ鉄跡 M32 新所Ⅱ鉄跡 M33 ホトコロ鉄跡 M64 内ヶ原城跡
 M65 旱水遺跡 M66 天代遺跡 M67 天代石塔群 M68 高烟石塔 M69 西の上石塔群 M72 森追城跡
 M73 森追古墳 M74 楊谷鉄跡 M123 高城跡 M130 浜田広島街道





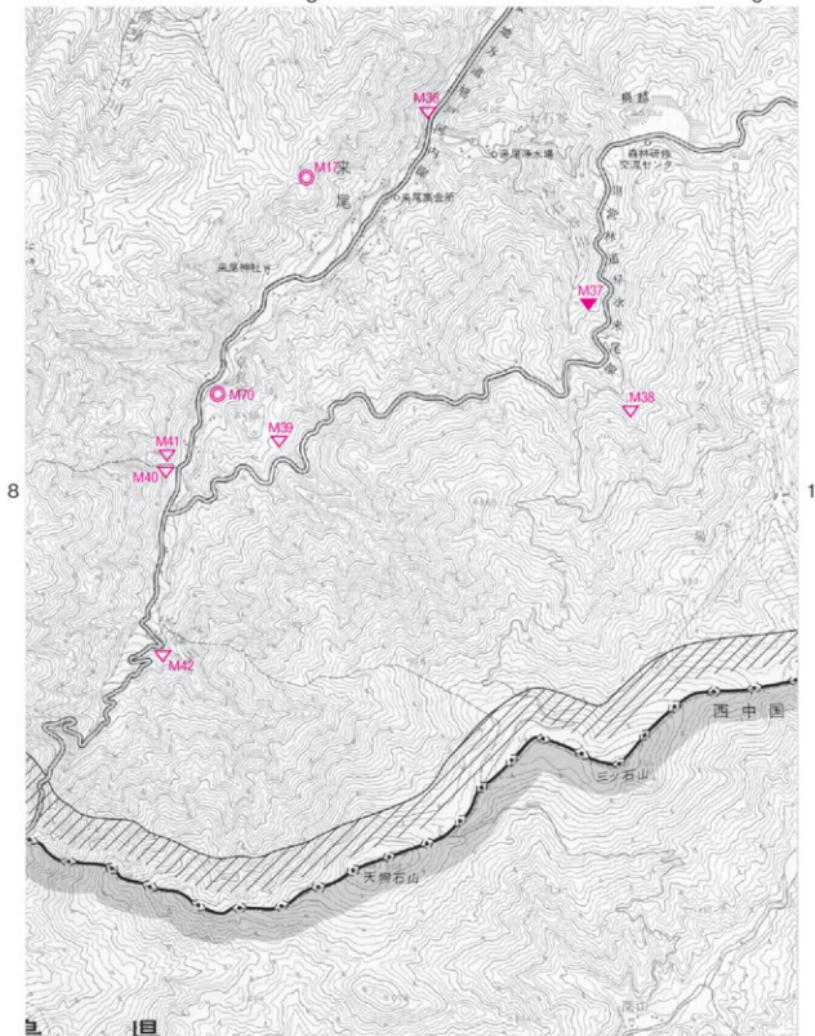
0 1,000m

M7 政ヶ谷銅跡 M48 日ノ原鍛冶屋跡 M50 谷下銅跡 M55 オオジカ銅跡 M129 城山城跡

9

5

6



0

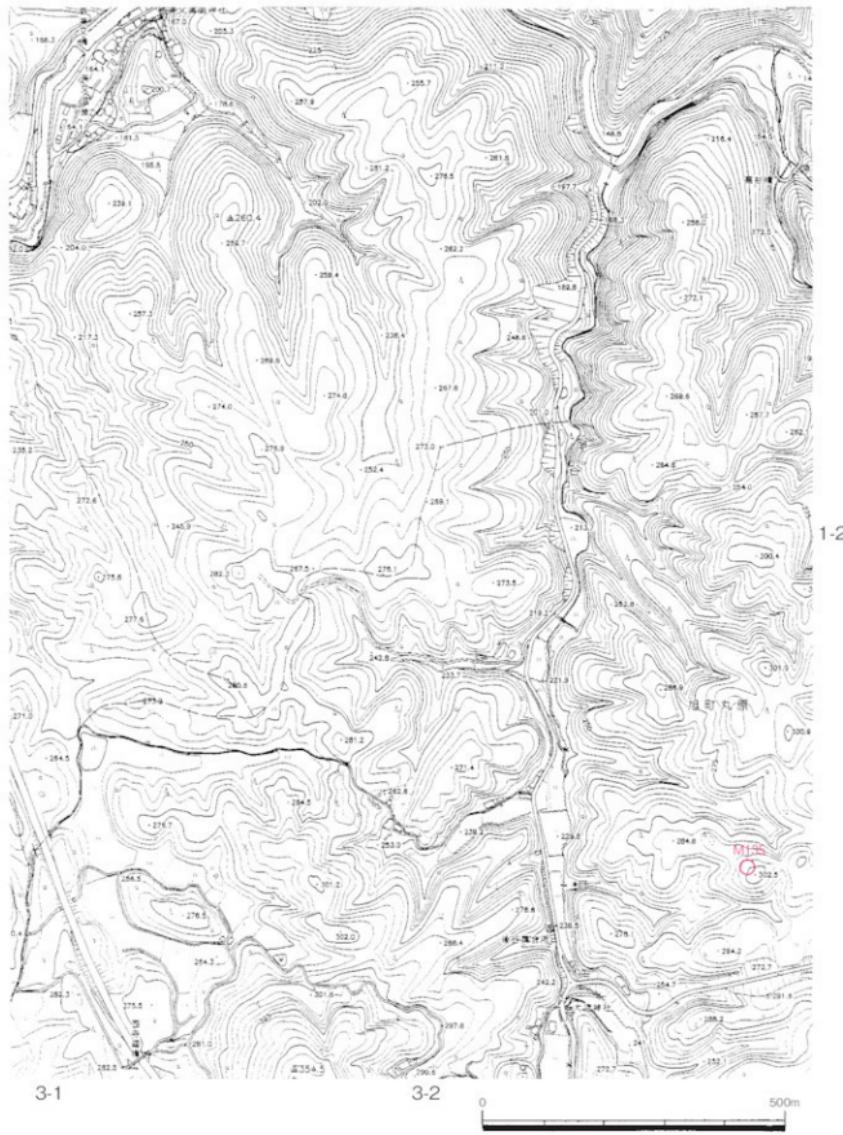
1,000m

M17 久仁古墓 M36 大石谷下の鉄跡 M37 大石谷中の鉄跡 M38 大石谷上の鉄跡 M39 岩尾谷鉄跡
 M40 下ヶ谷鍛冶屋跡 M41 下ヶ谷鉄跡 M42 京良原鉄跡 M70 来尾経塚

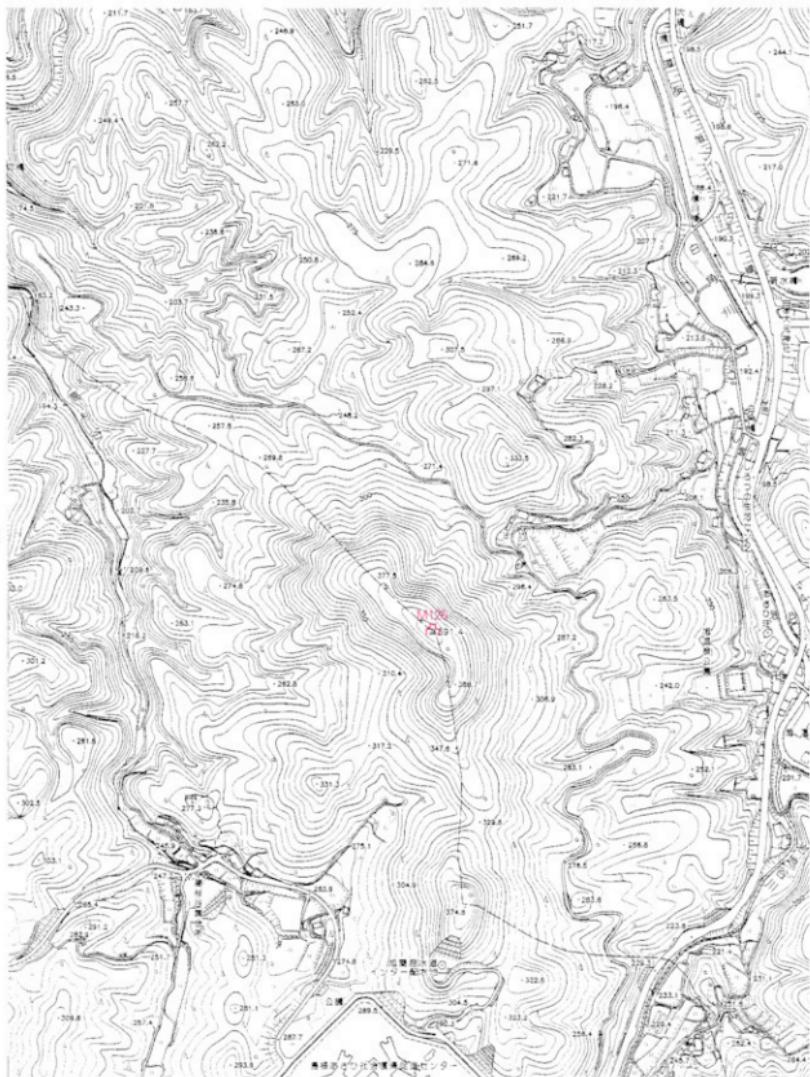
6



9



M135 島田遺跡

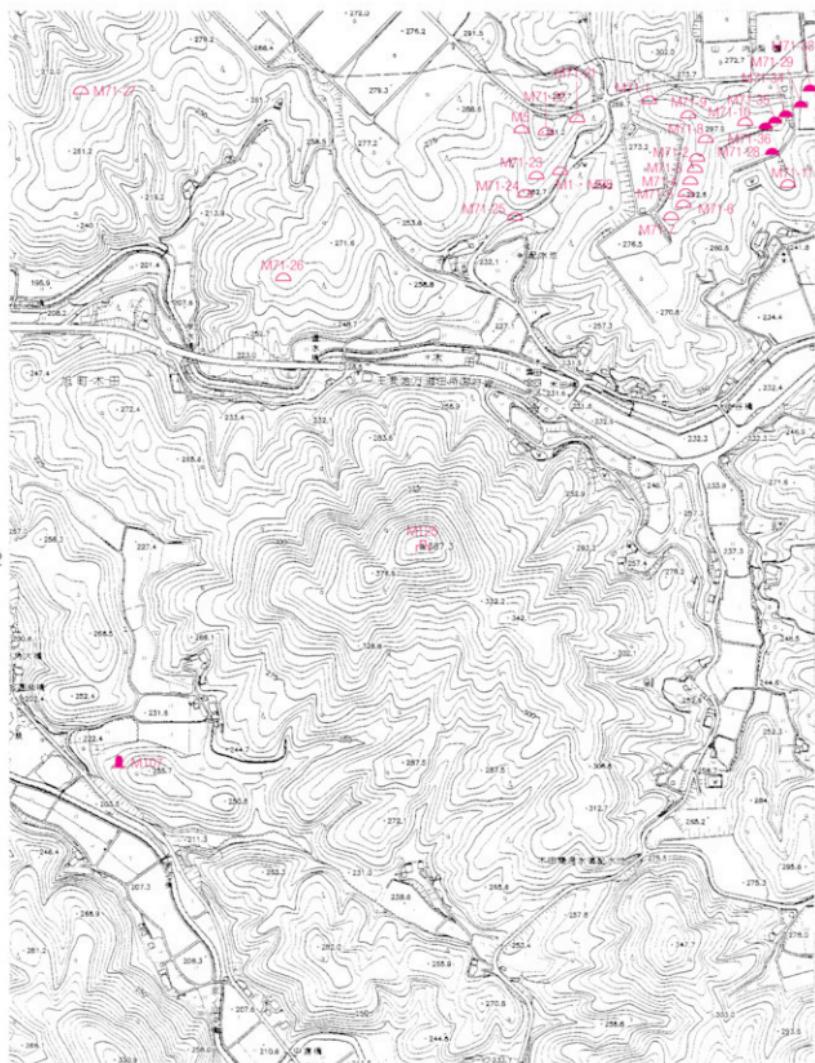


3-2

3-3



M126 矢筈山城跡



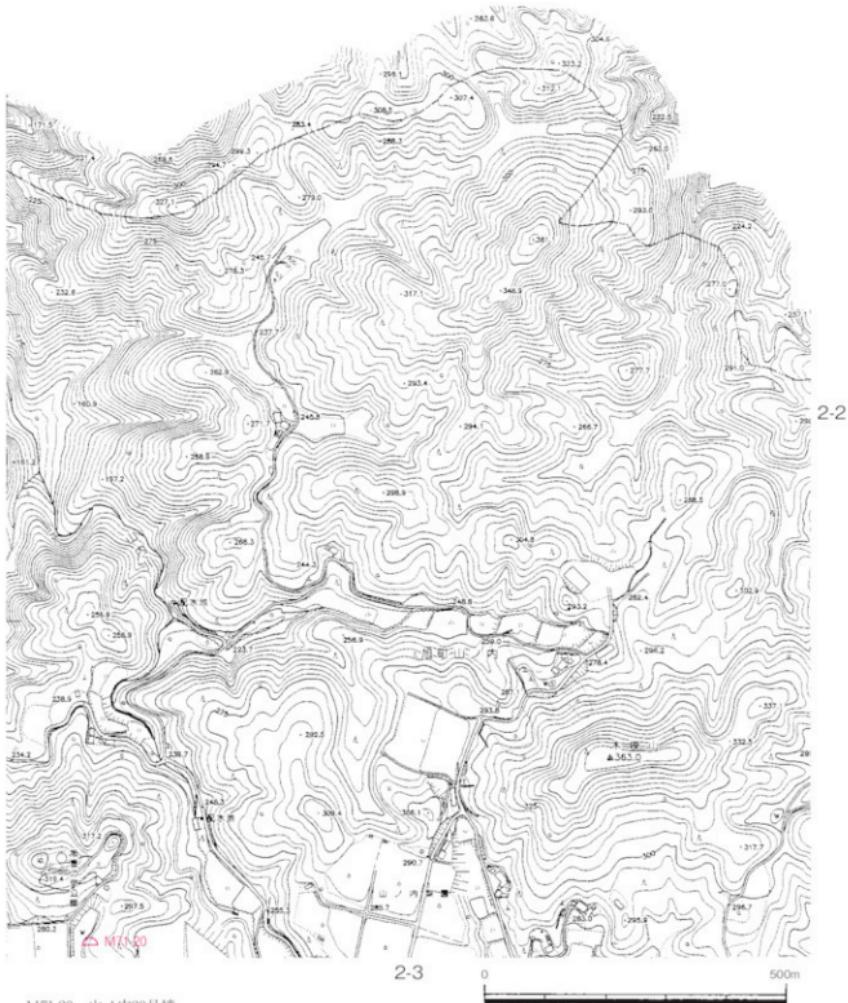
3-3

4-1

0

500m

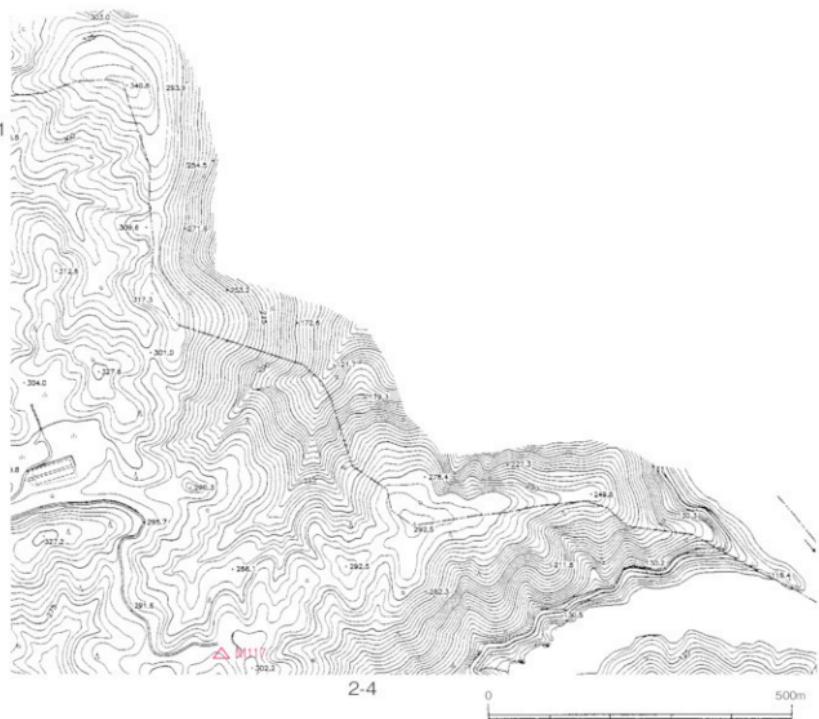
M1 横尾原火塚古墳（M98 柏尾原古墳と同一） M5 犬立古墳 M71-1~11 山ノ内1号~11号墳
 M71-21~29 山ノ内21号~29号墳 M71-33~36 山ノ内33号~36号墳 M107 古屋古墓 M125 高幡山城跡



M71-20 山ノ内20号墳

江 津 市

2-1



M117 峰谷道路

2-1



1-3

2-4



4-1

4-2

0

500m

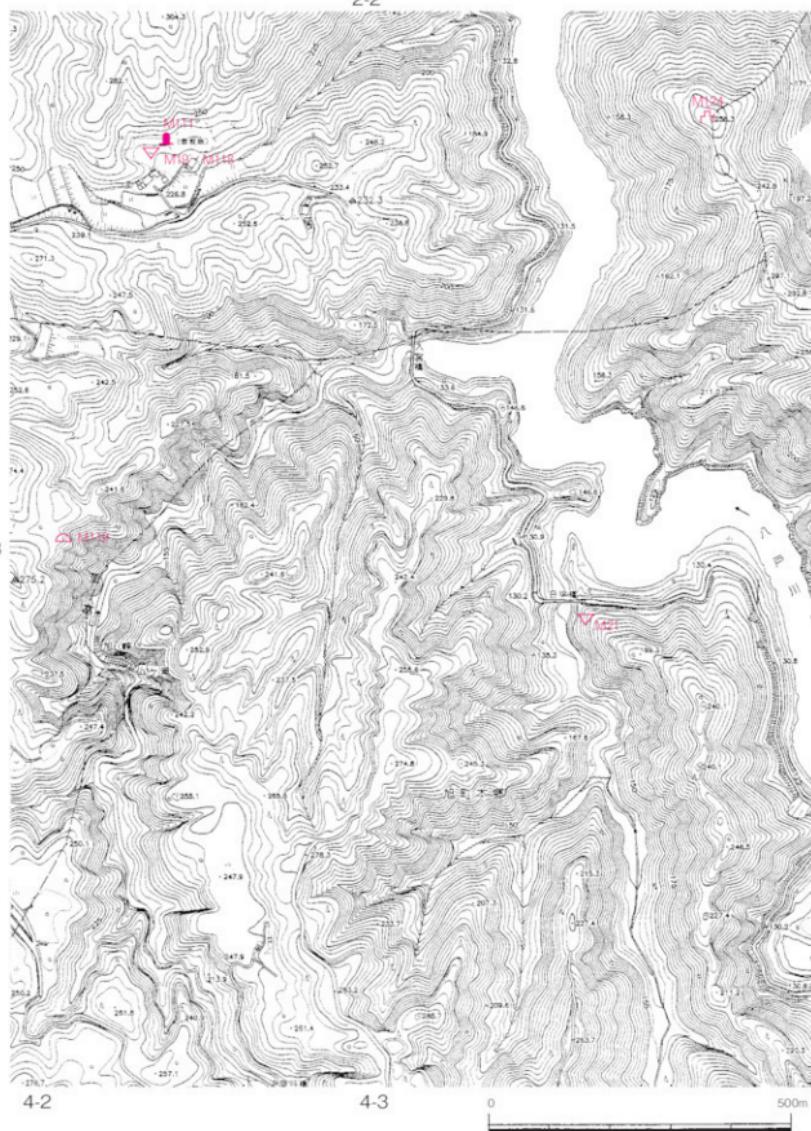
M18 坂本奥鉄跡 M52 大追堤窯跡 M71-12~19 山ノ内12号~19号墳 M71-30~32 山ノ内30号~32号墳

M97-1 坂本奥1号墳 (M6 坂本奥火塚古墳と同一) M97-2 坂本奥2号墳 M108 二宮古墓群

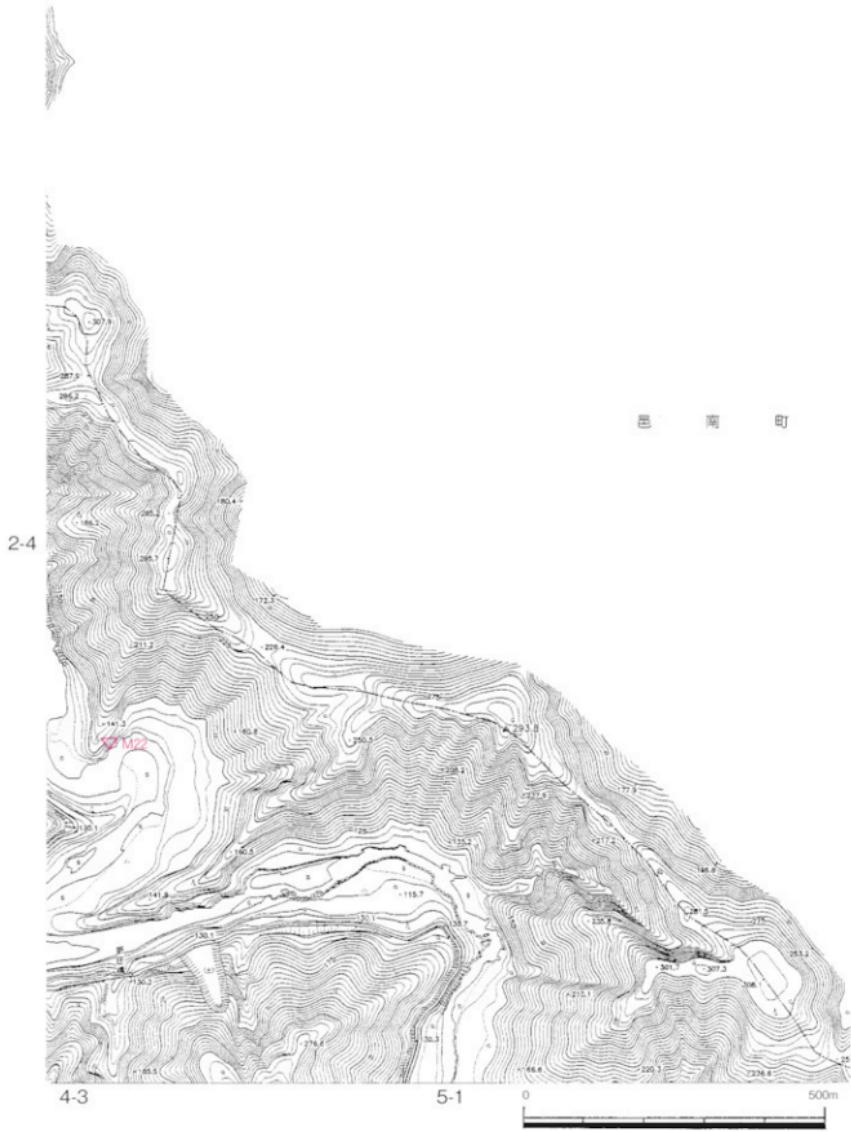
M116 泉屋古墳 M120 佐々弾重古墓 M137 泉屋遺跡

2-4

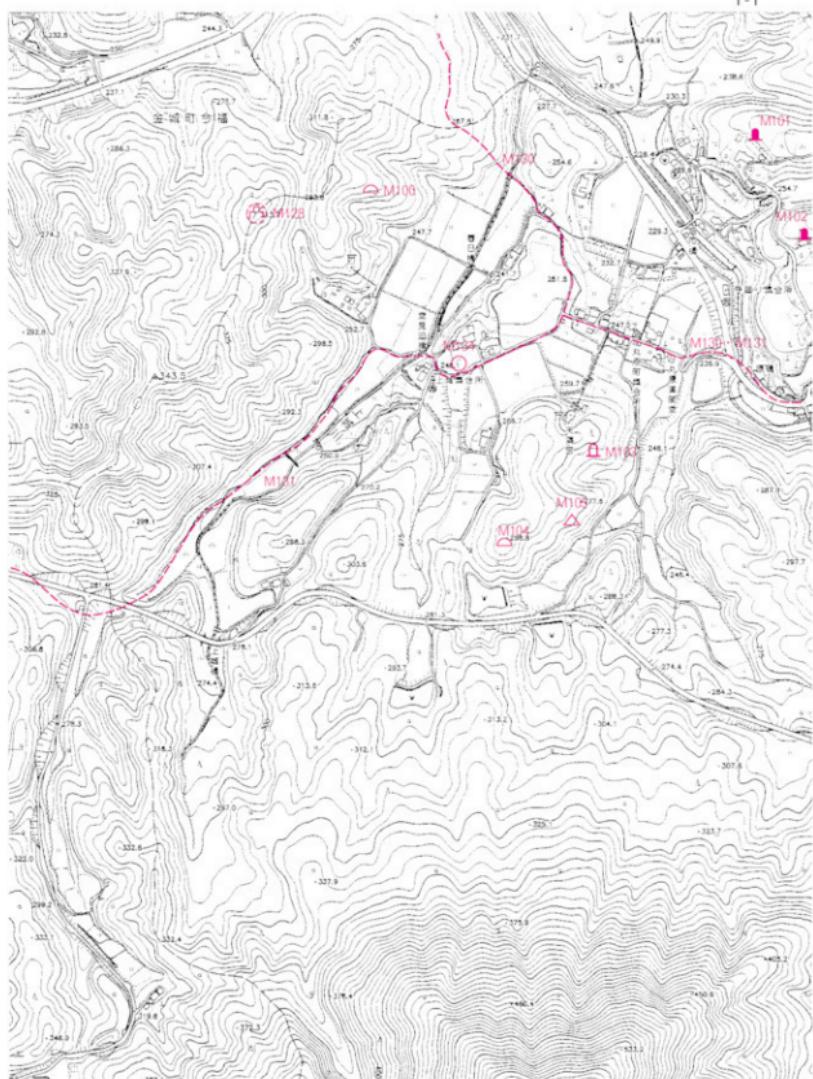
2-2



M19 下土居鍛冶屋跡 (M118 鍛冶屋屋地鉋跡と同一) M21 鉋床鉋跡 M111 侍屋敷古墓
M119 烟流古墳 M124 桟ヶ内城跡



M22 今川鉢跡

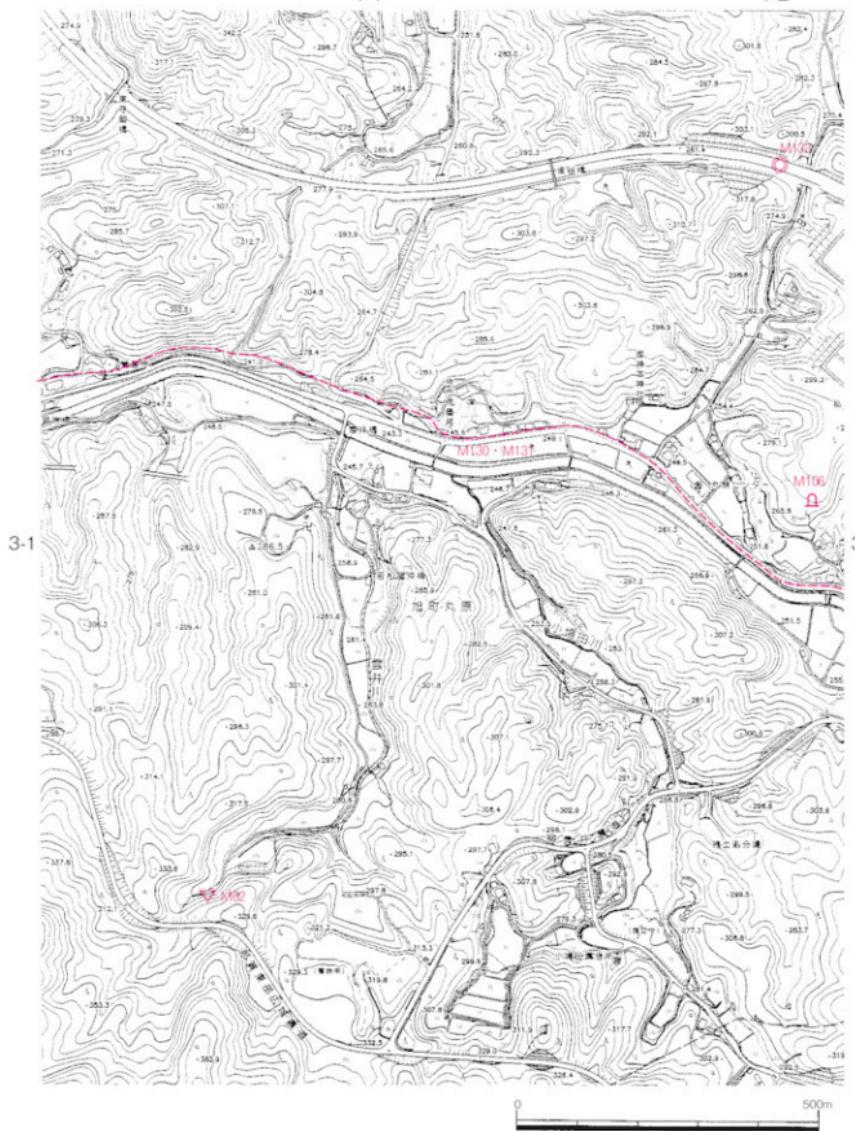


M100 春日山古墳 M101 惣源寺古墓群 M102 覚善寺跡古墓 M103 田中古墓 M104 角井田古墳
M105 瓦谷遺跡 M128 遠見城跡 M130 浜田広馬街道 M131 津和野奥筋往還 M132 木戸遺跡

3-2

1-1

1-2



3-1

3-3

M62 雲井山鉄跡 M106 花手七下古墓群 M130 浜田広島街道 M131 津和野筋往還 M133 十文後溢遺跡

3-3

1-2

1-3



3-2

4-1



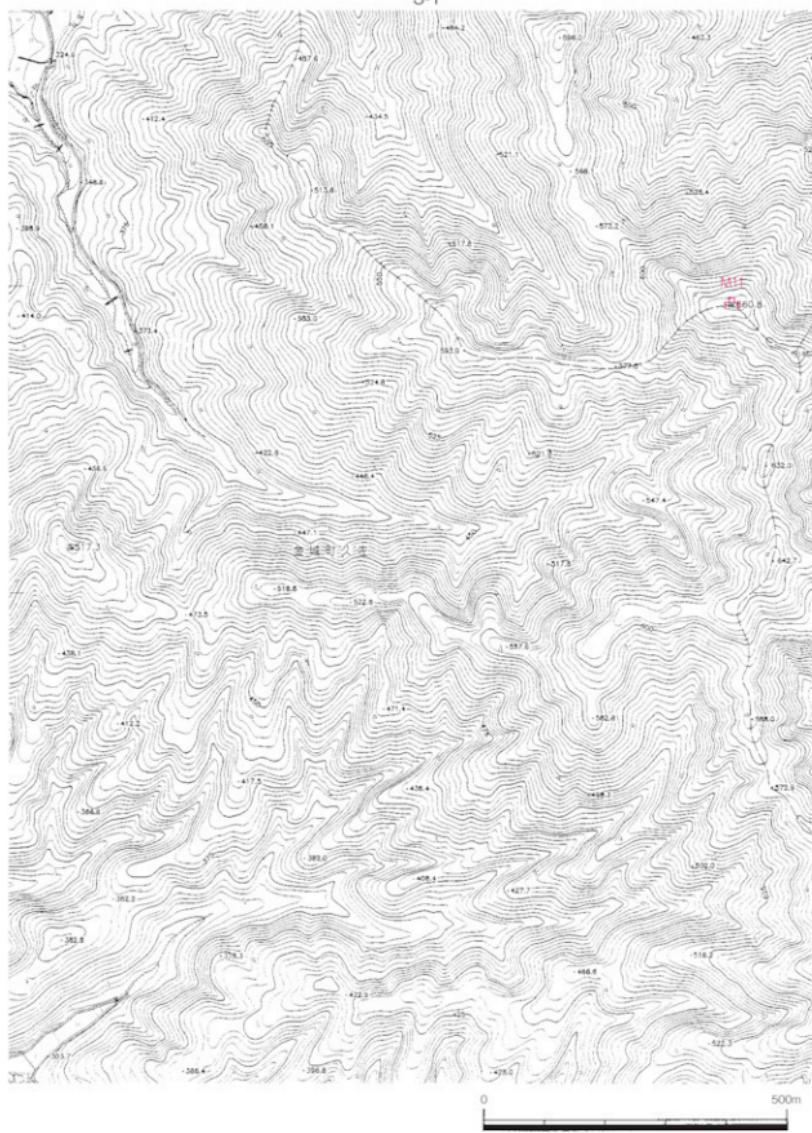
3-5

0

500m

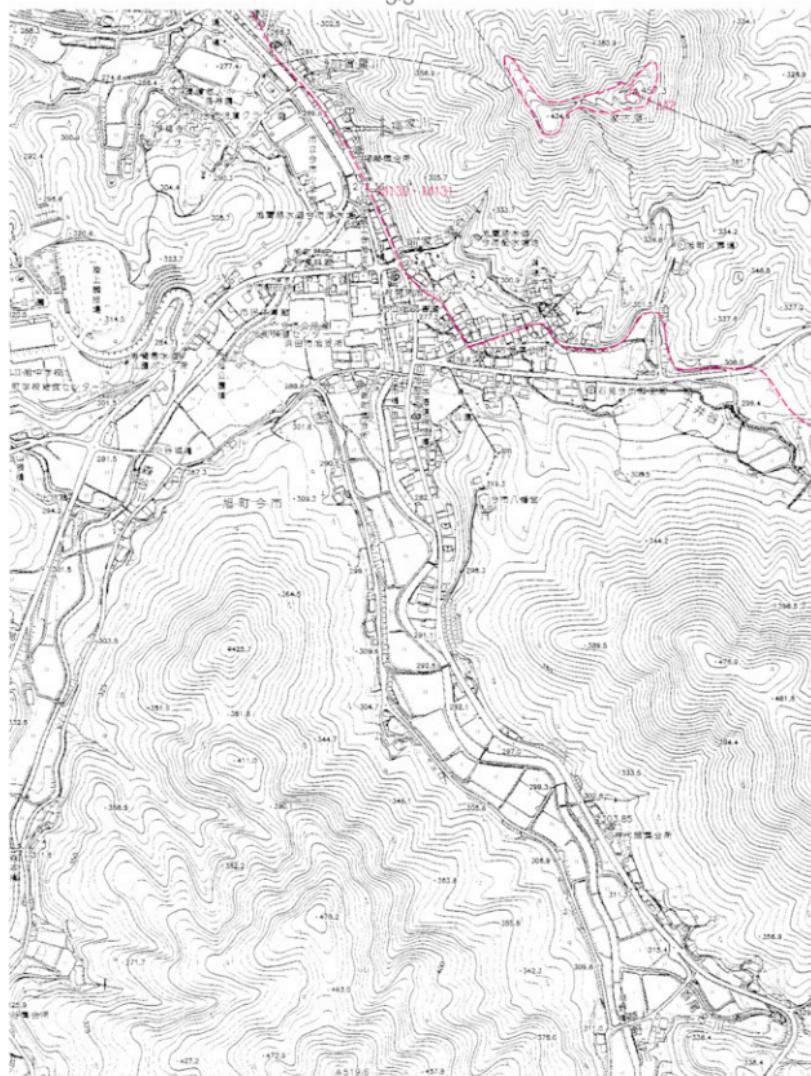
M110 竹の下の奥御跡 M127 太鼓丸城跡 M130 浜田広島街道 M131 津和野奥筋往還 M132 十文セド道路

3-1



M11 雲井城跡

3-3



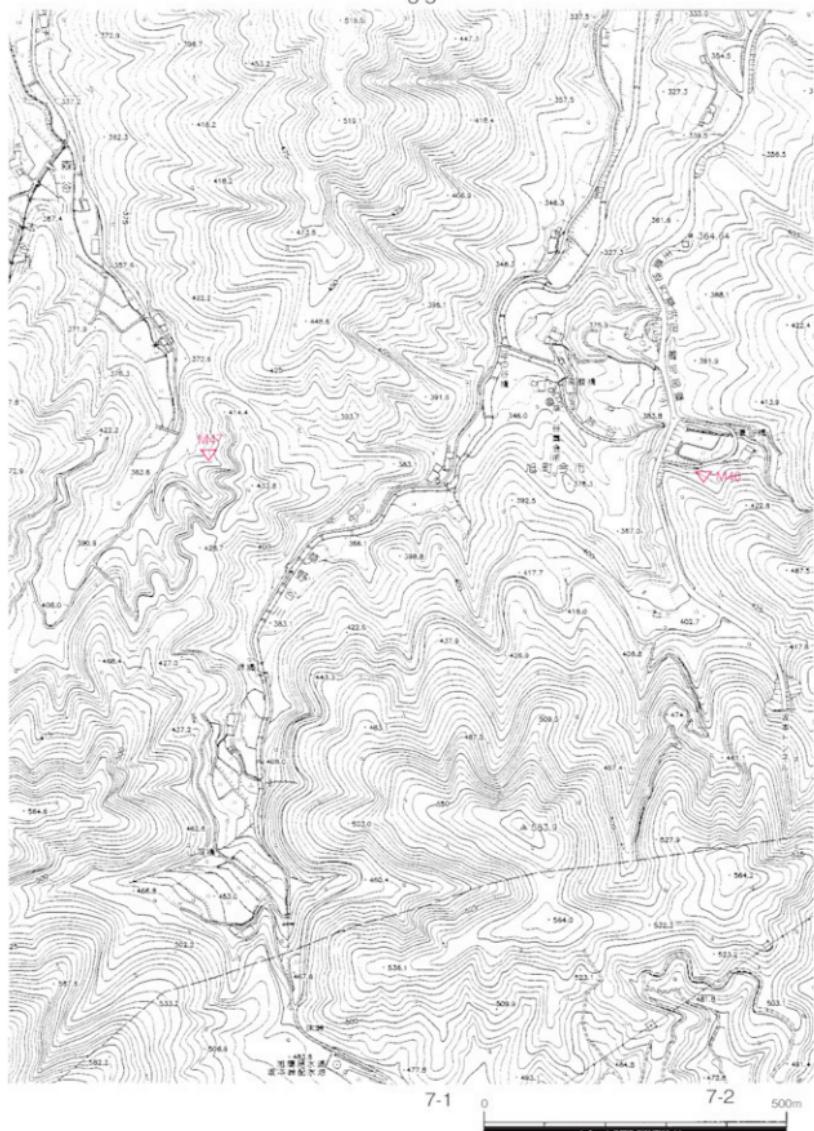
4-4

3-6



M2 加古屋城跡 M130 浜田広島街道 M131 津和野奥筋往還

3-5



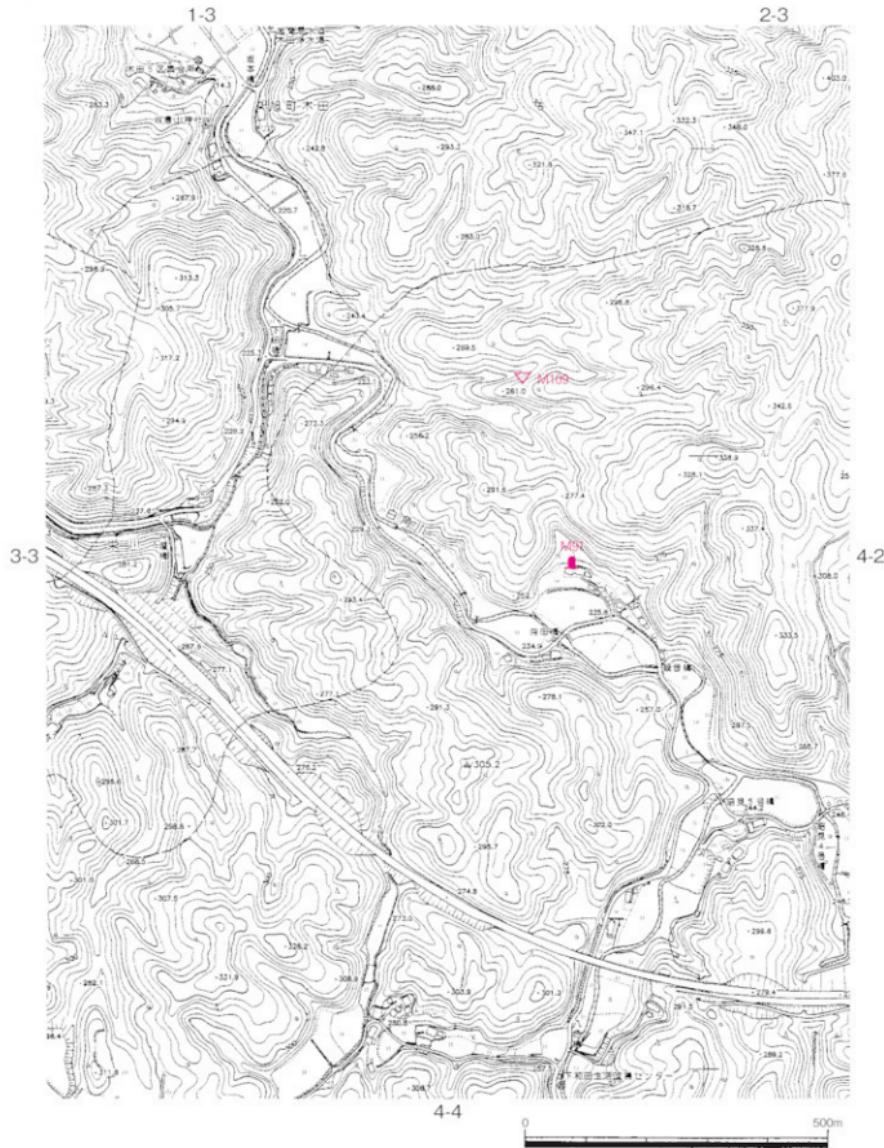
7-1

0

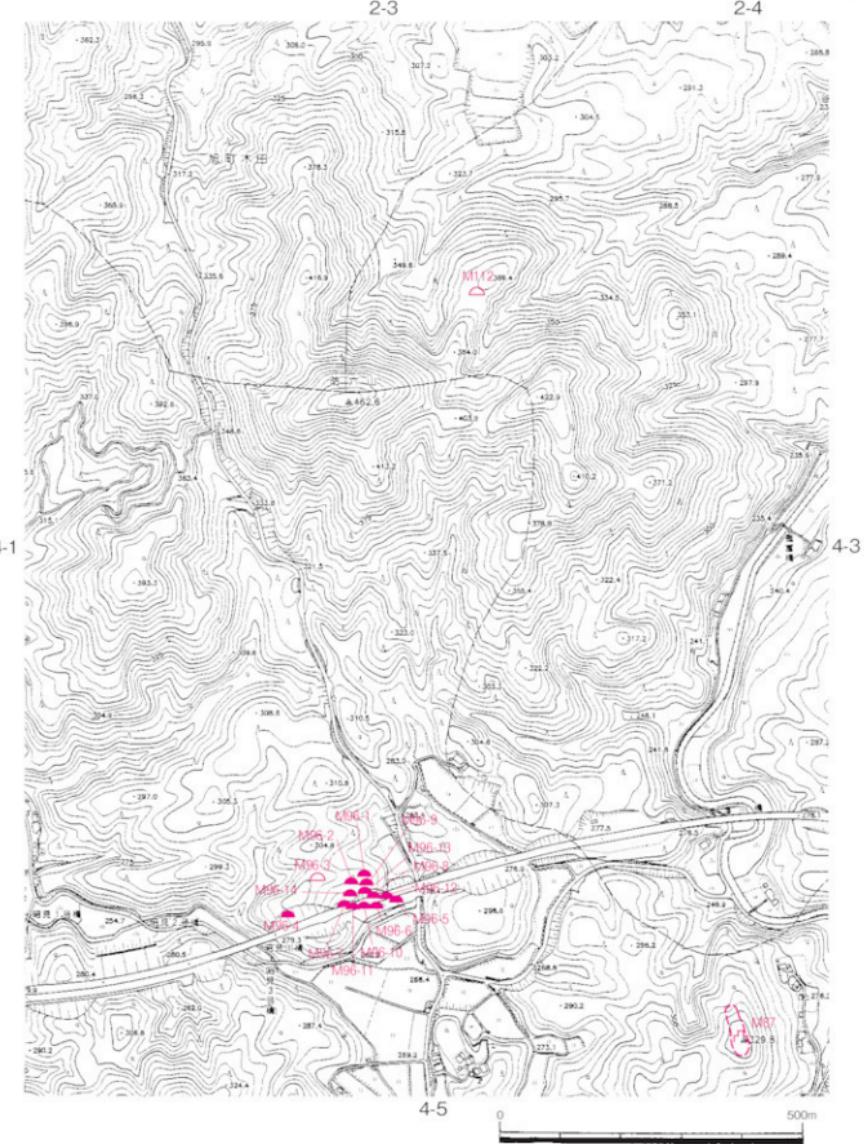
7-2

500m

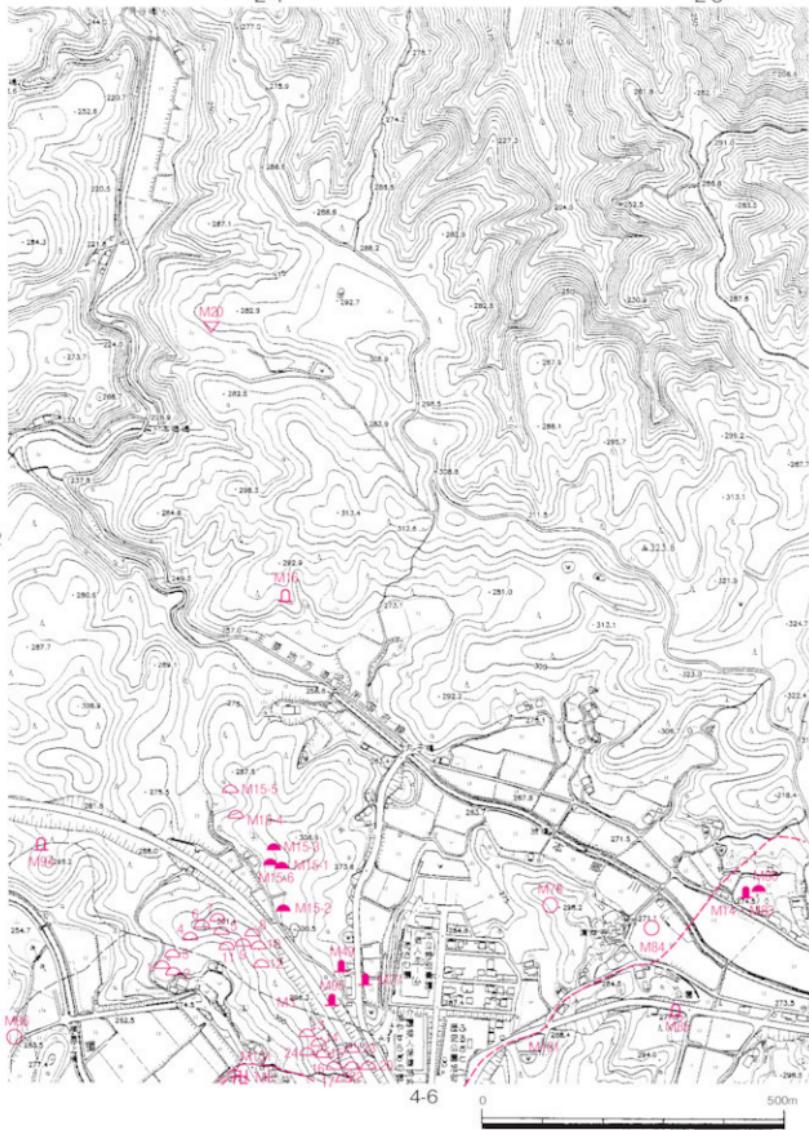
M46 神代屋谷鉄跡 M47 森谷鉄跡



M91 東田石塔群 M109 カジヤ床鉋跡

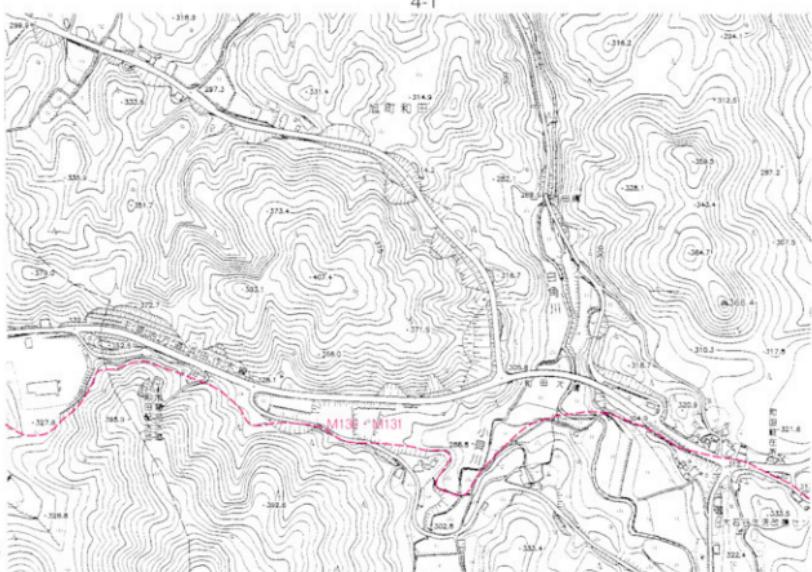


M87 野地背戸山城跡 M96-1 小才1号墳 M96-2 小才2号墳 M96-3 小才3号墳 (M113と同一)
M96-4~12 小才4号墳~小才12号墳 M96-13 小才1号横穴 M96-14 小才2号横穴 M112 防六古墳



M3-1～17 やつおもて1号～17号墳 M3-20 やつおもて20号墳 M3-22～24 やつおもて22号～24号墳
M8 重富寺跡 M14 本郷の大墓 (M18 大墓石塔群と同一) M15-1～6 新塚1号～6号墳 M16 生塚
M20 小池鉛坑跡 M49 朝日宝鏡印塔 M76 追田遺跡 M77 曽川石塔 M80 大墓横穴群 M84 桜ヶ坪道路
MS8 小砲石塔 M86 野地遺跡 M94 柳ヶ谷古墓 M95 後河内古墓群 M131 津和野奥羽往還

4-1



3-5

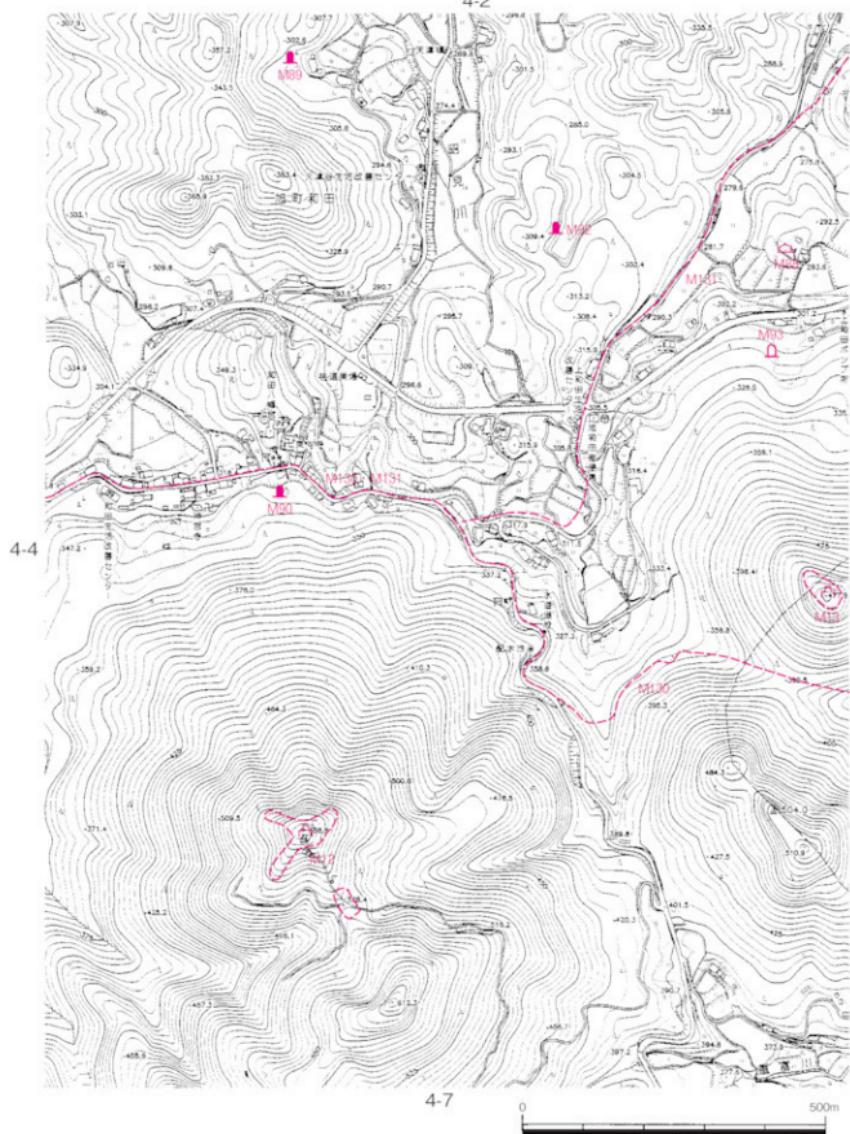
4-5



M130 浜田広島街道 M131 津和野奥筋往還

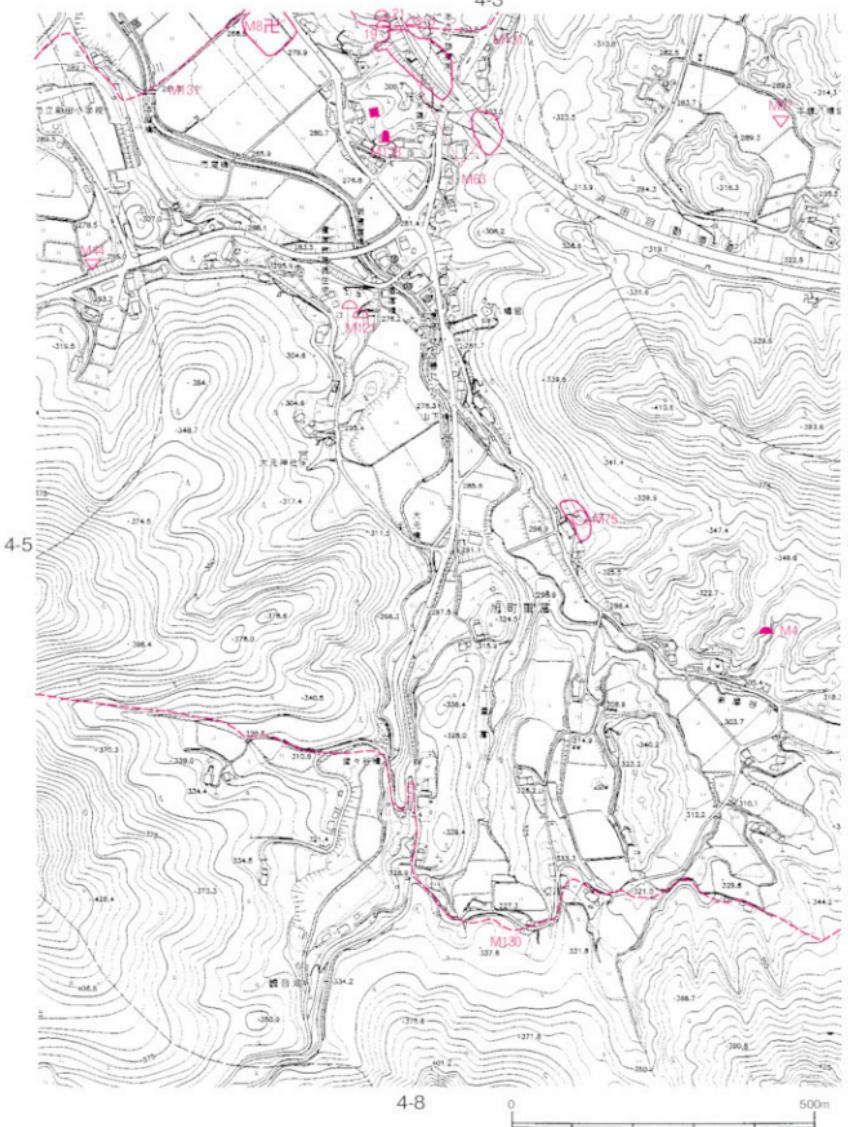
4-5

4-2



M12 大石谷城跡 M13 重富城跡（尼御前城跡） M88 向伊山古墳群 M89 奥寺石塔群
M90 神宮寺石塔 M92 向伊山石塔 M93 高山石塔 M130 浜田広島街道
M131 津和野奥筋往還

4-3



4-5

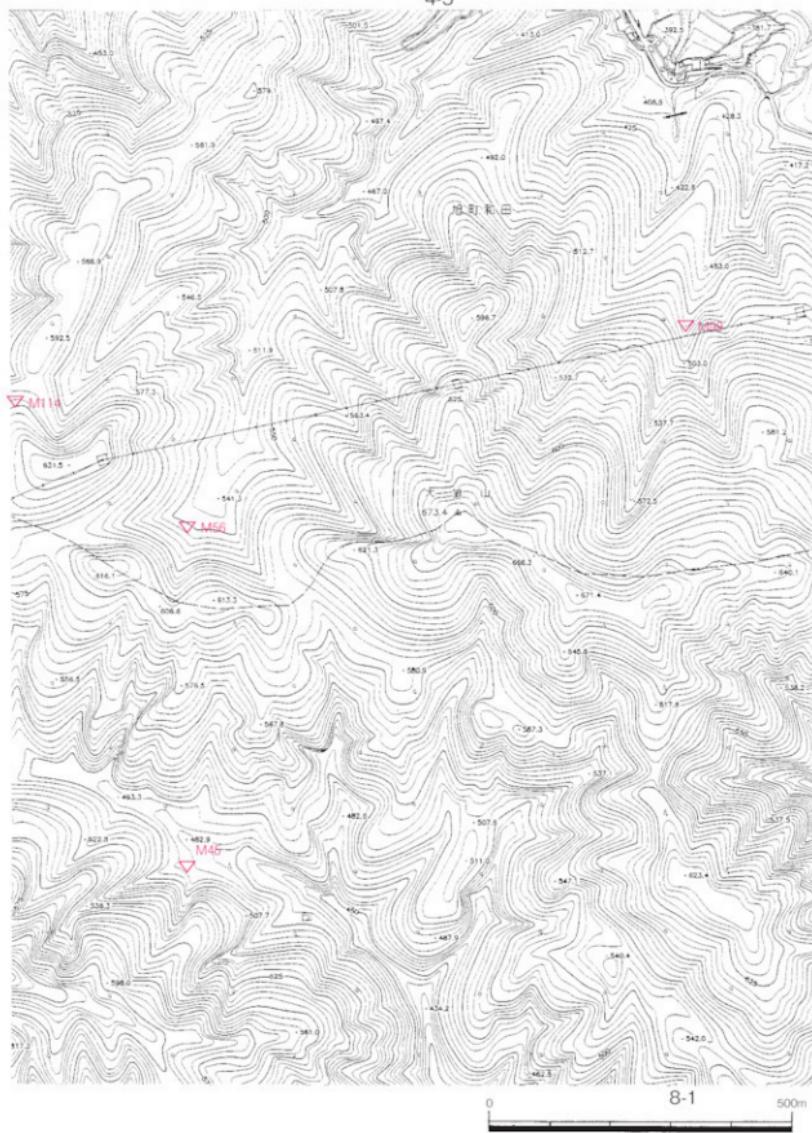
5-3

4-8

0

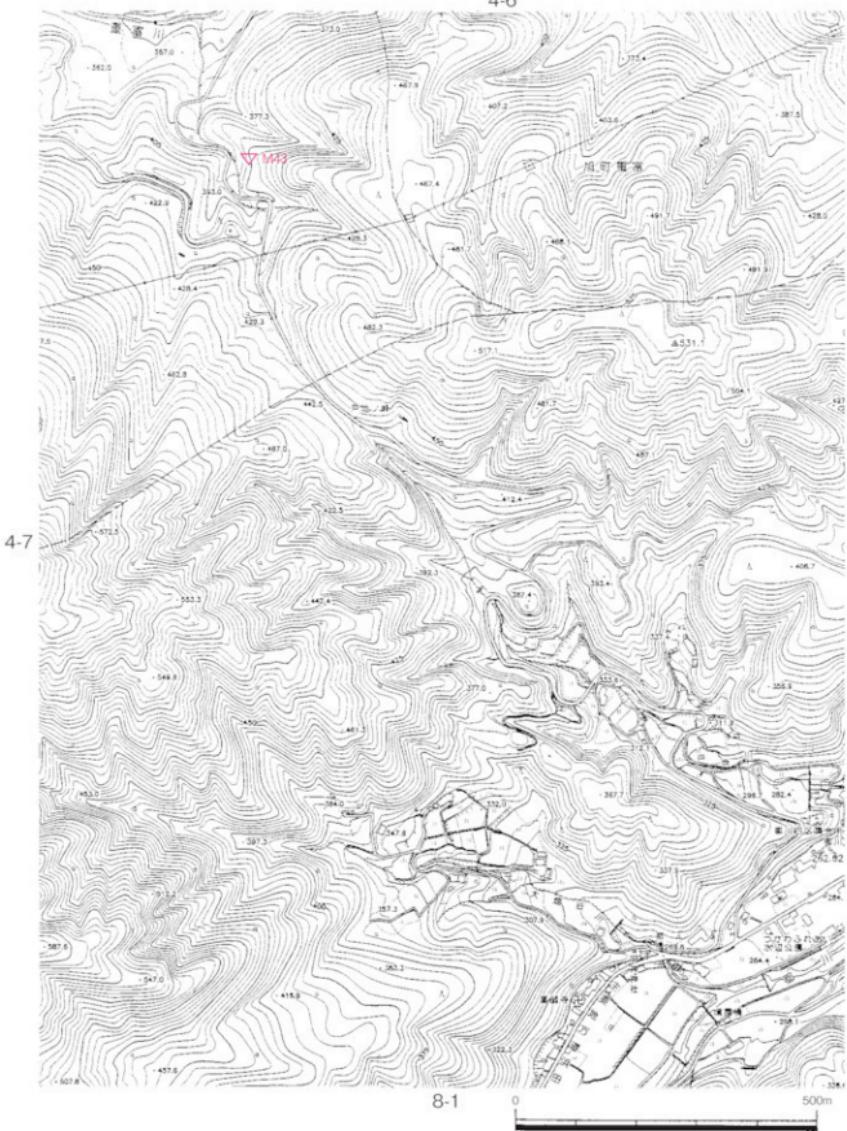
500m

M 3-18～19 やつおもて18号～19号墳 M 3-21 やつおもて21号墳 M 4 福原宅裏横穴群 M 8 重富庵寺跡
 M44 柏尾谷鉄穴溝跡 I M57 叶山御跡 M63 重富遺跡 M75 土居ノ内遺跡 M121 丸山古墳群
 M130 浜田広島街道 M131 津和野奥筋往還 M138 重富古墓



M45 梅ノ木鉋跡 M56 枝田鉋跡 M99 柏尾谷鉄穴溝穴Ⅱ M114 畠山鉋跡

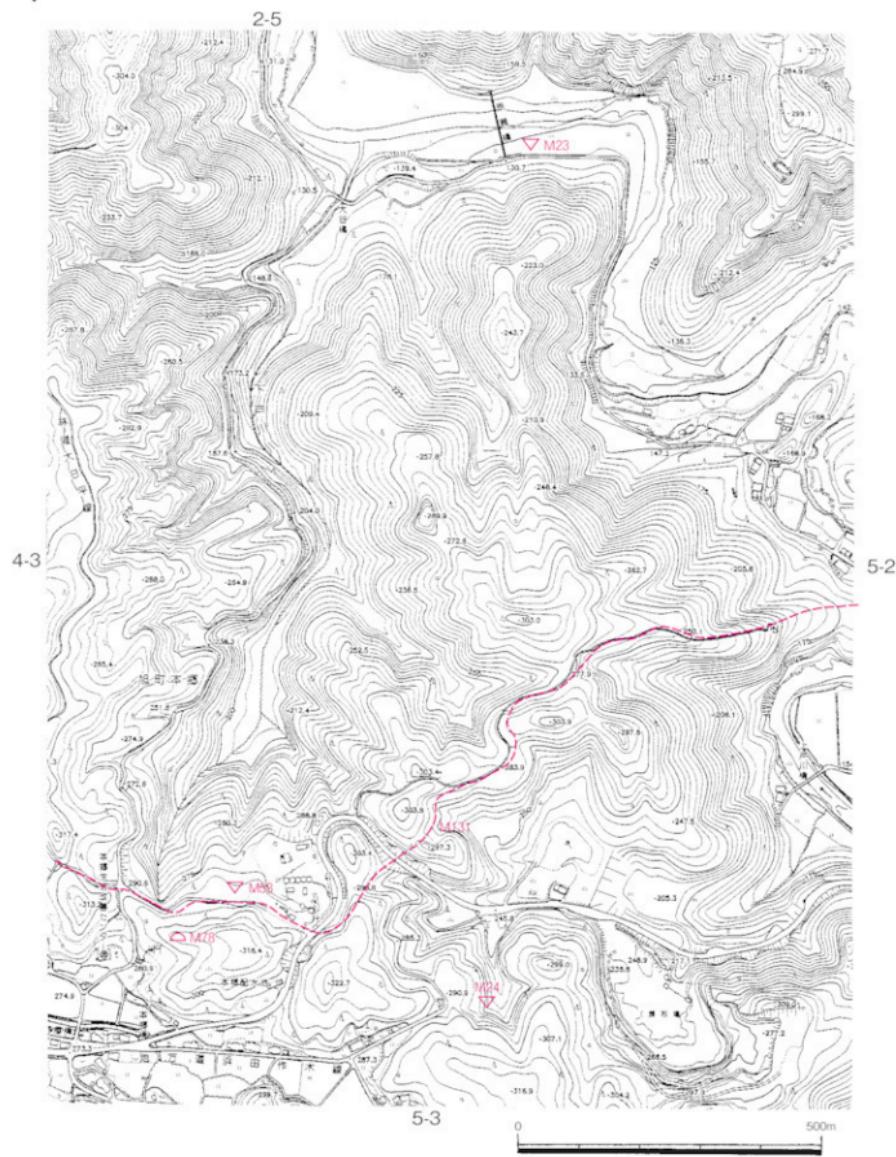
4-6



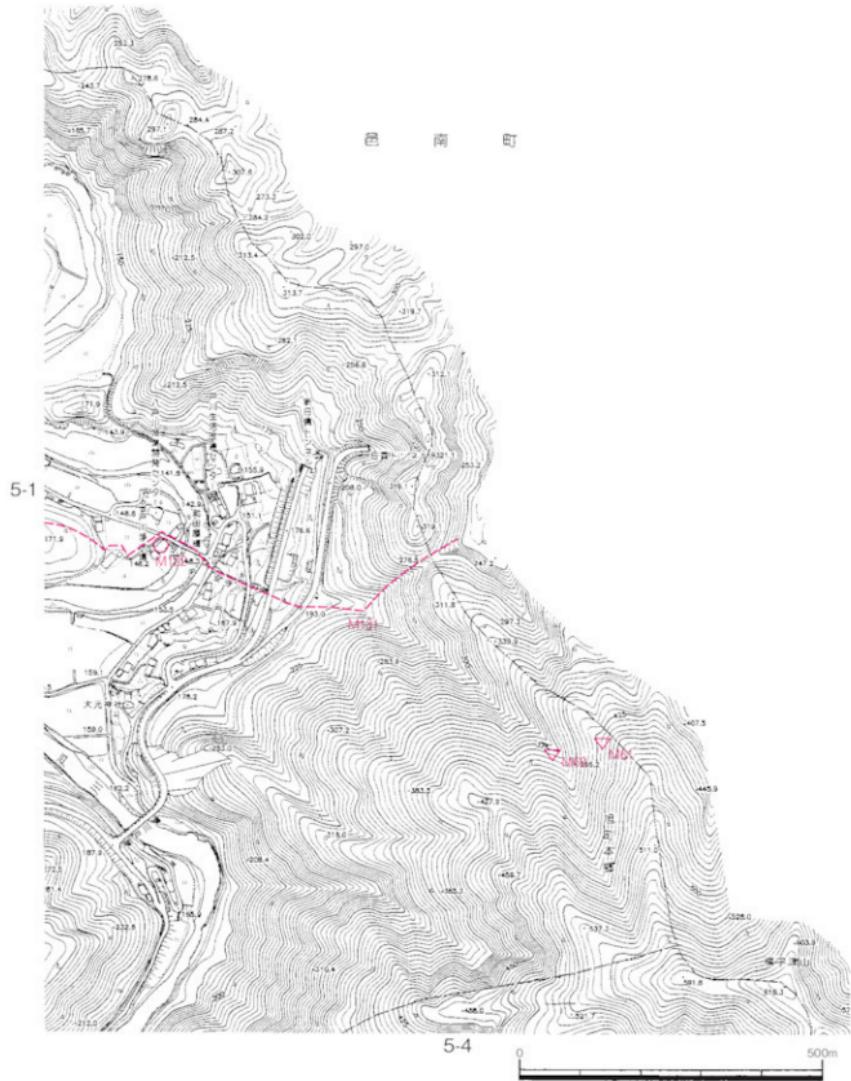
8-1

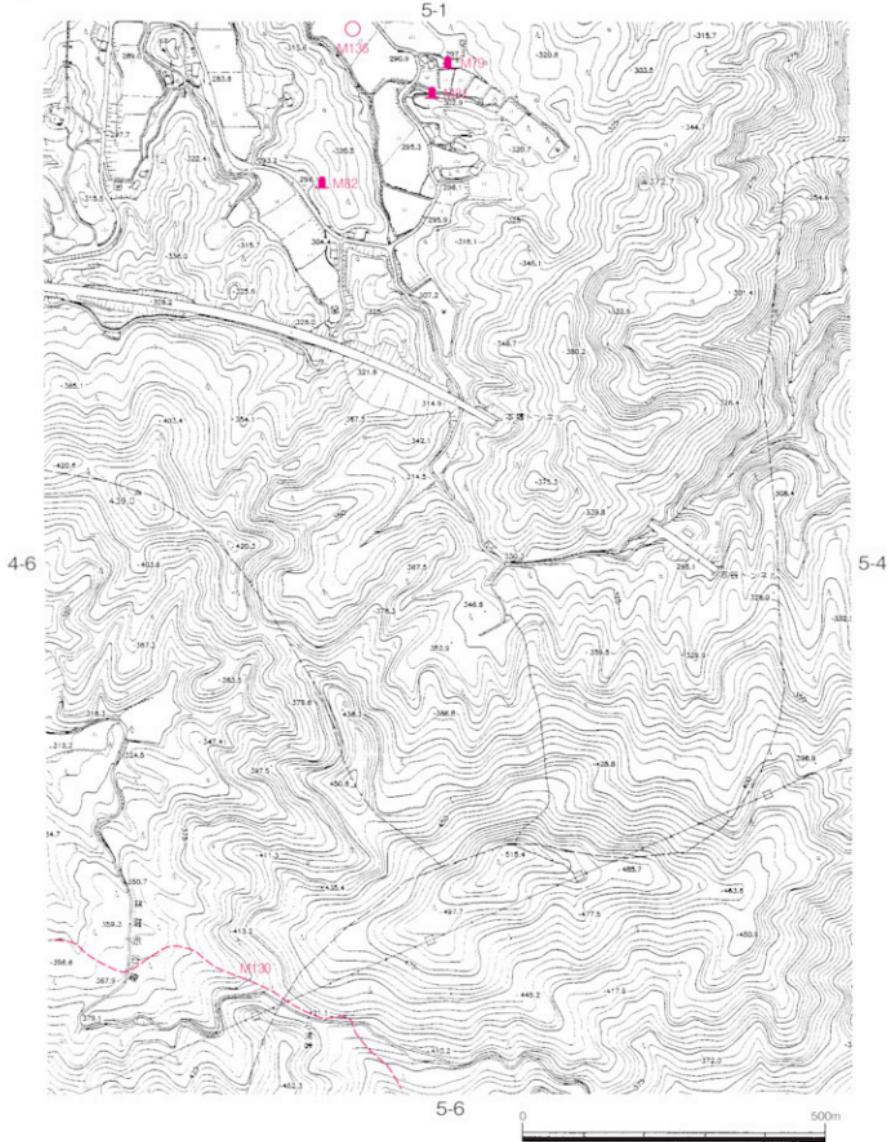


M43 戸地谷鉄穴溝跡

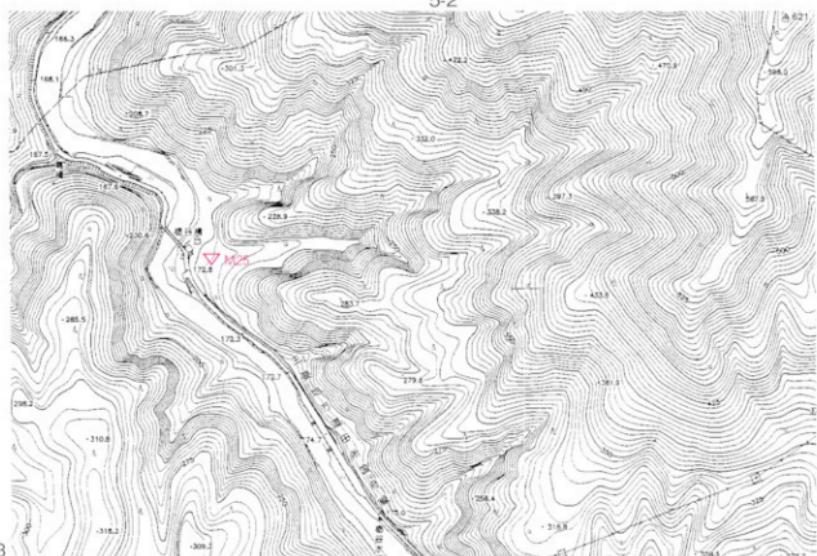


M23 赤瀬鉢跡 M24 大植峠鉄穴跡 M58 すずか谷鉢跡 M78 五歩一ソラ古墳 MI31 津和野奥筋往還





M79 後屋敷門石塔群 M81 正利庵石塔 M82 別名石塔 M130 浜田広島街道 M136 上本郷遺跡



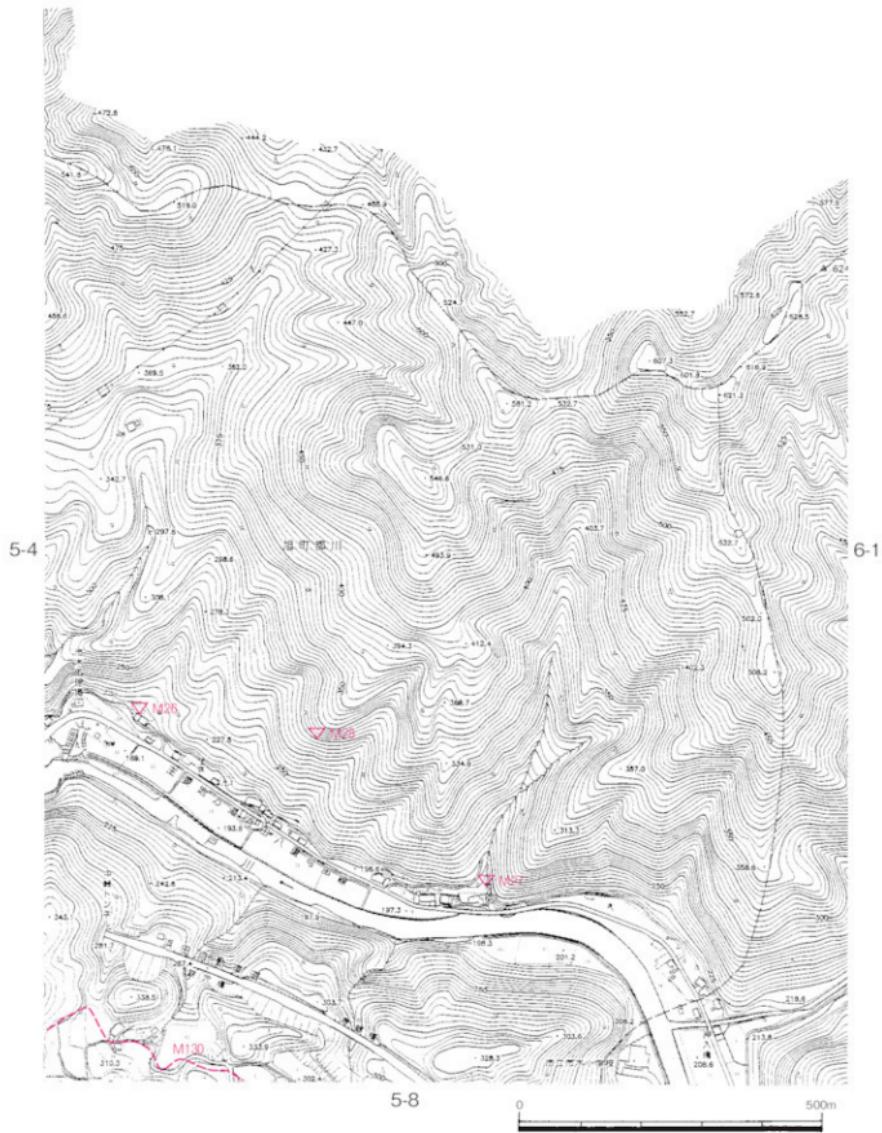
5-3



5-7



M25 大賀鐵冶屋跡 M115 赤谷石疊道 M130 浜田広島街道



M26 夏川鍛冶屋跡 M27 吉川鍛冶屋跡 M28 奥の谷鉱跡 M130 浜田広島街道

5-3



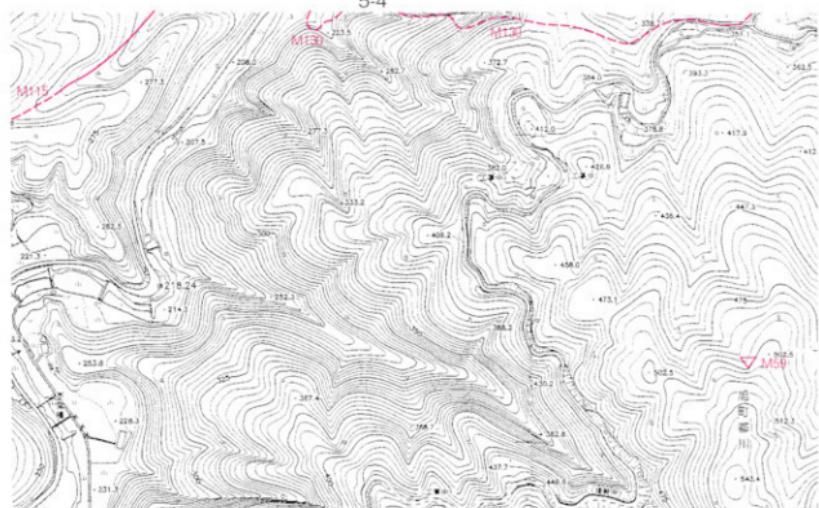
5-7



M9 京山経塚 M130 浜田広島街道

5-7

5-4



5-6

5-8



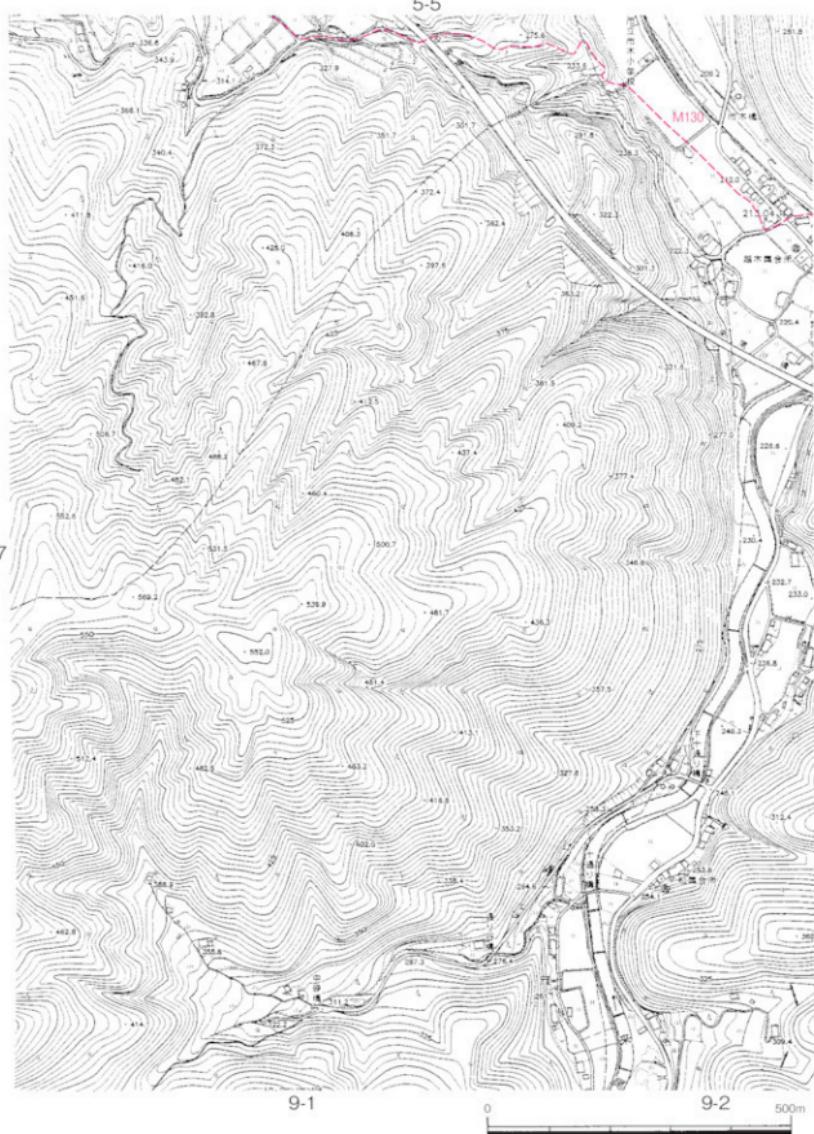
9-1

500m



M59 中鉄路 M115 赤谷石疊道 M130 浜田広島街道

5-5

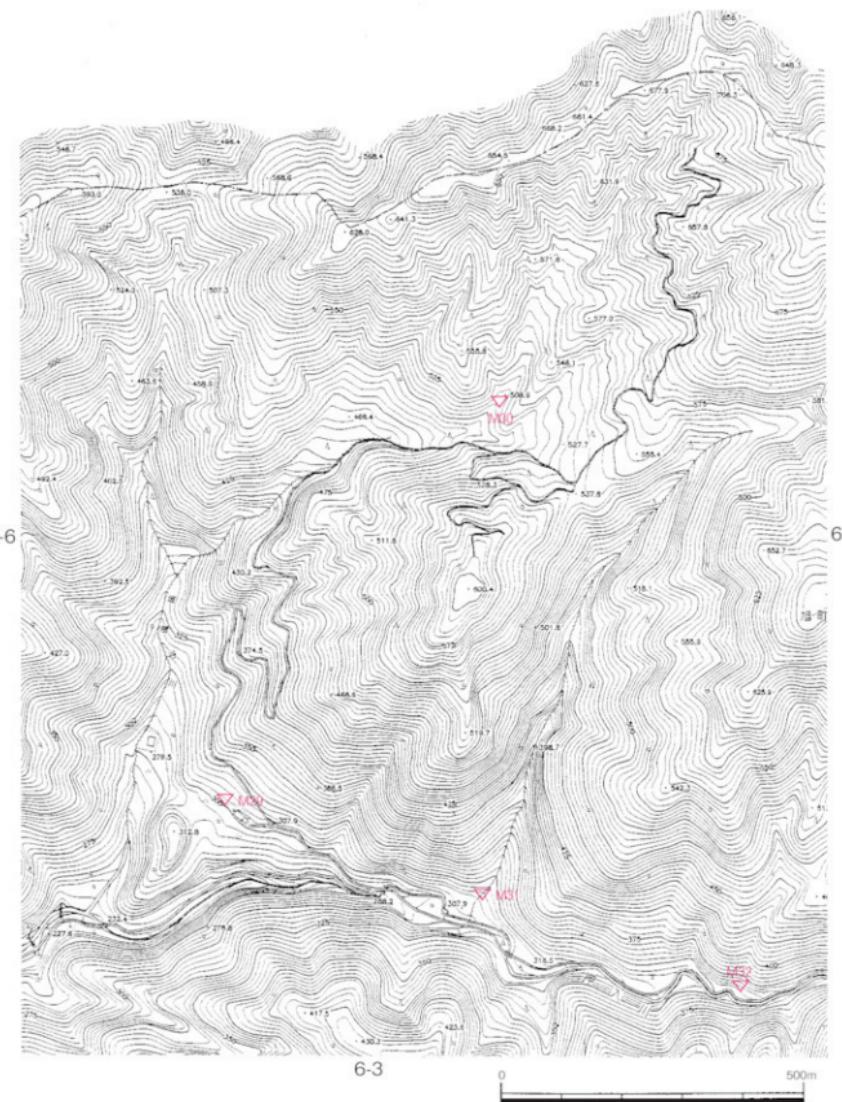


9-1

0

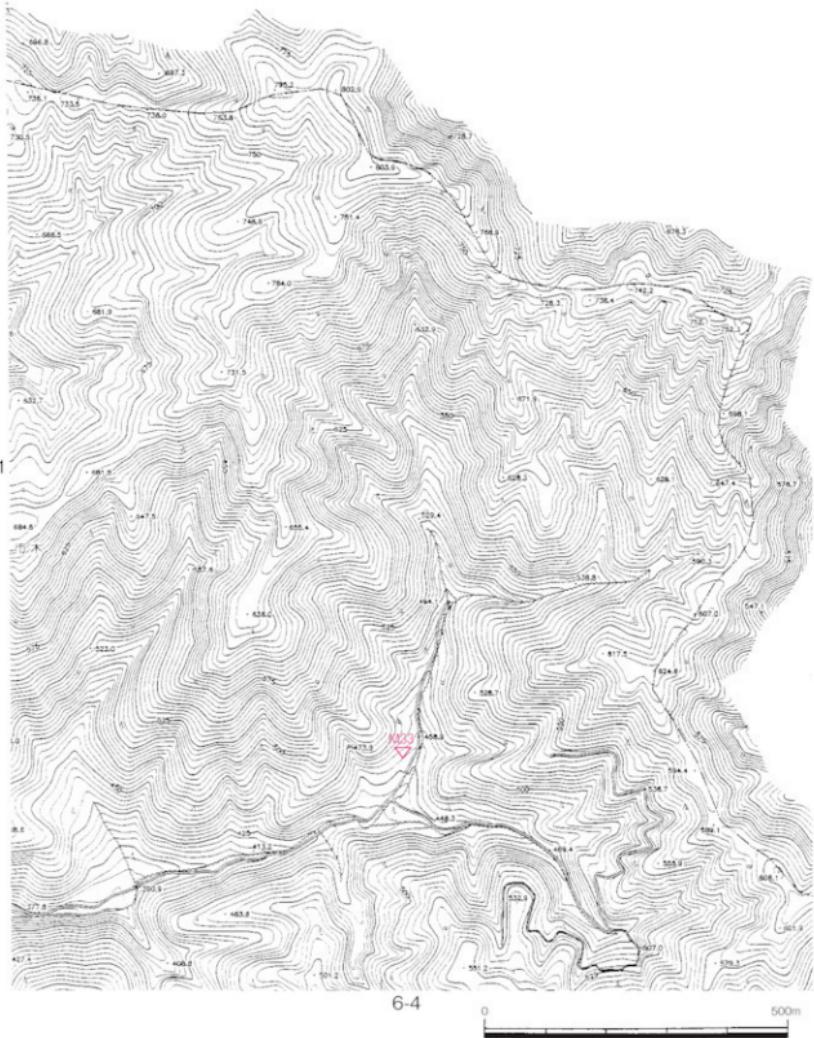
500m

M130 浜田広島街道



M29 四百谷鉄跡 M30 大原鉄跡 M31 新所Ⅰ鉄跡 M32 新所Ⅱ鉄跡

6-1



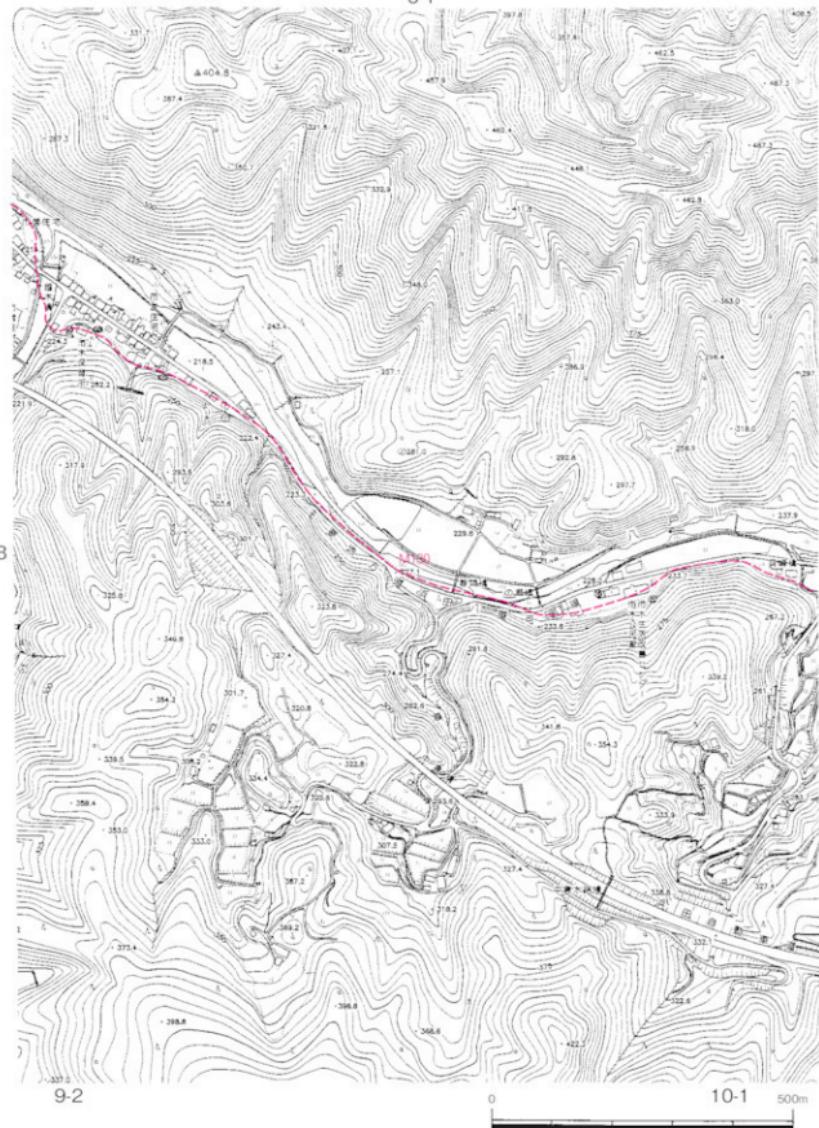
6-4



M33 木トコ口鉄路

6-3

6-1



M130 浜田広島街道

6-4

6-2



6-3

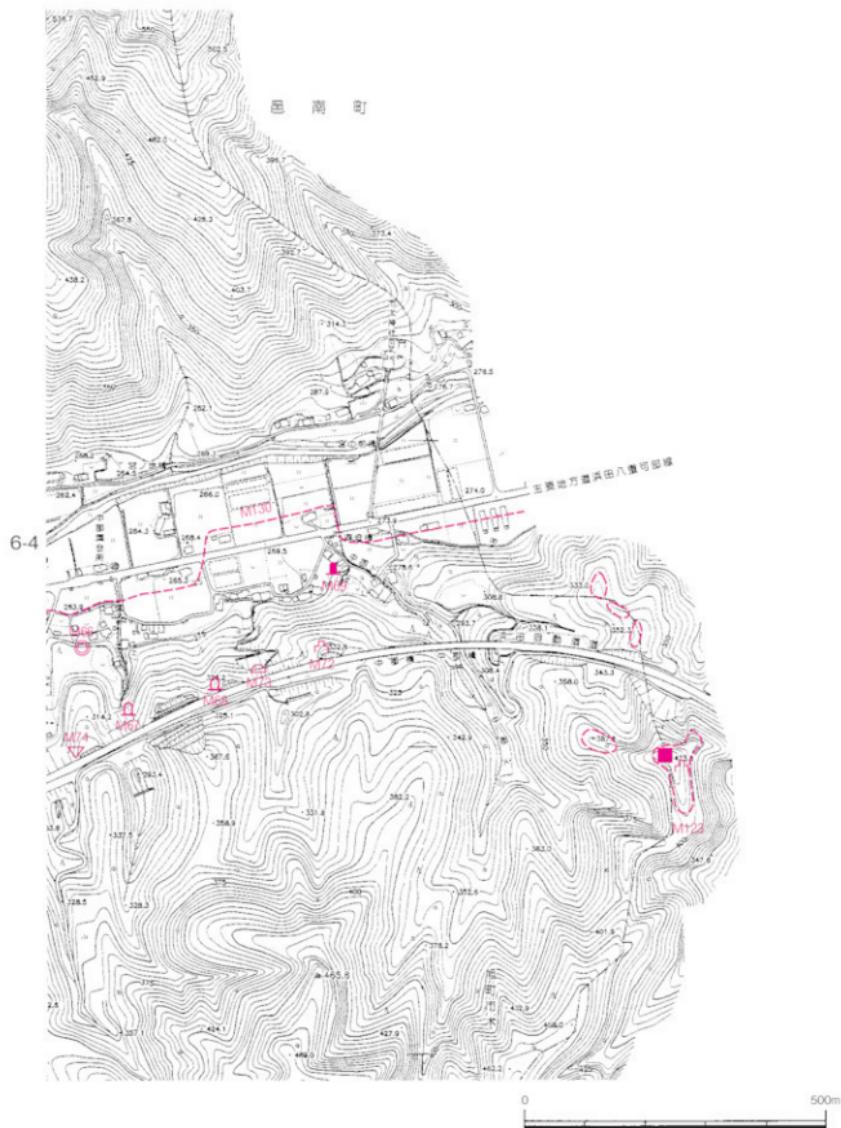
6-5



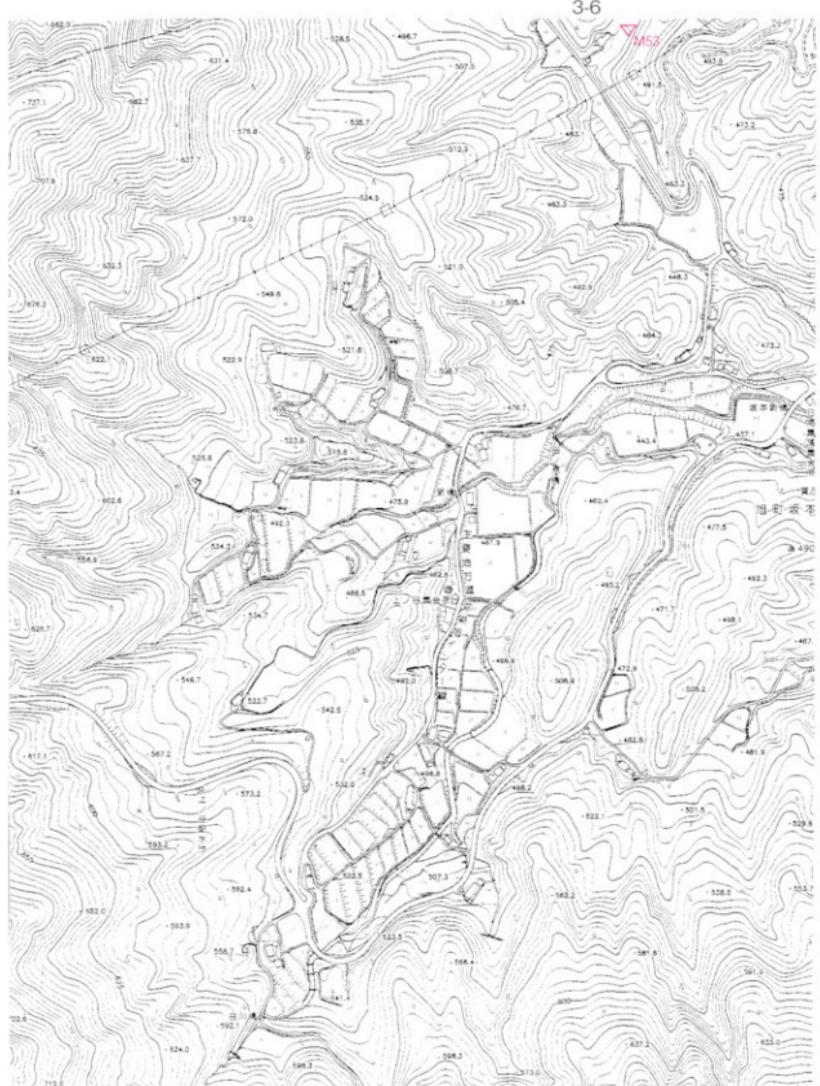
10-1



M64 内ヶ原城跡 M65 早水遺跡 M130 浜田広島街道



M66 天代遺跡 M67 天代石塔群 M68 高畠石塔 M69 西の上石塔群 M72 森追城跡 M73 森追古墳
M74 桜谷跡跡 M123 高城跡(桜尾城跡) M130 浜田広島街道



3-6

7-2

7-3

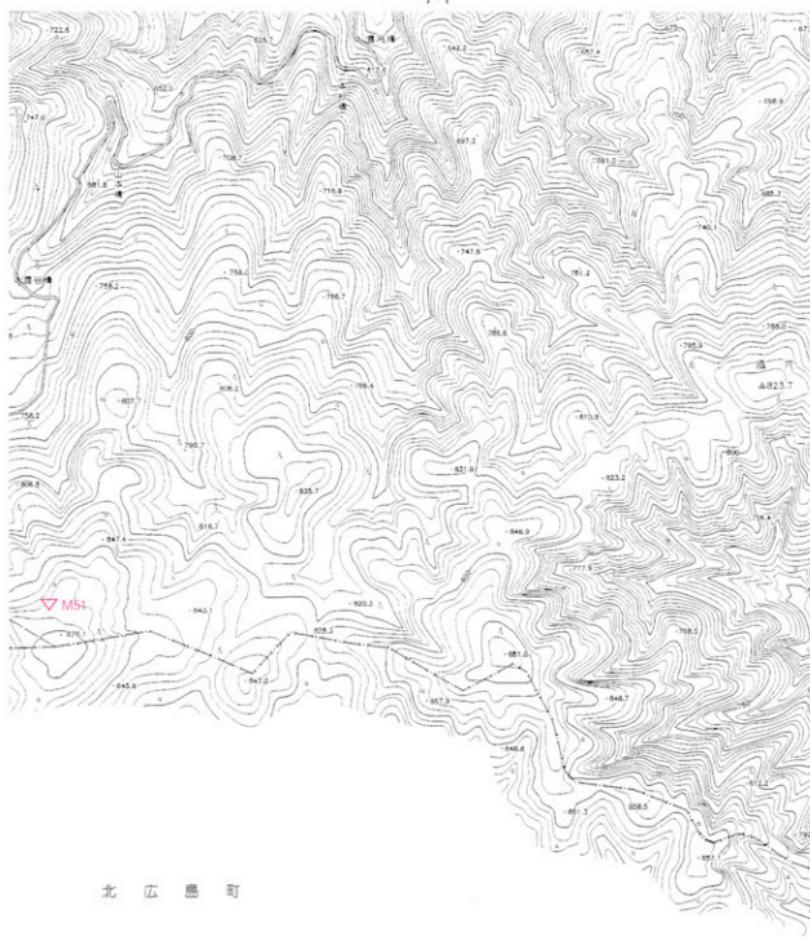


M53 錫溢鉄跡



M10 坂本経塚

7-1



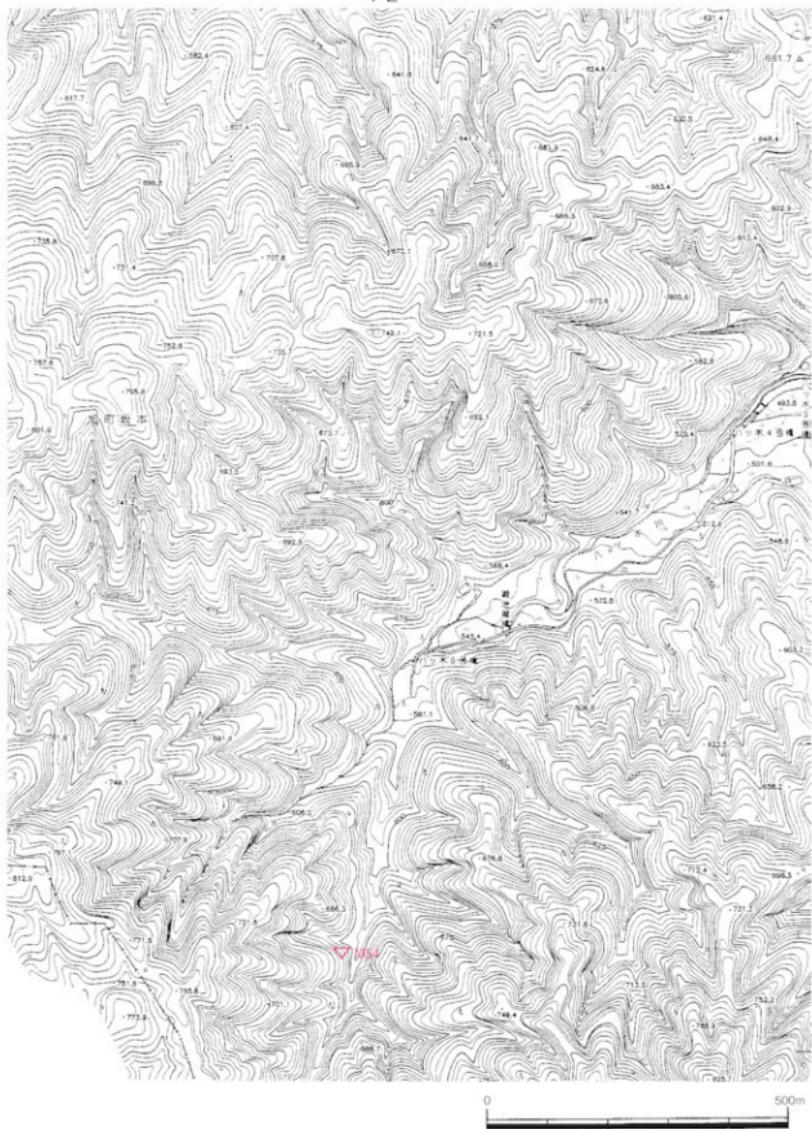
7-4

北 広 島 司

M51 雲月鉄跡

7-4

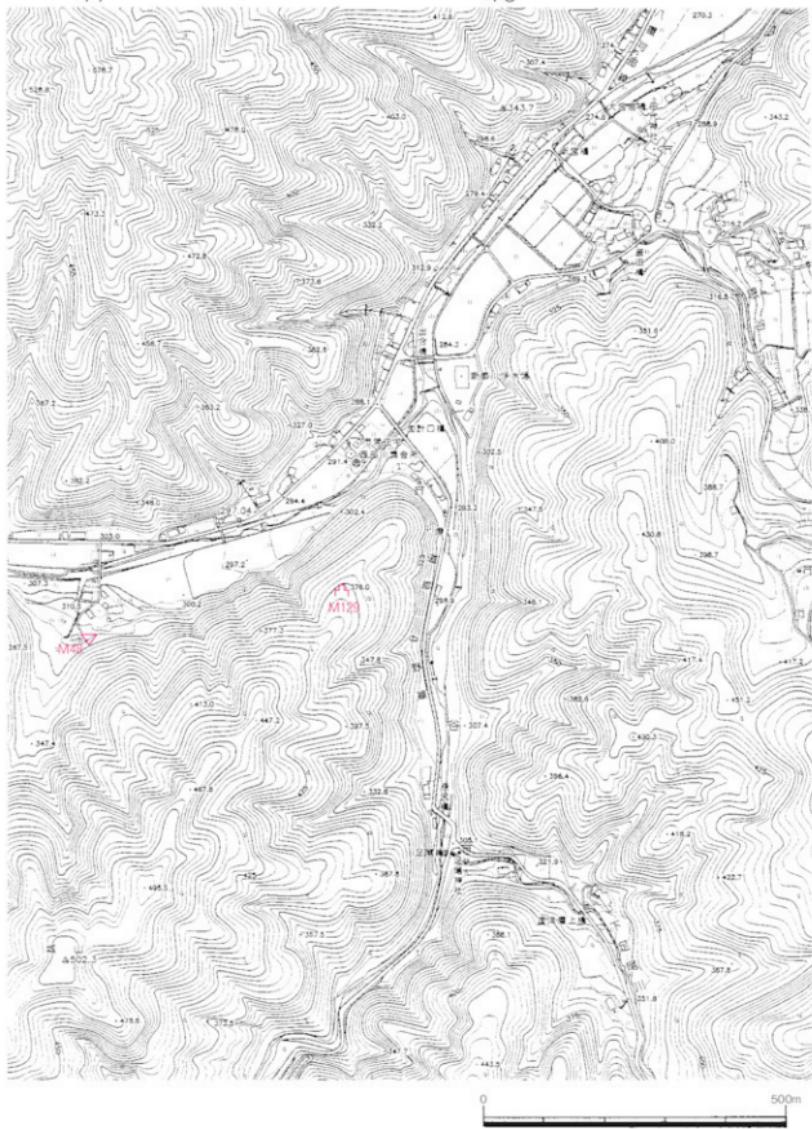
7-2



M54 ハツ木谷鉱跡

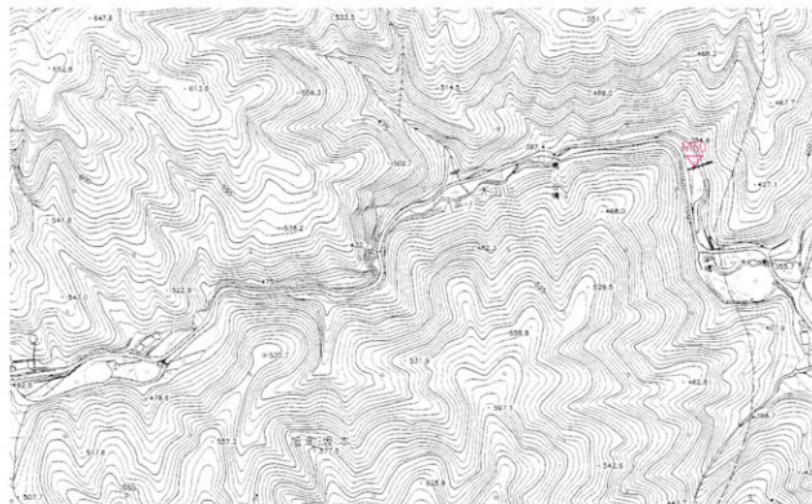
4-7

4-8

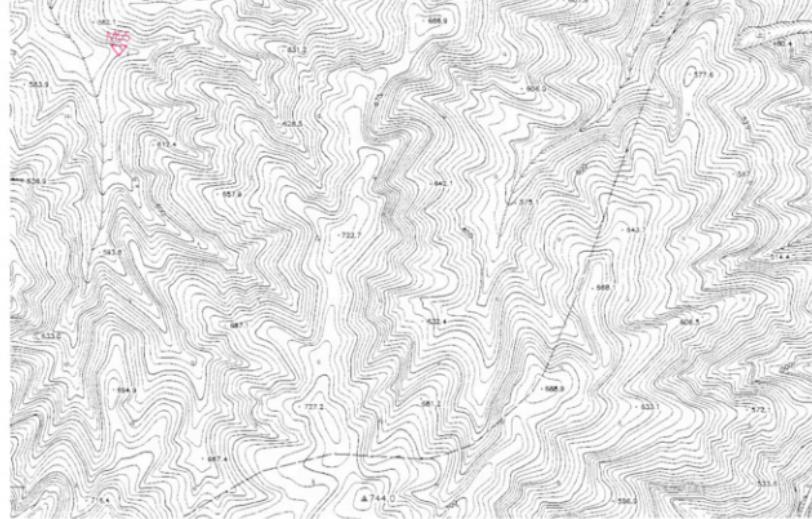


M48 日ノ原鍛冶屋跡 M129 城山城跡

8-2



7-4

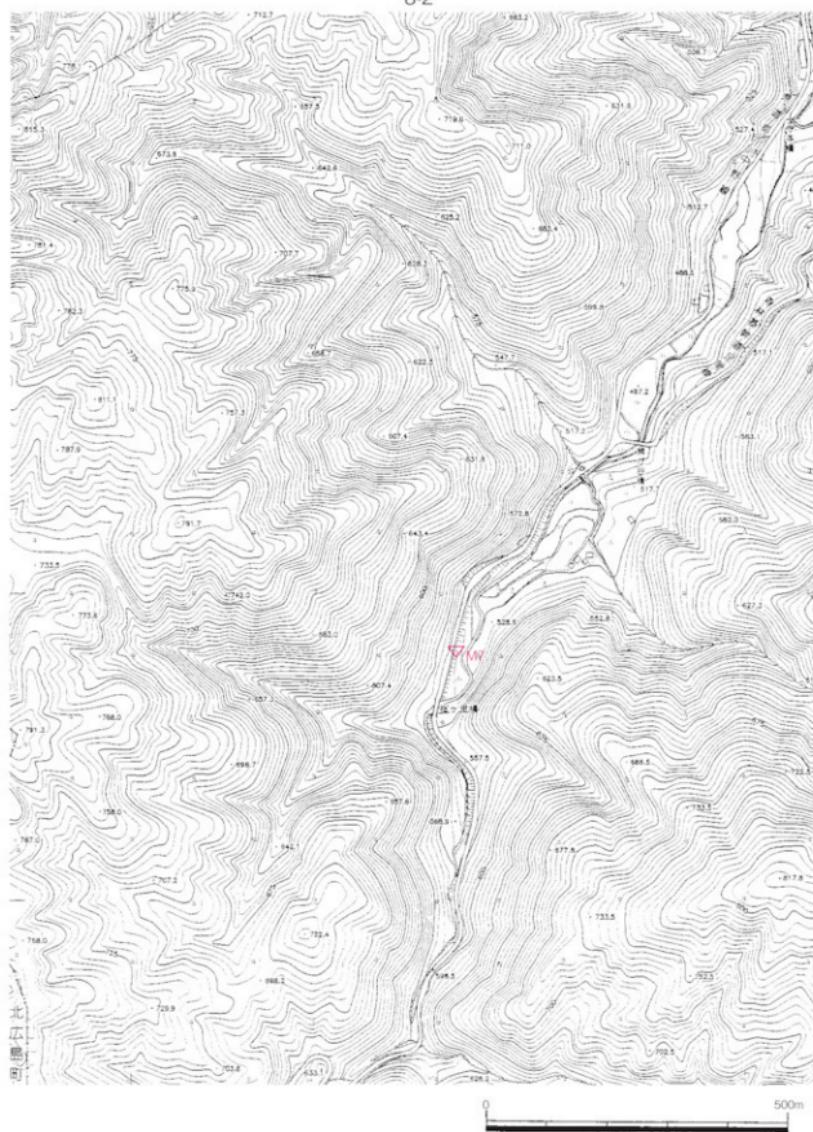


8-3



M50 谷下鉄跡 M55 オオジカ谷鉄跡

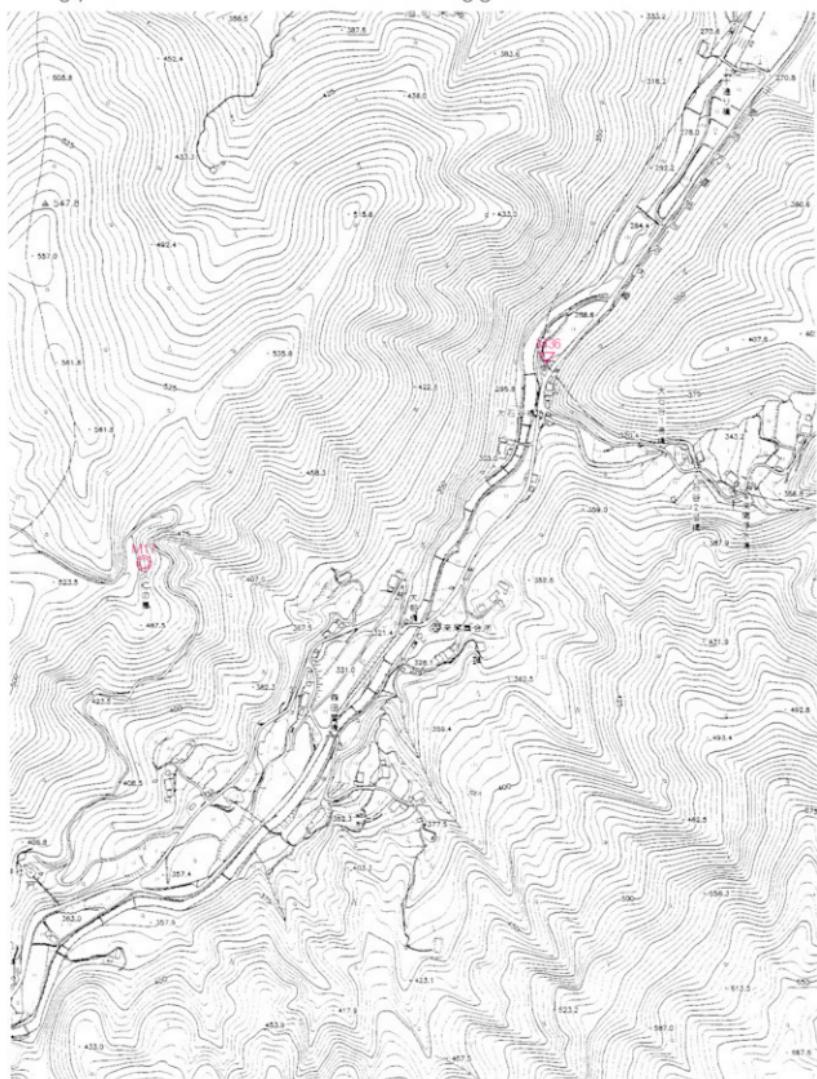
8-2



M7 政ヶ谷鉄跡

9-1

5-7



5-8

9-2

9-4



M17 久仁古墓 M36 大石谷下の跡跡

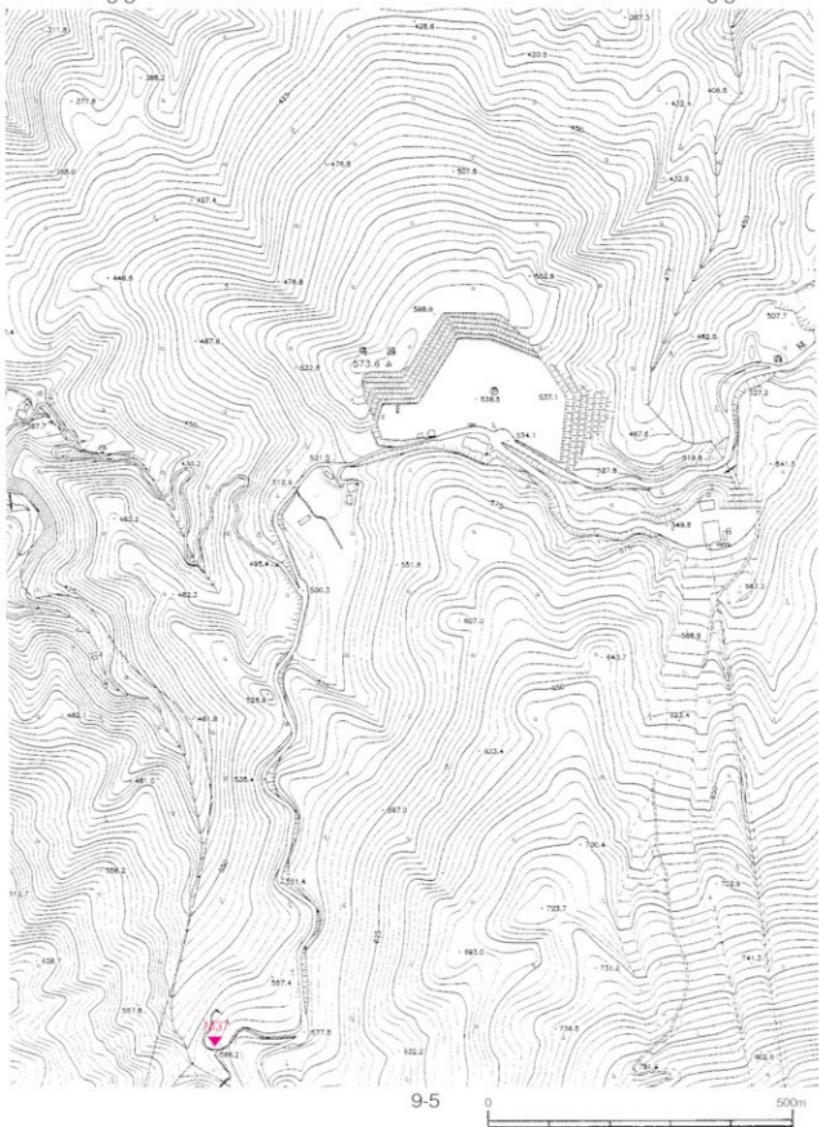
5-8

6-3

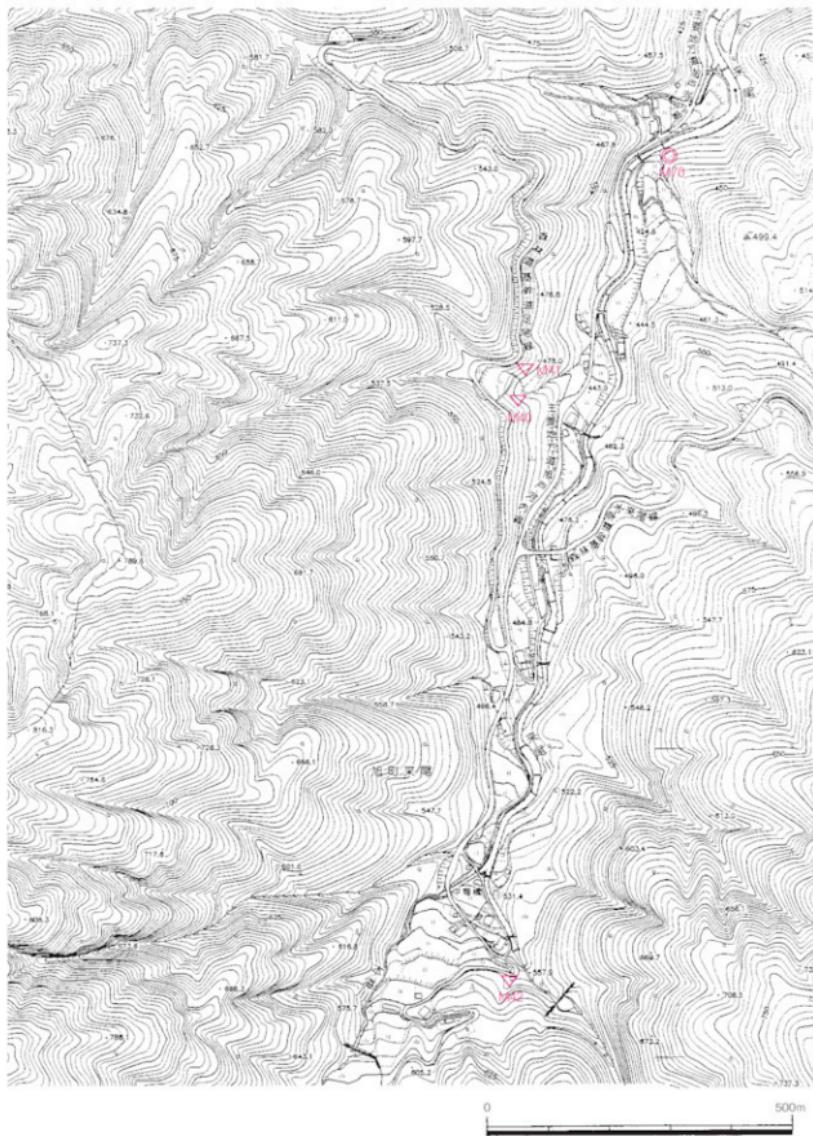
9-1

10-1

9-5



M37 大石谷中の鉄跡



M40 下つ谷鍛冶屋跡 M41 下つ谷鉄跡 M42 京良原鉄跡 M70 来尾経塚

9-4

9-1



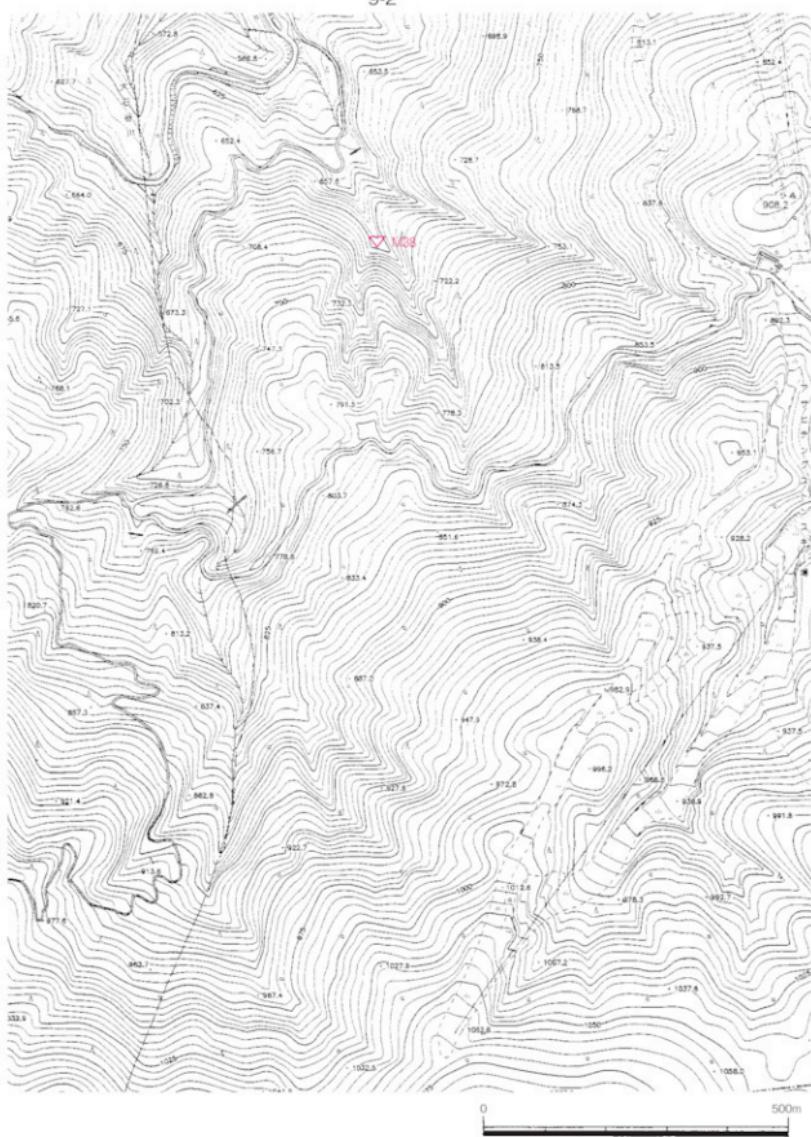
9-3

9-5

M39 岩尾谷剖面

9-5

9-2

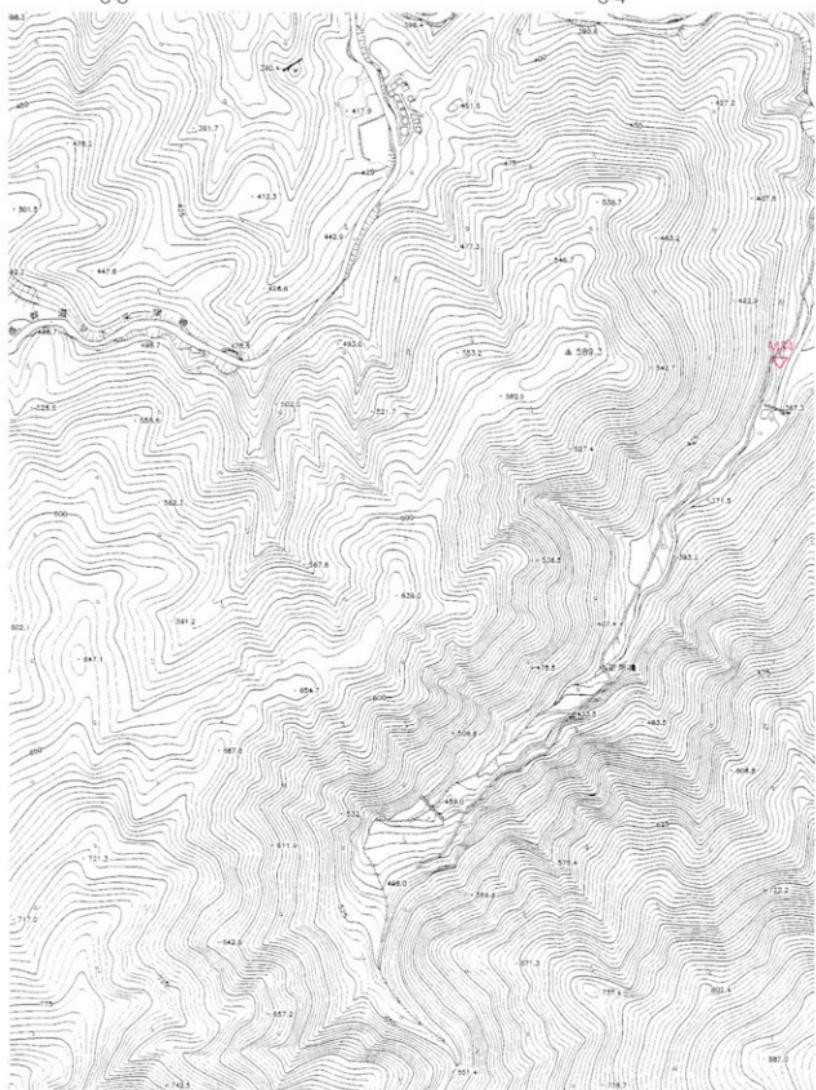


M38 大石谷上の鉄路

6-3

6-4

9-2



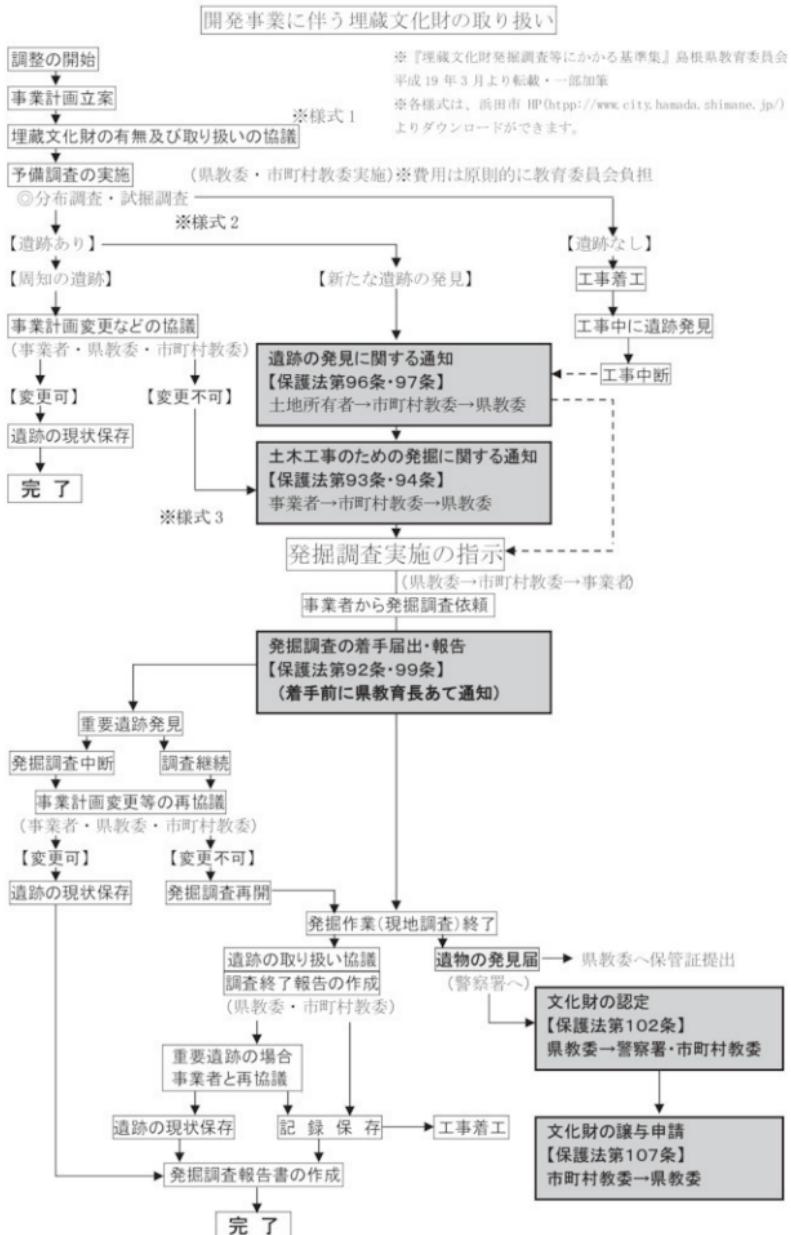
M34 早水Ⅰ鉱跡

番号	名前	種類	所在場	解説	番号	名前	施設名
25	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(一石室)	153-1
26	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(二石室)	153-2
27	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(三石室)	153-3
28	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(四石室)	153-4
29	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(五石室)	153-5
30	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(六石室)	153-6
31	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(七石室)	153-7
32	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(八石室)	153-8
33	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(九石室)	153-9
34	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(十石室)	153-10
35	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(十一石室)	153-11
36	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(十二石室)	153-12
37	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(十三石室)	153-13
38	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(十四石室)	153-14
39	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(十五石室)	153-15
40	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(十六石室)	153-16
41	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(十七石室)	153-17
42	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(十八石室)	153-18
43	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(十九石室)	153-19
44	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(二十石室)	153-20
45	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(二十一石室)	153-21
46	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(二十二石室)	153-22
47	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(二十三石室)	153-23
48	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(二十四石室)	153-24
49	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(二十五石室)	153-25
50	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(二十六石室)	153-26
51	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(二十七石室)	153-27
52	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(二十八石室)	153-28
53	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(二十九石室)	153-29
54	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(三十石室)	153-30
55	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(三十一石室)	153-31
56	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(三十二石室)	153-32
57	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(三十三石室)	153-33
58	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(三十四石室)	153-34
59	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(三十五石室)	153-35
60	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(三十六石室)	153-36
61	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(三十七石室)	153-37
62	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(三十八石室)	153-38
63	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(三十九石室)	153-39
64	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(四十石室)	153-40
65	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(四十一石室)	153-41
66	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(四十二石室)	153-42
67	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(四十三石室)	153-43
68	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(四十四石室)	153-44
69	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(四十五石室)	153-45
70	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(四十六石室)	153-46
71	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(四十七石室)	153-47
72	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(四十八石室)	153-48
73	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(四十九石室)	153-49
74	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(五十石室)	153-50
75	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(五十一石室)	153-51
76	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(五十二石室)	153-52
77	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(五十三石室)	153-53
78	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(五十四石室)	153-54
79	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(五十五石室)	153-55
80	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(五十六石室)	153-56
81	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(五十七石室)	153-57
82	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(五十八石室)	153-58
83	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(五十九石室)	153-59
84	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(六十石室)	153-60
85	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(六十一石室)	153-61
86	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(六十二石室)	153-62
87	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(六十三石室)	153-63
88	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(六十四石室)	153-64
89	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(六十五石室)	153-65
90	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(六十六石室)	153-66
91	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(六十七石室)	153-67
92	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(六十八石室)	153-68
93	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(六十九石室)	153-69
94	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(七十石室)	153-70
95	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(七十一石室)	153-71
96	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(七十二石室)	153-72
97	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(七十三石室)	153-73
98	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(七十四石室)	153-74
99	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(七十五石室)	153-75
100	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(七十六石室)	153-76
101	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(七十七石室)	153-77
102	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(七十八石室)	153-78
103	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(七十九石室)	153-79
104	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(八十石室)	153-80
105	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(八十一石室)	153-81
106	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(八十二石室)	153-82
107	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(八十三石室)	153-83
108	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(八十四石室)	153-84
109	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(八十五石室)	153-85
110	田ノ内古墳跡	古墳	田ノ内	土器	153	北山古墳(八十六石室)	153-86

主要参考文献

- 統邑智都誌刊行会1976『統邑智都誌』
- 旭町1977『旭町誌 上巻』
- 柳浦俊一1983「鳥根県那賀郡旭町出土の遺物」「ふいーるどーのーと」No.4 本庄考古学研究室
- 島根県教育委員会1985『鳥根県生産遺跡分布調査報告書Ⅱ 窯業関係遺跡』
- 日本道路公団広島建設局・島根県教育委員会1985『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
- 鳥根県教育委員会1987「鳥根県製鉄遺跡分布調査報告書」
- 旭町教育委員会1989「山ノ内14号墳発掘調査報告書」
- 旭町教育委員会1990「山ノ内18号墳」
- 旭町教育委員会1991「山ノ内28号墳 発掘調査報告書」
- 島根県教育委員会1991「中國横断自動車道広島浜田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」
- 旭町教育委員会1994「山ノ内古墳群」
- 島根県那賀郡旭町教育委員会1995「旭町遺跡分布図Ⅰ」
- 鳥根県教育委員会1996「旭町 記中巻続」
- 島根県那賀郡旭町教育委員会1996「旭町遺跡分布図Ⅱ」
- 島根県那賀郡那賀郡旭町教育委員会1997「旭町遺跡分布図Ⅲ」
- 島根県教育委員会1997「鳥根県中世城館分布調査報告書 <第1集> 石見の城館跡」
- 旭町教育委員会1998「高城跡発掘調査報告書」
- 島根県教育委員会1998「歴史の道調査報告書 津和野市街道 津和野與筋往還」島根県歴史の道調査報告書第六集
- 島根県教育委員会1999「歴史の道調査報告書 浜田広島街道・浜田三次往還」島根県歴史の道調査報告書第九集
- 島根県教育委員会2002「鳥根県遺跡地図 (石見編)」内田律雄2006「魚住銅錐を出土する古墳」『青山考古』第23号 青山考古学会
- 樹林舎2006「定本 島根県の歴史街道」
- 樹林舎2006「島根県歴史街道地図」

第3章 埋蔵文化財の事務手続きフロー



浜田市教育委員会教育長 様

浜田市教育委員会教育長 様

平成 年 月 日

住所
氏名
(担当者)

申

土地所有者
住所
氏名

申

発掘調査承諾書

文化財等の有無及び取扱いについて（協議）

浜田市が実施する埋蔵文化財調査について、下記のとおり承認します。

記

このたび下記のとおり開発工事を計画していますので、文化財等の有無及び取扱いについて協議します。
 また、計画地立ち入りと予備調査（現地確認等）の協力に同意します。

1. 調査場所 浜田市 番地
2. 調査期間 平成 年 月 日～平成 年 月 日
3. その他 埋蔵文化財に関する権利を放棄し、浜田市教育委員会に一任する。

1. 開発事業名

2. 開発計画箇所

3. 施行面積 (a)

4. 開発予定期間

5. その他（回答希望時期など）

添付書類

◎位置図 (1/25,000) * 計画図 (工事図面、地図図など)

申請式3

別記

83条第1項・94条第1項 (〇で囲むところ)
〔原文書番号〕 年 月 日

第2種式

年 月 日

浜田市教育委員会教育長 様

住所

氏名等

申

埋蔵文化財見解の「届出・通知」について

附加の埋蔵文化財保護法において土木工事等のための発掘を実施したいので、文化財保護法（昭和25年法律第214号）〔第93条第1項・第94条第1項〕、第141条第1項及び文化財保護法施行令（昭和50年政令第267号）第1条の規定により、開発書類を添付し、別記のとおり（届出・通知）します。

記

1. 土木工事等をしようとする土地の所在及び地番

2. 土木工事等をしようとする土地の面積

3. 土木工事等をしようとする土地の所有者の氏名又は名称及び住所

4. 土木工事等をしようとする土地に係る埋蔵の種類、性質及び形状及び面積

5. 当該土木工事等の目的、計画及び方法の概要

6. 当該土木工事等の主導となる者（当該土木工事等が複数契約等によりなされるときは、契約の両当事者の氏名及び住所（法人その他の団体の場合は、その名前及び代表者の氏名並びに事務所の所在地））

7. 当該土木工事等の施工担当責任者の氏名及び住所

8. 当該土木工事等の着手の予定期間

9. 当該土木工事等の終了の予定期間

10. その他参考となるべき事項

1. 所 在 地			
2. 面 積	㎡		
3. 土地所有者	姓 名		
4. 埋蔵の種類	歴史地 古墳群 墓 墓群 宮内神社 墓地 神社 古墳 機械廠 その他の墓 生活遺物 その他の遺物（ ）		
5. 遺跡の名前	（原書番号） 員 種		
6. 遺跡の現状	完固 不固 備註 伝説 歴史的 情報 古跡（ ）		
7. 遺跡の時代	縄文 古代 古墳 春秋 平野 中世 古代 その他の（ ）		
8. 工事の目的	道路 新築 既設 改修 河川 清流 ダム 建築建設 集合住宅 個人住宅 工場 建築 個人住宅工場又は工場 その他建物（ ）		
9. 完成予定期間	土地区画整理 地圖造成 ゴルフ場 緑化開発 ガス 電気 水道等 設置基盤整備事業（轄道等を含む）		
10. 其他の書類提出事項	上級役員、その他の関係（ ）		
11. 工事の種類			
12. 工事主体者	姓 名		
13. 施行責任者	姓 名		
14. 着手予定期間	年 月 日	終了予定期間	年 月 日
15. 加算項目			

【注意事項】 ①太線内は届出・通知者が記入。②勘査事項欄は浜田市教育委員会で記入。

③遺跡の規模・現状・時代及び工事の目的欄は該當項目を〇で囲み、該当項目

ない場合は（ ）内に記入。

添付書類

土木工事等をしようとする土地及びその付近の地図並びに当該土木工事等の概要を示す書類及び図面

第4章 旭自治区の埋蔵文化財について

旭自治区（市町村合併以前の那賀郡旭町）では、中国横断自動車道関連事業や梨園造成事業などで発掘調査等が行なわれてきた。1977年刊行の旭町誌で古知の遺跡についての来歴がまとめられており、県教委が実施した中国横断自動車道の発掘調査報告書には周辺の遺跡として古墳出土品や石塔類が掲載されている。1995～1997年には旭町遺跡地図が刊行されている。

なお、旧旭町ではM9 京山経塚・M10 坂本経塚・M17 久仁古墓・M70 来尾経塚など、様々な伝承が残る集石や石垣のある方形段を経塚や古墓としている。現地確認では雪中で墓標を目立たせたり岩の露頭が多く河原石も取り易いためか、近世以降から現代に統く墓地の中に集石や石垣が目立つ。集石内に石造物が混じる場合は古墓とできるが、大半が時代不明の集石や石垣で遺跡と断定できるものは少ない。

今回の遺跡地図作成に伴う分布調査結果と旧旭町作成の埋蔵文化財包蔵地調査カード等を基に、主な埋蔵文化財の概要を時代順に紹介する。古墳と横穴の時期は文末で表にまとめており、須恵器の時期は石見1～10期の区分（榎原2010）を用いた。

M122 坂井原遺跡（第1・2図、表1）

本郷戸川に所在し、標高約150mの八戸川左岸の河岸段丘上に位置する。1992年の宅地造成時に縄文土器や石器等が出土し、採取された遺物が旭歴史民俗資料館に保管されている。江の川の支流である八戸川の上流には、堀田上遺跡、今佐屋山遺跡、郷路橋遺跡などの縄文遺跡が所在している。

出土遺物は縄文土器を中心とし、その他に石器・須恵器・土師器・近世陶磁器が少量出土している。出土遺物の点数は表1に示している。表外では、縄文土器体部小破片がコンテナ3箱分出土している。縄文土器は、中期に遡る撫糸文地の土器が5点確認されるが、その大半が後期前葉の崎ヶ鼻式に相当する縁帶文土器である。後期中葉の土器の出土ではなく、後期後葉の凹線文土器（元吉住山Ⅱ式、宮滝式）が14点出土している。

1は撫糸文の施された体部片である。縄文時代中期と思われる。

2～11は、崎ヶ鼻式の深鉢である。2は山形突起部に多重沈線による入組文を施す。また突起部にはともに貫通しない径2mmの小孔が2ヶ所、径4mmの孔が1ヶ所確認できる。3・4は波頂部付近に区画文が見られる。5は口縁外面に縄文を施した入組文を描き、波頂部中央には径3mmの小円孔を穿孔している。6は口縁外面に縄文を地文として施した後、1条の沈線を引いている。7・8は口縁部に2段の刻み目を入れるものである。7は上下方向より刻みをいれ、8は水平方向と下方より刻みをいれている。9は口縁外面に縄文のみを施し、沈線は見られない。10・11は口縁部上面に刻み目を施し、体部は無文である。同一個体の可能性がある。

12～17は有文浅鉢。12は縄文地に1条の沈線を施している。口縁部下半はミガキにより縄文が消えているところもある。13には、一部刻み目が見られる。14は口縁部に2条の沈線を施している。胴部に膨らみがない直口器形の深鉢の可能性もある。15は口縁外面に1条の沈線と列点を施している。外面を丁寧に磨いており、黒色を呈している。16は外面の全面に縄文を施している。ポール形の浅鉢か。17は内面に断面台形の突帯をつくり、胎土には金雲母を含んでいる。類例の見られない形状である。

18～20は鉢。18の口縁部には縄文を施す。19は口縁部に刻み目をいれ、内外面とも赤褐色を呈している。20は内外面とも磨きが施される。

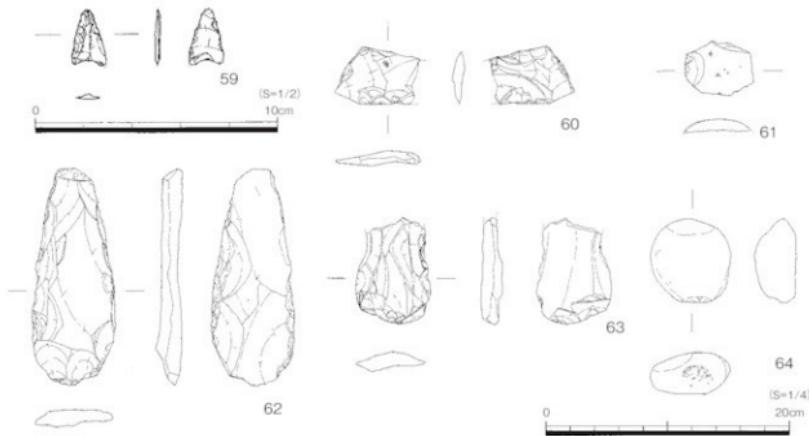
21・22は壺。21は多重沈線による入組文。口縁部には3条の沈線を施す。緻密な胎土で、内外面を丁寧に磨いている。22は口縁部で、内外面とも丁寧に磨きを施す。23は注口土器の注口部である。

24～29は有文の体部片である。25は、突带上に3列の列点を刻んでいる。26は頸胴部境界に段がつき、胴部には縄文が施される。28には、筋の細かい縄文が施されている。

30～37は、小池原上層式土器である。いずれも器面をていねいに磨き、黒褐色を呈している。32～34は同一個体の可能性がある。35は金雲母を含む胎土である。



第1図 坂井原遺跡出土遺物（縄文土器）



第2図 坂井原遺跡出土遺物（石器）

表1 坂井原遺跡遺物組成

口縁部

粗製深鉢A（内面押圧）	30
粗製深鉢B（口縁部先縁）	7
粗製深鉢C（口縁部先縁）	50
粗製深鉢D（口縁部丸く収める）	113
粗製深鉢（口縁部朝日）	8
精製深鉢	40
深鉢（縁帶文？）	37
鉢（口縁部縄文施し）	18
鉢（口縁部無文）	23
鉢（口縁部刻目）	1
有文浅鉢	9
有文浅鉢（口縁部縄文）	5
無文浅鉢	6
壺	2
九州系磨削縄文（小池原上層式・鋸崎式）	9
四線文（元吉住山Ⅱ・宮流）	14
不明	7
合計	379

体部

縄文	5
RL	82
LR	9
無筋	1
擬似羽状	4
撫り不明	8
二枚貝条痕	56
巻貝柔痕	5
九州系磨削縄文（小池原上層式・鋸崎式）	11
磨削縄文（縁帶文土器）	8
沈縄文	18
ミガキ	93
壺	1
壺or注口上器の沈縄文	2
注口部	1
浅鉢肩曲部の刺み（縁帶文に伴う）	5
鉢肩部に縄文	26
不明	16
合計	351

底部

平底	35
高台底	20
低高台底	37
不明	12
紋様あり	3
合計	107

石器

石鏃	1
刃器（半磨製石器）	1
打製石斧	2
磨製石斧	1
剥片（黑曜石4点、安山岩2点）	6
磨石・敲石	6
石錐？	1
砥石	1
合計	19

その他

須恵器	3
土師器	14
近世陶磁器	17
るつぼ？	1

38~45は粗製深鉢である。38は口唇部に刻みをもつ。39~42は、口縁部の内面が肥厚し、指等で列点状に押圧するもの。林原遺跡の調査より崎ヶ鼻II式と思われる。43は口縁端部が平線。44は口縁部が先細りする。45は口縁端部を丸く収める。46は精製の深鉢。47・48は無文浅鉢である。

49~54は底部である。49~51は有文の底部。49は沈線による山形文を施し、胎土には長石や金雲母を含んでいる。内外面とも磨きが施される。50は縄文地に数条の沈線を施す。52~54は無文の底部。無文の底部には平底・高台状底部の2種があり、明確な凹底は確認できない。

55~58は、凹線文土器である。55は凹線間に刻み目を持つ凹線文土器古段階である。56の凹線はミガキにより再調整され、凹線は幅広である。57は、内面凹線内に2個の刺突文を施している。58は内面1条、外面2条の凹線文を施し、口縁内側には刻み目を施す。前述のとおり底部を見ても明確な凹底はなく、凹線文土器の比率は少ないものと考えられる。

石器は石鎚、刃器、打製石斧、磨製石斧、敲石・磨石、石錘か、砥石が出土している。その他は剥片が6点出土している。剥片は2点が安山岩で、残り4点が黒曜石である。黒曜石の2点の原産地分析を行った結果、両方隱岐の久見産と判定されている。

59は安山岩の石鎚である。60は安山岩の局部磨製の刃器片である。61は磨製石斧片である。62・63は流紋岩製の打製石斧である。64は敲石・磨石である。敲打痕が残る。

河川に隣接する当遺跡において石錘と明確に判別できる石器は採取されていない。同じ八戸川流域の遺跡を見ても、石錘は確認されていないようである。斐伊川流域の縄文遺跡を例に見ても、石錘出土量の多寡は漁場との関連があり、八戸川流域において石錘を集中保有する遺跡が確認される可能性がある。

今回紹介した遺物は、宅地造成時に採取されたものであり、遺構や層位による検討は行えないが、縄文時代後期前葉の縁帶文土器がまとまって出土している。津和野町や益田市匹見町の遺跡群において見られるように島根県西端域では、縁帶文土器の時期に九州系の土器（小池原上層式・鐘崎式土器）を主体として用いている。当遺跡は同じ中国山地に立地しているが、九州系の土器は客体的な出土であり、崎ヶ鼻式を主体とする山陰中部域の文化圏にあるといえる。

（藤田）

参考文献（63頁の旭自治区関連以外）

- 幸泉満夫 2004「山陰地方における縄文時代後期社会の小地域性」『考古論集－河瀬正利先生退官記念論文集』河瀬正利先生退官記念事業会
国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会2007『林原遺跡』
国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会2007『家の後II遺跡2 北原本郷遺跡2』
島根県飯南町教育委員会2007『万場II遺跡』
島根県教育委員会1994『森遺跡・板屋I遺跡・森脇山城跡・阿丹谷辻堂遺跡』
島根県古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター2009『サルガ鼻洞窟遺跡・椎現山洞窟遺跡』
千葉農編2010『西日本の縄文土器 後期』真陽社
柳浦俊一1994『島根県の縄文時代後期中葉～晩期土器の概要－飯石郡頼原町森遺跡出土土器を中心に－』『島根考古学会会誌』第11集
柳浦俊一2000『山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年－中津・福田K2式土器群、縁帶文土器の地域編年－』『島根考古学会会誌』第17集

M71 山ノ内古墳群（第3・4図、表2）

旭町木田の丘陵一帯にある古墳群で、梨園造成に伴い数回発掘調査が行なわれている（旭町教育委員会1989・1991・1994）。古墳群は以前から知られた坂本奥1号墳、坂本奥2号墳、柏尾原古墳、犬立古墳と山ノ内1～36号墳と名称が混在するが、併せて40基が確認されている。報告書では東からA群5基、B群11基、C群15基、D群7基、E群1基、F群1基に分けられているが、E・F群は丘陵も離れた1基の古墳である。群集するB・C群とやや散在するA・D群があり、B群とD群は立地が丘陵上と斜面でわかる。このうち発掘調査はA群の14号墳（旭町教育委員会1989）、B群の12・13・29～33号墳（旭町教育委員会1994）、C群の28号墳（旭町教育委員会1991）で実施されている。調査の結果、丘陵上の古墳は墳丘が低く主体部が石棺と土坑が多く、斜面の古墳は横穴式石室が多い。分布調査時は墳形が直径10m前後・高さ1mあまりの円墳が大半であったが、発掘調査で周溝が尾根筋に直行し方墳（30～33号墳）になった古墳もある。

時期がわかる古墳はいずれも須恵器を出土し、B・C群で丘陵上に石棺を中心とする石見1～2期の古墳（12・29号墳）、C群（34号墳）で丘陵上の古墳と丘陵斜面に横穴式石室をもつ石見4～5・6A期の古墳（28号墳）などが確認されている。12号墳周溝から石見1期、29号墳主体部上と34号墳周溝から石見2期の須恵器が出土している。破壊された横穴式石室が調査された28号墳は石見4～5・6A期の須恵器が周辺から出土している。

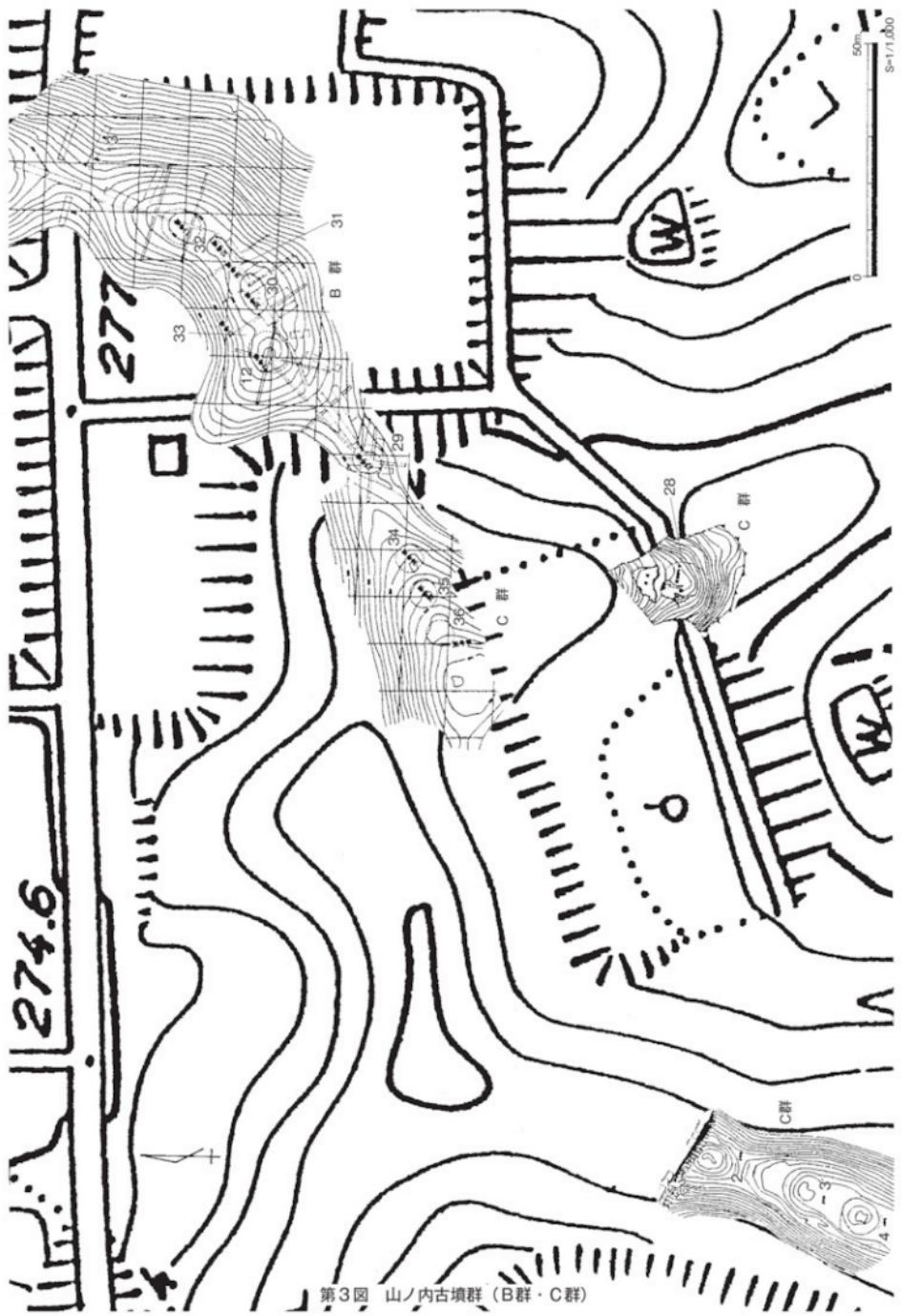
12号墳周溝では出土地点にばらつきがあるが、石見1期の須恵器蓋2・杯1・土師器小壺1が出土している。このうち須恵器蓋（第4図・1）と杯（2）は胎土等が類似し、組み合っていた可能性が高い。蓋（3）は肩の段や口唇部内面の段などが特徴的で、より古い様相を残している。

34号墳周溝では須恵器蓋杯3セット（9と10、11と12、13と14）と杯2（15、16）がまとまって出土している。出土状況では写真等で蓋杯3セットが組み合って、他の杯2は位置が不明確である。おそらく蓋杯3セットの下から出土したと見られる。これらの蓋杯は石見2期古相（9・10）と新相（11～15）、石見3期の板状圧痕を残す杯（16）と形に差があり時期差が認められる。出土状況とは整合しないが、埋葬後には数回祭祀を行い、最終的に周溝内に土器をまとめたような場合が想定できる。

石見2期の蓋杯は口径が14～15.6cmと12号墳周溝（1期）が12cm前後なのに比べ大型化し、蓋の肩に沈線と口唇部内面に沈線による段がつくものと、ないものがある。天井部は基本的に3～4周の全面回転ヘラケズリだが、1期に比べケズリが幅広でやや浅く単位は不明瞭である。

蓋杯の内面に堀の内面に残るような同心円文の当具痕が残るものがある（9・11・13・14）。陶邑古窯跡群では、MT15、TK10の蓋杯に同様の痕跡があり、ヘラケズリのためタタキ調整に使う当て具を台にして固定したとされている（平安学園考古クラブ1966・田辺1981）。その後、天井部内面を押圧した可能性も指摘され、多くの考察が行われている（植野1983・八賀1998・小笠原・山内2005）。管見では県内でめぐろ古墳（島根県古代文化センター2009）の蓋杯2個体、伝字平加比売命御陵古墳（松江市教育委員会1993）の有蓋高杯4点、隱岐の島町の中山遺跡（赤井2002）などに同様の当具痕がある。

杯（16）は底部に成形時の板状圧痕が残り、いわゆる「石見型」須恵器（内田1984・島根県立八雲立つ風土記の丘1998・浜田市教育委員会2008）である。前述の蓋杯類に比べ器高が低く端部や受部の造りも退化している。基本的に底径を大きく器壁を分厚く成形し、切り離し後に再び回転台に置いて内面に強いナデ調整を行って器形を整える。この際に底部が平坦なため板の圧着面が多く板状圧痕が残る。その後浅い全面回転ヘラケズリや周間に2～3周回転ヘラケズリを施すが、回転ヘラケズリが省略されたり板状圧痕が付かずに底部が分厚いものもある。板状圧痕は特徴的に目立つ1要素で、製作工程から見ると最初の特徴は底径を大きく器壁も分厚く成形する点である。蓋杯の時期変遷（口径の大小・天井部ケズリ調整の範囲）に併せて形態にも変化がある。石見3期～5・6A期まで続き、4期は蓋杯の口径がやや小型化するためか、底面が扁平で分厚くなり最も特徴的で出土量も増える。5・6A期はさらに径が小さくなるが、器形の変化と調整が簡略化するためか底部全面に板状圧痕がつくものはない。これ



第3図 山ノ内古墳群（B群・C群）

表2-1 山ノ内古墳群（県埋蔵文化財包蔵地カード・旭町教育委員会1994より作成）

遺跡番号	群名	名称	外 形		理葬施設	備考	
			墳形	長さ(m)	高さ(m)		
M71-14 A群	14号墳	円墳	径7.0		横穴式石室	発掘調査。墳頂部に3.6×2.0の盜掘坑、木田小に移築復元。	
M71-15 A群	15号墳	不明			横穴式石室?	3.3×1.8、深さ0.5の盜掘坑。	
M71-16 A群	16号墳	円墳			横穴式石室?	墳丘の北側に上端幅4.5、下端幅1.6、深さ1.2の切削溝あり。墳頂部に3.2×2.7、深さ0.6の盜掘坑。	
M71-17 A群	17号墳	不明			横穴式石室?	墳丘北側に上端幅3.1、下端幅0.8、深さ0.8の切削溝あり。3.6×2.5×0.4の盜掘坑あり。	
M71-18 A群	18号墳	円墳			横穴式石室?	墳丘北側に上端幅3.1、下端幅0.8、深さ0.8の切削溝あり。3.0×3.7×0.6の盜掘坑あり。	
M71-12 B群	12号墳	円墳	9.0×9.3	0.8	箱式石棺	2基	発掘調査。周溝東側中央部幅2.0×深さ0.8、西側中央部幅2.2×深さ0.3。墳丘北西側にテラス状平坦面が認められる。
M71-13 B群	13号墳						発掘調査。発掘の結果墳丘状の高まりは自然のものと考える。
M71-19 B群	19号墳	円墳	17.2×16.2	0.6~1.5	不明		墳丘東側に幅2.1の平坦面あり。
M71-20 B群	20号墳	円墳	13.9×13.2	0.5~1.1	不明		墳丘の西側に幅3.0の平坦面あり。
M71-29 B群	29号墳	円墳	径7.0		土塼		発掘調査。幅1.0~1.2、深さ0.7の周溝あり。1.25×0.6×0.2の土塼。
M71-30 B群	30号墳	方墳	東西5.0		箱式石棺		発掘調査。幅0.7、深さ0.5、長さ5.5の周溝あり。1.85×0.45×0.35の石棺。
M71-31 B群	31号墳	方墳	東西7.0		箱式石棺		発掘調査。東側に幅0.9、深さ0.5、長さ4.5の周溝あり。
M71-32 B群	32号墳	方墳	東西4.0		箱式石棺		発掘調査。東側に幅0.8、深さ0.5、長さ2.7の周溝あり。
M71-33 B群	33号墳	方墳	南北3.0		箱式石棺		発掘調査。周溝あり。
M97-1 B群	坂本奥1号墳	円墳	径14.0	2.8	横穴式石室?		M6と同一。発掘調査
M97-2 B群	坂本奥2号墳	円墳?	10.3×7.5		横穴式石室?		幅5.0、深さ2.0あまりの明瞭な切削溝あり。墳頂部に5.2×2.9、深さ1.3の盜掘坑あり。石散乱。
M71-1 C群	1号墳	不明	径7.5?		不明		板状石が露出しているのみ。詳細不明。
M71-2 C群	2号墳	円墳	10.8×10.3	0.8	不明		未盜掘?
M71-3 C群	3号墳	円墳	7.3×9.4	0.6	不明		未盜掘?
M71-4 C群	4号墳	円墳	8.0×8.2	0.6	不明		墳頂部に3.3×2.3の盜掘坑あり。0.45×0.25mの石が数個露出。
M71-5 C群	5号墳	円墳	10.0×10.5	0.8	不明		墳頂部に5.0×2.8の盜掘坑あり。石多数散乱。やや山寄せでマウンドは非常に低い。
M71-6 C群	6号墳	円墳	10.7×10.2	1.2	不明		未盜掘?
M71-7 C群	7号墳	円墳	8.1×10.4	0.2~0.3	不明		墳頂部に5.0×2.1、深さ0.8の盜掘坑あり。板状割石散乱。わずかに山寄せ。
M71-8 C群	8号墳	円墳	7.0×6.8	0.2~0.4	不明		墳頂部に4.5×2.3、深さ0.7の盜掘坑あり。板状割石散乱。
M71-9 C群	9号墳	円墳	6.0×6.8	0.4	不明		8号墳と周溝を接する。未盜掘?
M71-10 C群	10号墳	円墳	8.0×8.2	0.2~0.8	不明		切削溝上端幅2.0、下端幅1.0、深さ0.4。墳頂部に4.6×2.5の盜掘坑あり。石散乱。
M71-11 C群	11号墳	円墳	8.5×9.0	1.3~0.4	不明		切削溝上端幅4.5、下端幅1.2、深さ1.1。墳頂部に4.9×2.2、深さ0.4の盜掘坑あり。
M71-28 C群	28号墳	不明			横穴式石室(有袖)		発掘調査。天井石、側壁、奥壁と思われる石材確認。調査前に大量の須恵器出土。
M71-34 C群	34号墳	方墳	径4.0~6.0		不明		確認調査。幅2.0の周溝を持つ方墳とされている。須恵器8点出土。
M71-35 C群	35号墳	円墳	径5.0~6.0		不明		確認調査。幅1.0の周溝を持つ円墳と推定。周溝内からくびれた形状のかなり使い込んだと思われる砾石出土。
M71-36 C群	36号墳	不明			不明		確認調査。0.2~0.5の石材露出。

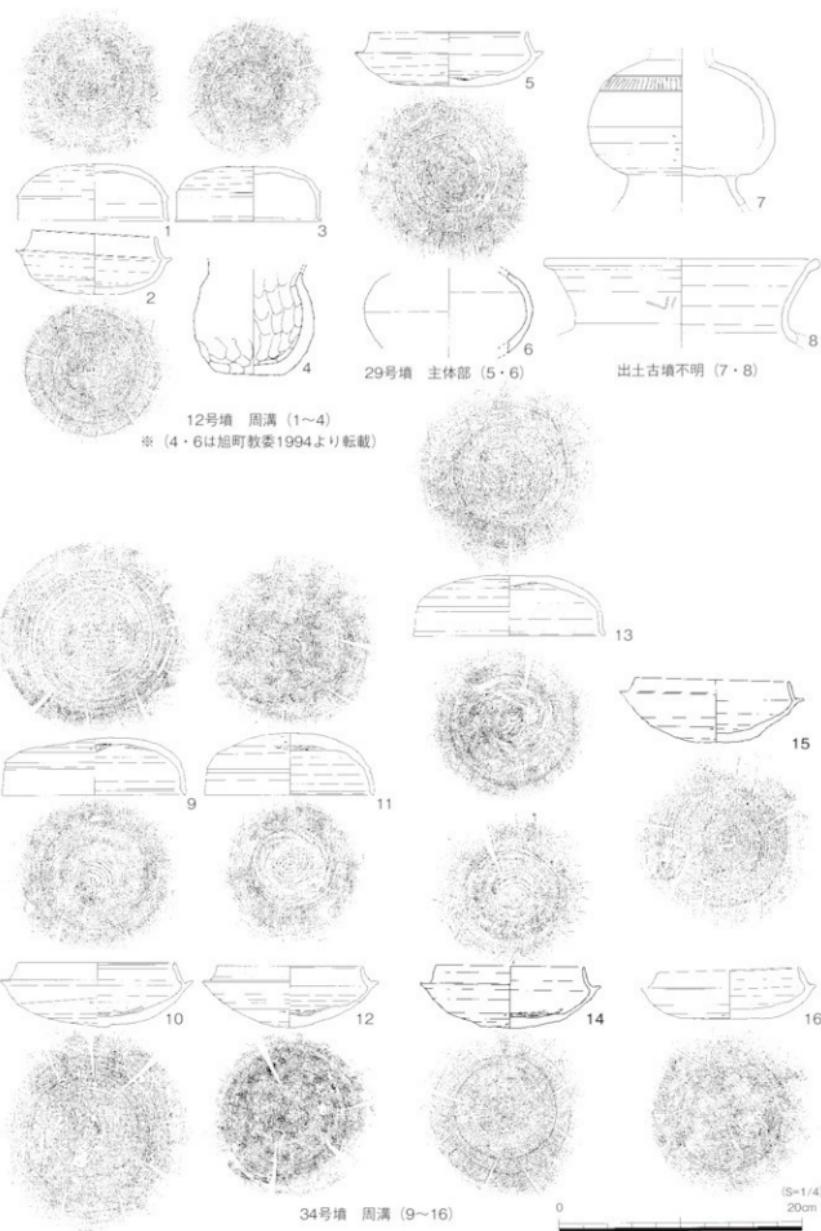
表2-2 山ノ内古墳群（県埋蔵文化財包蔵地カード・旭町教育委員会1994より作成）

遺跡番号	群名	名称	外形			理葬施設	備考
			墳形	長さ(m)	高さ(m)		
M71-21	D群	21号墳	円墳	9.0×10.5	0.8	不明	墳丘南西側に幅1.3、深さ0.4の切削溝あり。
M71-22	D群	22号墳	円墳?	5.8×6.2	0.3~0.7	不明	
M71-23	D群	23号墳	円墳	6.5×8.3	0.6	不明	墳頂部に30×2.6、深さ0.2の盜掘坑あり。墳丘北東側に上端幅5.0、下端幅1.5、深さ0.8の切削溝あり。墳頂部に石材が散布。
M71-24	D群	24号墳	円墳?	7.7×7.7	0.1~0.7	不明	墳頂部に40×2.9あまりの盜掘坑あり。人頭大~50センチ大の石が散布。
M71-25	D群	25号墳	円墳?	7.4×7.6	1.7	不明	墳頂部に34×1.4、深さ0.8の盜掘坑あり。人頭大の石が多数散在。
M5	D群	犬立古墳	円墳	8.0×9.0	1.1	横穴式石室?	墳頂部に3.6×3.2、深さ0.8の盜掘坑あり。石材散乱。
M98	D群	柏尾原古墳	不明	6.0×6.3	1.1	横穴式石室?	M1と同一。墳丘北西側に上端幅3.8、下端幅1.0、深さ1.3の切削溝あり。墳丘部に3.2×2.0、深さ0.4の盜掘坑あり。蓋石露出。
M71-26	E群	26号墳	不明			不明	丘陵斜面に幅1.8、長さ4.0以上、深さ0.6あまりの坑があり、その東壁部に石材は見られる。
M71-27	F群	27号墳	円墳?	5.0×5.1	0.25~0.5	不明	墳丘東側に上端幅1.8、下端幅0.8の切削溝がある。

らの特徴をもつ蓋杯は石見地域でも沿岸部の益田・浜田・江津・大田に出土遺跡が多いが、山間部（匹見町野入古墳・邑南町湯谷悪谷2号穴・大田市石見銀山遺跡 宮ノ前地区）にも少量あり、西端の鹿足郡では確認していない（註1）。

これらの須恵器を製作した窯跡は益田市でしか見つかっていないが、出土量や口径の小さいものもあることから、他地域でも生産されていた可能性がある。益田市の杉迫窯跡（石見3期）では窯内に板状圧痕と通常の回転ヘラケズリの蓋杯がそれぞれ上下組み合って置かれていた（註2）。調整が同じ蓋杯セットを組み合わせて同時に窯詰めしており、調整の差は工房内の少人数単位にあたる可能性が高い。古墳の出土状況など消費地では混在して出土し差は見られない。

山ノ内古墳群から防六山を挟んだ約3.8km南東の重富地区にはほぼ同時期のやつおもて古墳群がある。両古墳群ともに石見6B期以降の古墳はないが、重富で石見6B期以降に小才古墳群、奈良時代の石見7~8期には重富庵寺跡が造られる。山ノ内古墳群には大型古墳は見られず等質的で、やつおもて古墳群に20m級の大型円墳（18号墳）や前方後円墳（10号墳）が含まれる様相とは異なる。



第4図 山ノ内古墳群

M3 やつおもて古墳群・M4 福原宅裏横穴群（高山横穴）・M15 新塚古墳群

これらの古墳群と横穴の記述は、1954・1955（昭和29・30）年の山本清氏の調査記録と1960（昭和35）年の門脇俊彦氏の調査記録（両者とも島根県古代文化センター保管）によるところが大きい。その後は旭町誌（旭町1977）、島根県教育委員会による中国横断自動車道建設に伴う調査報告（島根県教育委員会1982・1991・1992）などでまとめられている。一部現地確認を行ったが、当時より山林の荒廃が進んでおり石室が埋没して特定できなかつた古墳も多い。

以前の調査記録では旭中学校・和田小学校に古墳と横穴出土の遺物が保管されていたが、学校改築などで個人保管に移り近年市教委に返却された。この遺物と記録を照合して出土地を再整理している。

M3 やつおもて古墳群（第5～8図・表3）

浜田市旭町重富 下重富699-1,705-4 外に所在し、先述の山ノ内古墳群とはほぼ同時期である。古墳の番号は中国横断道予定地内の報告書（島根県教育委員会1991・1992）にしたがい1～24号墳とする。やつおもて18号墳の報告書（島根県教育委員会1992）付図が最も詳細な測量図である。

昭和35年の門脇記録では西側をA1～A3、B1～B6基とし、計9基としている。B5号墳とA2号墳の石室図面があり、B5号墳は9号墳、A2号墳は凹みの規模から4号墳か2号墳と推定できる。4号墳（2号墳）の石室は現在完全に埋没して石材が見えないが、図面では奥壁幅1.4m・長さ2.5m以上である。4号墳は径約12mの山寄せの円墳で、西側に造りだし状の小埴丘が続き上に凹みがある。一体の古墳が隣接して小古墳があるかは不明確である。西群は径10m以下の横穴式石室の円墳が多い。

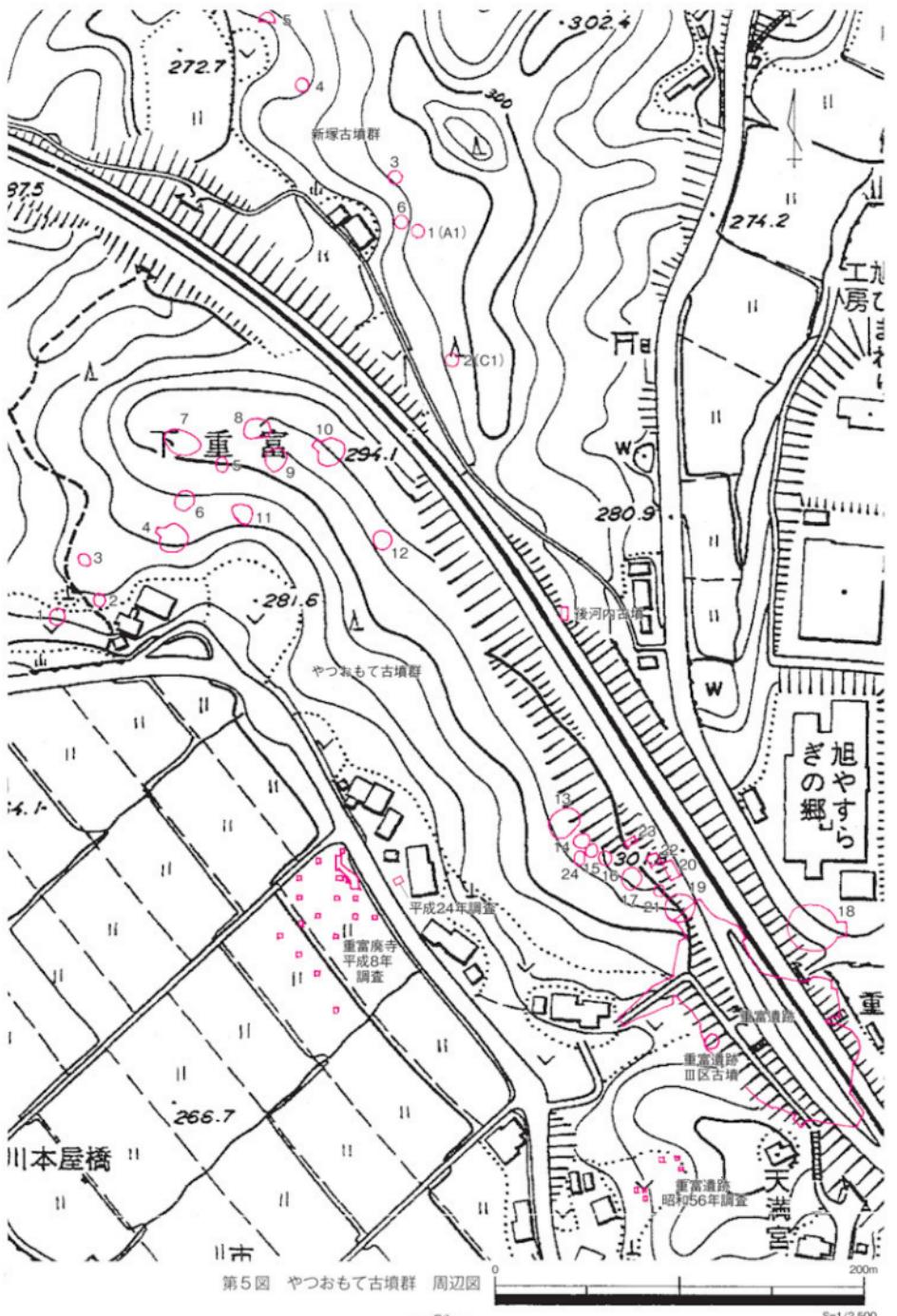
中国横断道予定地内の報告書（島根県教育委員会1982）では西側をA群とし12基、門脇記録では古墳1基とされた東側を新たにB群として5基、単独の18号墳を併せて計18基とされた。中国横断自動車道に伴う調査（島根県教育委員会1991・1992）では東群の18号墳と周辺で調査が行なわれた。小規模な竪穴式石室や木棺直葬などの埋葬施設をもつ13～24号墳までの東群から、丘陵西側の尾根上や北側を含めた斜面に位置し小型前方後円墳や横穴式石室の古墳を含む1～12号墳の西群へ中心が移ったとされた。一連の調査後はやつおもて古墳群は24基となつたが、東群と西群の間で後河内古墳、18号墳南側の重富遺跡Ⅲ区でも古墳が調査されている。いずれも長さ1m程の小型竪穴式石室と周溝の一部が残る3m前後の小古墳だが、東群と西群でない大小さまざまな古墳が分布する。

やつおもて古墳群のなかで時期の判る大型の古墳は、東支群の18号（石見2期・円墳・23×26.5m）から西支群の10号（石見3期・前方後円墳・全長16m）、9号（石見4～5・6A期・円墳・12m）となる。18号墳は石見最後の大型円墳（20m級）、西支群は横穴式石室を中心とする石見最後の前方後円墳の10号墳を含む群集墳で、同様の益田市網ノ鼻古墳群より古い時期から古墳が造られている。

和田・重富地区の盆地周辺の古墳群を併せると、やつおもて東12基・西12基・後河内1基・重富1基、新塚6基、向イ山2基、小才12基の計46基となる。周辺に単独の横穴や古墳もあり、山ノ内古墳群に比べ規模が大きく継続性もある。

なお、現段階で同じ重富地区にはやつおもて9号墳と一部併行する福原宅裏横穴群（高山横穴）があり、これらの古墳・横穴より後出の石見6B～8期には谷を造えて横穴式石室・木室墓・横穴墓で構成される小才古墳群が造られる。小才古墳群は石見6B期に新たに造られているが、やつおもて古墳群の被葬者と谷ごとに分離しており生産基盤が異なるのか、一部が独立化（官入化）して新たに墓域を造ったかは不明確である。石見7～8期には古墳に代わり新たに重富廃寺も造られ、10期頃まで存続する。やつおもて9号墳

古墳群の中でも代表的なもので、横穴式石室が露出し天井石以外の各壁が残っている。旭町誌では1954（昭和29）年に福原古墳（福原宅裏横穴群）と同じく中学教師と学童によって発掘されている。翌年の1955（昭和30）年に発掘者の中学教師が島根大学に遺物を持参し、山本清氏が説明を受けて作成した壺・土師器壺2個の出土位置が記された石室図面がある。発掘は石室の床まで約40cmの土を取り除

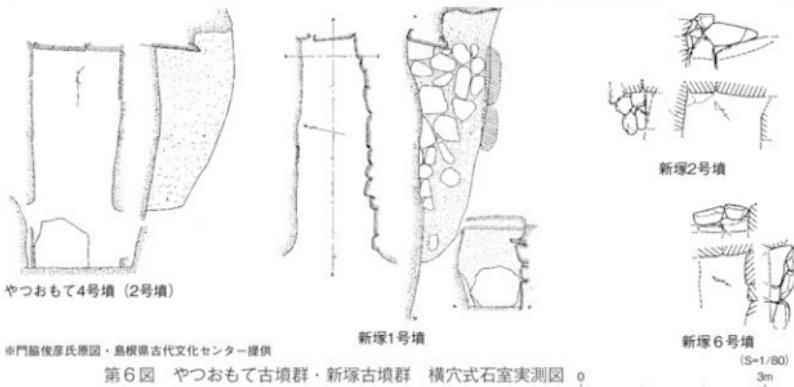


第5図 やつおもて古墳群 周辺図

表3 やつおもて古墳群・新塚古墳群（県埋蔵文化財包蔵地カード・島根県教育委員会1982、1992、一部現地確認により作成）

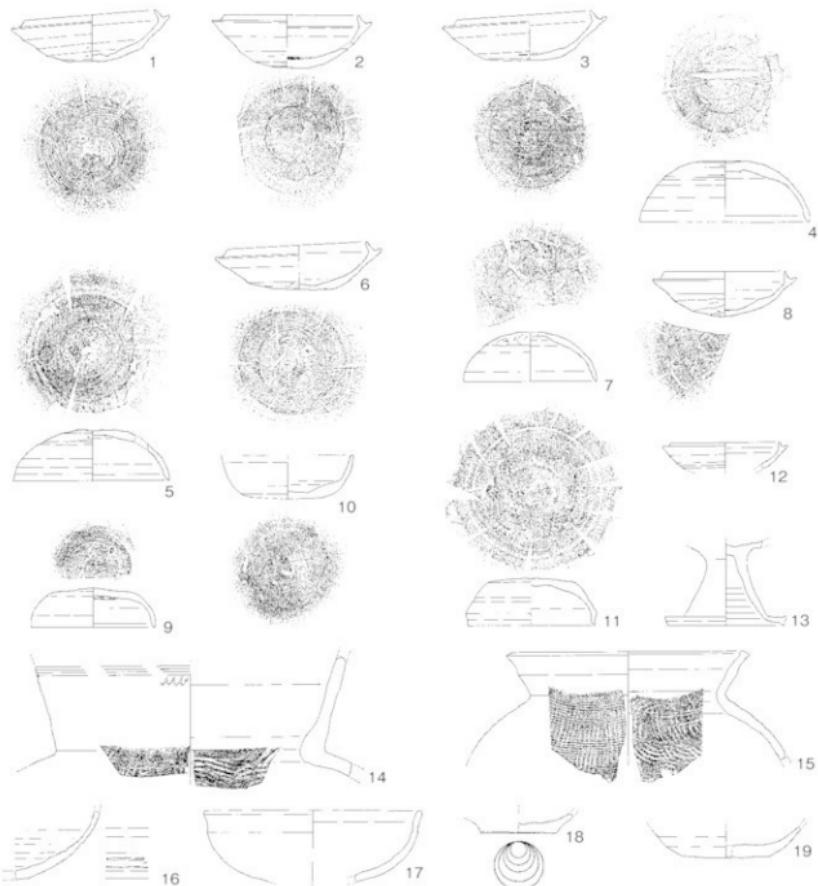
やつおもて古墳群

遺跡番号	名 称	外 形	埋葬施設	備 考
		墳 形	長さ (m)	高さ (m)
M3-1 1号墳	円墳	径9.0	1.6	横穴式石室 22×3.0の抜き取り痕。古墳時代後期。墳丘は山道により切断、一部石材。
M3-2 2号墳	円墳	径15.7	0.8	横穴式石室 19×3.2の抜き取り痕。古墳時代後期。墳丘南側削平。
M3-3 3号墳	不明			横穴式石室 20×3.5の抜き取り痕。古墳時代後期。削平、一部石材。
M3-4 4号墳	円墳？	径12.0	3.4	横穴式石室 21×3.7の抜き取り痕。古墳時代後期。
M3-5 5号墳	円墳	径8.6	0.7	不明 古墳時代後期。
M3-6 6号墳	円墳	径7.0	1.2	横穴式石室 15×2.2の抜き取り痕。古墳時代後期。
M3-7 7号墳	円墳	径10.2	0.9	不明 古墳時代後期。
M3-8 8号墳	円墳	径11.2	1.2	横穴式石室 20×3.2の抜き取り痕。古墳時代後期。
M3-9 9号墳	円墳	径12.0	2.6	横穴式石室 天井部欠失。古墳時代後期。
M3-10 10号墳	前方後円墳	全長21.8 後円部径12.8 前方部長9.0	後円部高0.6 前方部高1.3	不整形な抜き取り痕。古墳時代後期。側壁と考えられる石が露出。須恵器出土。
M3-11 11号墳	円墳	径8.2	1.3	不明 古墳時代後期。
M3-12 12号墳	円墳	径8.3	1.0	不明 古墳時代後期。
M3-13 13号墳	円墳	径12.0	1.9	不明 古墳時代後期。
M3-14 14号墳	円墳	径8.6	1.1	横穴式石室？ 古墳時代後期。
M3-15 15号墳	円墳	径4.3	1.1	不明 古墳時代後期。
M3-16 16号墳	円墳	径6.8	0.9	横穴式石室？ 古墳時代後期。
M3-17 17号墳	円墳？	径6.0~7.0	3号・4号土塼	古墳時代後期圓辺で牛糞を検出。須恵器片、鉄刀(直刀)
M3-18 18号墳	円墳	径23.0~26.5 造り出し部 含全長28.0	4.0 箱式石棺・ 横穴式石室	箱式石棺・ 横穴式石室 2段構成で箱式石棺と横穴式石室。葺石あり。須恵器、土師器、鐵鏟、刀子、鉄劍、人骨(少年男性)
M3-19 19号墳	方墳	東西9.0 南北7.5		古墳時代後期。
M3-20 20号墳	不明		木棺直葬	丘陵高所側に浅い周溝(形状はやや弧状を呈す、円墳を意識?)。棺材の石あら。鉄斧、鐵鏟、鐵製品
M3-21 21号墳	不明		堅穴式石室？	古墳時代後期。丘陵高所側に浅い周溝をめぐらす。石室基底部には石が用いられる。須恵器
M3-22 22号墳	不明		土塼	古墳時代後期。円墳か。
M3-23 23号墳	不明		土塼	古墳時代後期。丘陵高所側に深い周溝(形状は直線状)。周溝内に土塼が埋め込まれる。甕
M3-24 24号墳	円墳？			古墳時代後期。
M95 (後河内古墳群)	不明	周溝内側で 3m	堅穴式石室	古墳時代後期。発掘調査でL字形の周溝・小型堅穴式石室(内法長1.0・幅0.45・高さ0.7)を確認。
M63 重富遺跡Ⅲ区古墳	円墳？	周溝内側で 3m?	堅穴式石室	古墳時代後期。発掘調査で弧状の周溝・小型堅穴式石室(内法長2.08・幅0.3・高さ0.6)を確認。
新塚古墳群				
M15-1 1号墳 (A1号墳)	円墳か		横穴式石室	石室サイズL3.4×W1.0×H1.3。側壁の積石は自然石を使用。規状では埋没して石材は見えない。
M15-2 2号墳 (C1号墳)	円墳	径6.0	横穴式石室	石室サイズL4.0×W1.3×H0.9。1号墳からかなり南側に離れた谷斜面。石室奥が井戸状に露出。奥壁半分に大型自然石を用いている。石室左隅は三角持ち送り。
M15-3 3号墳	円墳	東西8.0 南北10.0	横穴式石室	1号墳より約30m斜面下方。墳丘と中央に大きい凹みがあり、横穴式石室の跡と見られる。周間に石は見られない。
M15-4 4号墳	円墳		横穴式石室	3号墳より約100m東の方の松林中。墳丘が広がる在る。転石がある。
M15-5 5号墳	不明			長さ2mの凹みがあり、周間に転石がある。墳丘不明。
M15-6 6号墳	円墳	径7.8m	横穴式石室	石室サイズL1.0以上×W0.8×H0.5。石室奥壁周辺が井戸状に露出する。側壁の一帯に削石を用いる。

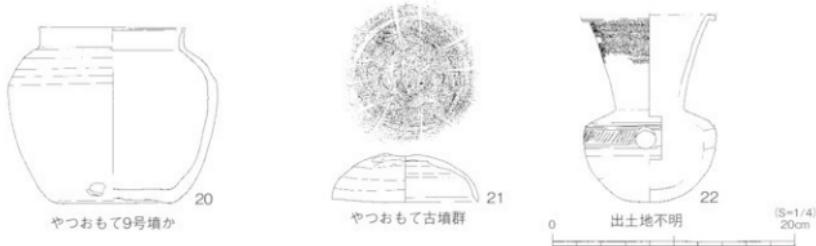


＊門脇俊彦氏原図・島根県古代文化センター提供

第6図 やつおもて古墳群・新塚古墳群 横穴式石室実測図



第7図 やつおもて9号墳 (1~19)



第8図 やつおもて古墳群周辺・出土地不明遺物

いたようだ、壺は後述の須恵器壺、土師器壺は中世の土師器皿の可能性が高い。その他多くの須恵器の出土位置は不明だが、石室埋土の上位から古代から中世の遺物、下位から古墳時代の須恵器が出土したと考えられる。

壺は1960（昭和35）年の門脇記録では高山3号穴とされた奈良時代以降の大型須恵器短頸壺（第8図・20）で、注記がなく後に混在したようである。また「那賀郡旭村 下重富 横山」の注記がある蓋（21）があり、「横山」は古墳群の南裾の家である。9号墳と決定できないが古墳群出土と考えられる。径12cmで天井部調整は不定方向のヘラケズリで、古墳群と同時期の遺物である。他にも注記のない石見2期頃の甕（22）があるが、出土地は不明である。

その後、中国横断道予定地内の報告書で門脇記録による学校保管の須恵器と横穴式石室が報告されている（鳥根県教育委員会1982）。旭中学校・和田小学校に高山横穴の須恵器と混在して保管されていたが、注記がない一群が門脇記録と報告書掲載遺物に合致し9号墳と特定することができた。古墳時代の須恵器蓋杯（1～12）、高杯（13）、甕（14・15）、土師器椀（17）、中世土師器皿の底部（18・19）がある。

須恵器蓋杯の調整には、径10.85～11.1cmの中心に半円形に未調整部を残す周間2～3周ヘラケズリ（第7図・1～3）、径12.9～13.9cmの中心に円形に未調整部を残す周間1～2周ヘラケズリ（4～6）、（C）径10～12.1cmの不定方向のヘラケズリ（7～9）、径10.2～10.8cmのヘラ切り後ナデ調整（10・11）がある。口径は10.1～13.8cmとやや小型化しており、石見5・6A～6B期にあたる。

古墳の埴丘は北側を半円形に削り込んだ円墳で、径約12m、高さは谷側で2.6mである。横穴式石室は無袖で南に開口し、天井石はないが奥壁・側壁は高く残る。床面形はやや胴張りの長方形で、石室前部には円礫がある。石室は幅1.6m、奥行き5.6m（奥壁から円礫まで4.7m）である。高さは奥壁で1.6m、右側壁では1.74m～0.80m・左側壁で1.80m～0.62mの高さで残る。奥壁は約1/3を占める大型石と中型石で造り、側壁は基底石と2段目までは中型石の長辺を接地面させ、3段目以上はやや中・小型石を用い積み方も不規則になる。

M15 新塚古墳群（第5・6・10図、表3）

浜田市旭町本郷に所在し、やつおもて古墳群の西群から北へ分岐する丘陵西斜面にある。現在は浜田自動車道で丘陵が分断され高速道路北側の旭ふるさと歴史公園側から古墳群下の横山家へ行ける。

門脇記録で7基、県教委の報告等で4基だが、今回の現地確認で新たに以前の番号とは異なる6基に整理した。埴丘は径8m以下の山寄せの円墳が多く、やつおもて古墳群より小型である。門脇記録にはA1号墳（1号墳）の石室図面があるが、現地は完全に埋没し凹みしか確認できない。記録では石室は中型石を用い幅約1m・長さ3.4m以上・高さ1.3mと、やつおもて9号墳の石室に比べてやや小さい。宅地から南側に離れた丘陵斜面にC1号墳（2号墳）があり、石室奥壁周辺が井戸状に露出する。奥壁幅約1.31m・長さ1.45m以上と最も幅が大きい。奥壁天井隅は側壁と奥壁に石を渡す三角持ち送りである。6号墳も横穴式石室で、側壁の一部は割石で面を整えている。奥壁幅0.8m・長さ1m以上と最も小型である。

旭歴史民俗資料館に「昭和27年6月 新塚山 出土品 浜田市日脚町 曽田寅義 藏」のラベルがついた完形の須恵器椀1（第10図・14）、土師器椀（15）・中皿（16）が保管されている。地権者からの聞き取りでは、当時は天井石を運び出したり石室内が部分的に発掘されたようである。前述のやつおもて古墳群や福原宅裏横穴群（高山横穴）の発掘の2年前である。古墳時代より後の古代後III期（柳原2013・10世紀後半～11世紀前半）の遺物で、平安時代頃に石室内に一括で埋められた可能性がある。

M 4 福原宅裏横穴群（高山横穴）（第9・10図）

浜田市旭町重富 上重富 福原95に所在する横穴墓群である。宅地の横に横穴があり、数回にわたり発見・破壊され遺物が出土している。高山は福原家の屋号で、遺物の注記や昭和35年の門脇記録では高山横穴（古墳）だが、後の旭町誌と県遺跡地図では福原横穴群、福原宅裏横穴群と名称が変わっている。門脇氏は高山横穴群を四注式妻入型のくずれた型式としている（門脇1964）。

調査記録と旭町誌、遺物の注記を元に経緯を整理すると以下のとおりである。

- 1920（大正9） 母屋の改築に伴い4・5号穴発見、消滅。人骨が6体出土し、近くの墓地へ改葬。
- 1926（昭和元）頃 旭中学校の遺物に「那賀郡旭村 上重富 高山古墳出土 昭和元年頃 福原国太氏寄附」とある。門脇記録では3号穴の遺物だが、旭町誌とは年代があわない。
- 4・5号穴出土品の可能性もある。
- 1947（昭和22） 敷地拡張の際に3号穴発見（旭町誌）。
- 1954（昭和29） 和田小学校の先生・生徒により2号穴が発掘される。
- 旭中学校・和田小学校保管の遺物に「那賀郡旭村 上重富 福原国太氏附近 高山古墳出土 昭和二十九年十二月二十八日」とある。前後の日付（12/22・23）の注記がある遺物もあり、一連の発掘である。門脇記録では2号穴の遺物にあたる。
- 1954・1955（昭和29・30） 山本氏遺物調査（発掘者が島大に遺物持参）・現地調査。
- 1960（昭和35） 門脇氏現地調査。1～5号穴の分布図、1～3号穴の実測・旭中学校保管の2・3号穴出土遺物の調査。
- 1989（平成元）頃 福原氏宅は谷出口の道路沿いに移転し、旧宅地は解体。

現地は西側谷奥の旧宅地への登る町道沿いに位置する。谷の出口には重富川の支流である新屋谷川が流れている。南北幅32m・道路からの比高差最大2mの範囲で横穴が5基発見されている。横穴の番号は門脇記録に基づき、谷の出口側（南）から1～5号穴とした。しかし、3号穴は注記と発見年代が整合していない。5基のうち4・5号穴が敷地拡張のため消滅し、昭和35年以降に2・3号穴は崩落している。1号穴は現存し、遺物もないことから既に開口していたと考えられる。

1号穴は道路面から約2m上にあり、天井まで残る。全長4.15m以上・玄室長さ2.6m・幅1.95m・高さ1mである。横断形は半円形、平面形はやや縱長で左側の造りが粗く左右対称にならない。天井は奥壁方向に粗く削り横方向の削りで仕上げる。右側が奥壁と側壁を区別してつくる本来の形（アーチ・蒲鉾形）に近いと考えられる。

やや離れて崩落した横穴跡が2地点あり、2・3号穴と見られる。2号穴は1号穴とほぼ同じ高さにあり、以前の記録では全長4.15m以上・玄室長さ3.1m・幅2.2m・高さ1.2mである。天井の横断形は半円形で、平面形は玄室のくびれが緩く全体的に退化したつくりである。3号穴は前2穴と比べ低い位置にあり、現道とほぼ同じ高さにある。以前の記録では全長3.1m以上・玄室長さ2.1～2.3m・幅1.85m・高さ1m以上である。天井の横断形は逆に丸みをもった三角形だが、縦断形は丸みをもつ。平面形は他の2穴に比べ玄室が短い。玄門部は他の2穴よりしっかり造られているが、全体的に退化したつくりである。

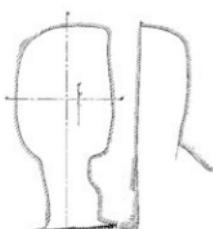
出土した遺物は旭町誌に掲載された壺は所在不明だが、門脇氏が調査した旭中学校・和田小学校の遺物は個人を経由し近年市教委に返却された。2号穴の遺物は1954（昭和29）年に発掘されたもので須恵器蓋杯（第10図・1～5）、高杯（6）、提瓶（7）があり、やつおもて9号墳と同時期（石見5・6A～6B期）にあたる。3号穴とされた遺物には周辺の遺物も混在しているが、「高山古墳」等の注記がある小型の須恵器杯（8）と脚付長頸壺（9）がある。その後宅地跡へ登る町道の工事で須恵器（10～13）の長頸壺1、甕片2、蓋片1が出土し、地権者宅に保管されている。横穴墓群の前庭部にあたる可能性がある。



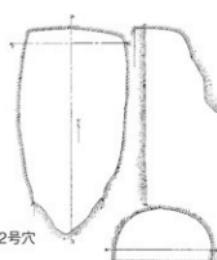
位 置 図 ($S=1/1,000$)



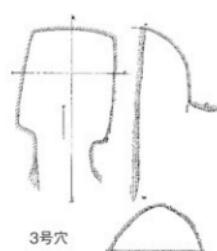
配 置 図 ($S=1/500$)



1号穴



2号穴



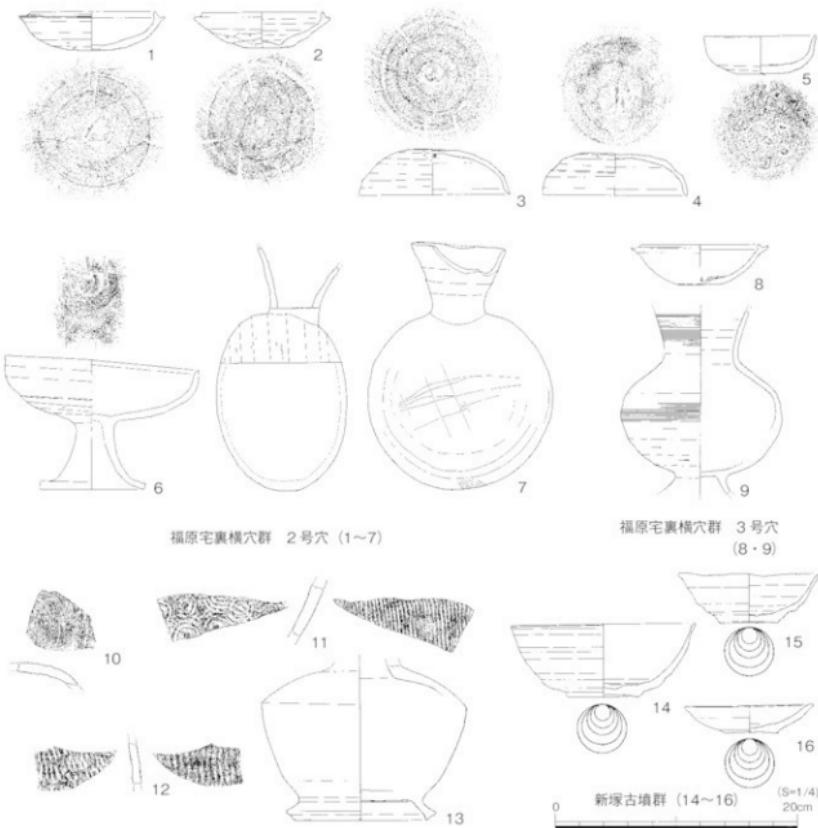
3号穴

横穴実測図 ($S=1/100$)

*配置図・実測図は門脇俊彦氏原図・島根県古代文化センター提供

第9図 福原宅裏横穴群 (高山横穴)

おおまかに古代の郡単位でみると、郡賀郡は石見国でも横穴墓が少ないが、旭町重富地区と三隅川下流域は最も多く横穴墓が分布する。ただし、横穴式石室が多い傾向は他郡と同様である。山間部の邑智郡・西の美濃郡では石見3期から横穴墓が造られるが、郡賀郡では現段階で石見5・6A期の福原宅裏横穴が最も古い。重富地区で数が増えるのは三隅の高田横穴群・刈立横穴（浜田市教育委員会2010）と同様に、形が退化した石見6B期以降である。他の重富地区的横穴墓は報告書（鳥取県教育委員会1992）によると、小才1号横穴（狭道・玄室長2.5m・幅0.85m・高0.6m・前庭長2.3m・幅0.35~0.4m）、小才2号横穴（狭道・玄室長2.7m・幅1.2~0.75m・高0.8~0.5m・前庭長3.1m・幅1m）、大墓1号横穴（玄室平面が正方形に近いアーチ（蒲鉾）形・玄室長さ2.3m・幅1.8m・高さ0.8m以上）で、いずれも福原宅裏横穴群より小型化・退化したものである。地理的に近い邑智郡では美郷町熊見横穴群（註3）に類似し、同じ郡賀郡でも高田横穴の傾向にもある。現段階で郡賀郡では横穴式石室の古墳が主体で、郡縁辺部に新しい時期（石見5・6A期以降）の横穴墓が散発的に造られている。



第10図 福原宅裏横穴群・新塚古墳群 出土遺物

M 8 重富庵寺跡（第11～18図・表4～6）

浜田市旭町重富下重富に所在し、古代瓦が多量に出土したことから古代寺院跡と考えられている。耕地基盤整備事業中の1973（昭和48）年2月23日に古代瓦が黒色土から多量に発見された（旭町1977）。同年6月1日には以前の出土土地より数十mはなれた地点で後述の軒丸瓦1類や平瓦類、須恵器、弥生土器の鼓形器台などが発見されている。ブルドーザーの掘削によるため詳細は不明だが、旭町誌に工事以前の周辺の略図（第11図上）があり、古代瓦が出土した斜面の水田は高所が規則的な横長、低所は不整形な棚田であったようである。現在、水田は長方形に整備されているが、もともと水田部分に大規模な平坦地ではない。瓦出土地の西側水田の間を南北方向に走る道が津和野奥筋往還で、現在は耕地基盤整備で水田部は直線に整備され、東西道路との交点で屈折し宅地の間を通る山道になる。周辺の小字は「大道上」「下神田」「門田」「門田中ノ切」だが、耕地整理のため現地番とは異なる。古代瓦は岡本家（屋号土居）、阿瀬川家（屋号ドウノモト）の南から西側の一帯から見つかり、中国横断道予定地内の報告書（鳥根県教育委員会1982）に遺物が掲載されている。

（第11図1～3）は昭和48年出土の古代瓦で旭歴史民俗資料館に展示されている。（2・3）は旭町誌で「凸面に縁釉薬をかけたものと思われる硬質平瓦」と紹介された平瓦だが、凸面の粗さと釉のはじけ・断面の被熱からみて2次被熱した瓦である。窓内で焼台などに用いられて2回以上被熱した瓦が最終的に寺院に持ち込まれたと考えられる。同様の瓦は丸瓦・平瓦とともに後の試掘確認調査でも出土しており、凹凸面から端部・側面にかけて厚く自然釉がかかり、破面が2次被熱したものもある。

1996（平成8）年に北側の町道改良工事などに先立ち、旭町教育委員会が試掘確認調査を実施した（旭町1997・第12図）。調査地点は昭和48年の瓦出土地点の北西側で、ほぼ同レベルの水田から下段にあたる。当時の調査記録を再検討し、瓦を含む黒色土とその上にある溝を模式的に示した。瓦の分布は大きく東西2ヶ所に分かれるようだが、基本的に前述の黒色土が地形に平行して削平を受けた状況を確認したのみで寺院に関する遺構は未確認である。伽藍は地形に合わせて山側の道路から宅地辺りに配置されたか、水田中段の場合は削平された可能性がある。地山面は写真から淡黄褐色土とした。

試掘調査では遺物が上段の水田で多く出土し、地山面は地表下0.3～1mで確認されている。中段より下は削平されて遺物もほとんどなく、地山面は最も浅く地表下0.3～0.5mである。上段はグリッドを基準に面的に拡張しており水田長辺に併行して古代瓦を多く含む黒色土が確認されている。高い北東側は黄色土が堆積する幅約1mの溝で黒色土が切れ、低い南西側も東を中心とし上部が削平されている。黒色土は東側の幅約20cm・厚さ30cm程の帶状に残る部分が最も厚く、他はそれより薄い。瓦の検出状況図面では東側は削平をうけて帶状に瓦溜りが見えるが、基本的に西側のような黒色土中に瓦が含まれた状態と見られる。上段中央部は黒色土途中で掘削を止めており、瓦を面的に検出した状態ではない。

なお、2013（平成24）年に瓦出土地点北東側にあたる上段の畠で試掘調査を実施したが遺跡は確認できなかった。寺院は瓦出土地点より高所（丘陵裾）に広がらず、道路下から水田が中心と考えられる。

出土遺物は古代瓦が最も多く、他に繩文時代の安山岩製打製石器（第16図・51）から弥生土器・須恵器・中世後期の瀬戸・美濃系陶器（50）も出土している。（31）は須恵質で蝶巣などの可能性もある。弥生土器（第16図・32～37）は耕作土を中心に前期から後期まで小破片が出土している。中期後半（IV-1様式）頃の刺突文の上に沈線を引く塙町系土器の破片もある。隣接する重富遺跡では弥生時代終末から古墳時代前期頃の木棺墓群も確認されている（鳥根県教育委員会1992）。

須恵器（39～49）は細片だが蓋は口唇部が下垂するものの（41）から天井部が糸切りのもの（44）、口唇部が直線的に退化したもの（45）がある。およそ石見8期から10期頃（奈良時代から平安初め・8世紀～9世紀代）と見られ、寺院の存続期間と見られる。水田の大迫窯跡（榎原2010）に輪状つまみが類似した蓋（42）もある。

（第14～16図・1～30）は試掘確認調査で出土した瓦である。丸瓦約658点（60.09kg）・平瓦約1,141点（174.84kg）で、焼成は須恵質と土師質でおよそ平瓦1：4、丸瓦1：7でいずれも土師質が多い。須

恵質のものは硬い焼きのものが目立ち、旭町誌で釉薬瓦として紹介されたような2次被熱でさらに硬く焼き締まった瓦もある。

重富遺跡の瓦窯跡出土瓦の特徴は報告書等で既に整理されている（鳥根県教育委員会1992・林2000）。瓦供給先は重富廃寺であることを前提として同分類で1隅と2辺が残るものと凸面調整で選び集計した。なお、焼成は前述の選別資料以外で土師質と須恵質の傾向を出しており、全点の分類ではない。

瓦の図版は集計数の多いものと法量がわかるものを優先して掲載し、数量等は1点しかない分類も含めて表4に示した。集計で2点以上あるものは第13図上の表に掲載して瓦の組合せを示した。

丸平瓦は凸面に叩き痕跡が残らず、工具ナデやハケメ調整を行うのが特徴である。痕跡の残らない叩き調整を行った可能性も残るが、今回の観察でもハケメ調整やナデ調整の下地（1次調整）に叩き痕跡は確認できなかった。以前の報告書分類を参考に、凸面に木目のない模骨状の縦長の面が見られるものを工具ナデ（1）、縦方向の木目痕が残るものをハケメ調整（4）とした。以前の分類では端部横方向工具ナデの有無で細分（2・5）されていたが、端部がないと決定できないため量は少ない。工具ナデは通常のナデ調整や不定方向のナデ（3）と区別しにくいが、ハケメ痕が観察できず端部も残らないものはすべてナデ調整（1・2）とした。平瓦は桶巻造りと考えられるが、台への巻付けが緩く粘土の接合部で斜めに剥離したものが目立つ。また布をかぶせた台へ粘土板が充分密着しないために粘土板に切り出した際の糸切り痕が残り、前述の接合部の段などで布目が途中で途切れたものも多い。

丸平瓦の法量は、平瓦は瓦窯跡で幅27.2cm・長さは31~48.4cmだが、寺跡出土例に比べ1.8倍近く長い。寺跡の平瓦には全長24.5~26.5cmのものがあり、幅27cm・長さ25cm前後で正方形状かやや幅広になる。丸瓦は無段式で狭端部6~7.8cm・広端部幅8.6~12cmである。全長が残る丸瓦はないが、平瓦と同様の場合には長さ25cm前後になる。隅切りの平瓦が約30点あり、瓦窯跡でも出土している。2辺残る個体はなく、2辺以上隅切りがあるかは不明である。成型方法は他の平瓦と同様である。また歪んで平坦になった平瓦か埠か区別しにくいものもある。

側端部調整は以前の分類の前にa（1面取り）・b（2面取り）・c（3面取り）・d（糸切り痕がそのまま残る）をつけ、（凸面）—（側部）—（端部）の順に表記した。丸平瓦ともに側端部2辺の組合せがわかるものは各種3点以下のものが多く、あまり規範がないように見える。側端部調整の傾向は平瓦の側部調整が1面取り43点・2面取り17点・3面取り2点、端部調整は1面取り54点・2面取り8点である。丸瓦の側部調整は糸切り後未調整26点・1面取り20点・2面取り13点、端部調整は1面取り52点・2面取り4点となる。

凸面調整は丸平瓦とともに工具ナデが主体で次にハケメ調整が多い。およそ丸瓦で2:1、平瓦で3.5:1と圧倒的に工具ナデ調整が多い。一方、軒丸1類の瓦当面接合後の凸面調整にもハケメとナデがあるが、軒丸瓦の場合はハケメのほうが多い。平瓦の側端部調整は凸面調整が異なっても共通して側端部1面取りが最も多い。丸瓦はすべて無段式で、丸筒の分割面に1~2面取りか糸切り痕をそのまま残す未調整のものが多い。凸面に縦叩き痕が残る瓦は9点の細片のみである。

軒丸瓦は大きく2種類あり、単弁9葉蓮華文を1類（23~28）、単弁8葉蓮華文（29・30）を2類とする。これまでの表採や調査で1類が10点、2類が2点出土している。1類が創建期瓦で2類はやや後出と考えられる。重富瓦窯跡では1類が実測図数で11点出土しており、范傷の比較から同范とされている。このことから創建期瓦は重富瓦窯跡を中心に焼かれている。なお、1類にはもう1種范傷が異なるものがあり、范型は2種あると見られる。軒丸接合部凸面はハケメ調整が多くナデ調整もある。瓦当裏の接合部にヘラ刻みを入れると、丸瓦の凸面にタテのヘラ刻みを3本以上入れたものがある。

軒丸2類は別の瓦窯跡で焼かれた可能性があり、2点しかないが焼成は硬質で創建期か、やや後出と考えられる。下府廃寺軒丸IV類（第18図）の中心文様と外区鋸歯文に重富軒丸1類の外区線鋸歯文を加え、凸線の外区二重鋸歯文を削ったと考えられ、間弁は重富軒丸1類から簡略化する。蓮弁が離れるなど全体が簡略化するが、凸線の太さや突出する中房・8葉蓮弁文は下府廃寺軒丸IV類を踏襲している。

また、単純に寺跡資料から瓦窯跡資料を引いた残りを、別の瓦窯跡資料と想定することもできる。第13図上の表の下界線にあたり、側端部調整の組合せも瓦窯跡より多い。発掘調査された瓦窯跡は平瓦に比べて丸瓦が少なく、軒丸1類は同范関係からこの瓦窯跡で焼かれている。寺跡では土師質焼成の丸瓦の比率が高く、軒丸2類と大半の丸瓦、一部の平瓦が別の瓦窯跡の可能性もある。丸瓦の糸切り分割は両者にある。この引き算では瓦窯跡でない丸平瓦が多い傾向になり、瓦窯跡と寺跡の両者を完全に同一の基準で見ていい不確定な点もある。2基以上の瓦窯の存在も考慮する必要もある。

創建期の瓦の組合せは、点数の多い軒丸1類（10点・23~28）と平瓦1-a1-a5（17点・1、2）、4-a1-a5（7点・3）、丸瓦1-d3-a1（9点・4）、4-d3-a1（6点・5）が主体である。平瓦は凸面ナデ調整かハケ調整・側端部1面取り、丸瓦は凸面ナデ調整かハケ調整・側部糸切・端部1面取りの組合せである。瓦窯跡の報告では軒丸1類と組み合う可能性がある平瓦があったが、寺跡では同様の端部がやや肥厚し端部面がナデで凹む平瓦（端部a3）は1点しか特定できず、特定の軒平瓦の存在は不明確である。その後は軒丸2類（29・30）が2点、焼成の悪い凸面縄叩きの丸平瓦（19~22）が9点あり、小規模な補修が1~2時期あった可能性がある。凸面縄叩きの丸平瓦は軟質の褐色・白色系（土師質）で、瓦窯跡の瓦が褐色系の土師質・硬質の須恵質などに対し焼が悪く後出的である。平瓦は褐色系で弧深が浅く一枚作りの可能性がある。凸面の縄叩き痕が側端部に平行しない丸瓦（22）がある。側端部が両方残る破片はないが、下府廃寺・国分寺の瓦とは異なる印象をうける。

出土した須恵器から時期をみると、石見8期（8世紀前半・奈良時代）の体部が丸みをもち端部が下垂する蓋が最も古い。蓋のつまみはボタン状のものではなく、すべて輪状である。瓦の文様等から7世紀後半まで遡る説もある（妹尾2011）。瓦窯跡の地磁気年代はA.D.660±10の年代がでており、やや古いほうへずれているとされている（時枝・伊藤1992）。古代寺院は起工から諸堂がすべて整うまで、二十数年を要するのが普通（上原1997）という点も考慮すると創建期は少なくとも7世紀末から半まで遡る可能性がある。最も新しい須恵器は石見10期（9世紀・平安時代）で寺院が維持された期間の下限と考えられる。石見7~8期（7世紀後半~8世紀前半）が創建期と考えられる。

この時期幅で、創建期に重富瓦窯跡を中心に軒丸瓦1類と凸面ハケメ・ナデ調整の瓦が用いられ、軒丸瓦2類も少量用いられている。その後、少量の凸面縄叩き丸平瓦を使った補修が行われている。軒瓦の文様が2種しかなく大規模な補修は行なわれていない。近接する重富瓦窯跡と別の瓦窯跡で創建期の瓦を焼き、補修時も別の瓦窯から瓦が供給されている。他の瓦生産地は現段階で那賀郡（重富廃寺周辺の別の窯跡・石見国分寺、下府廃寺周辺・久本奥窯跡）、邑智郡（久永古窯跡群・コオギヤスミ窯跡で瓦1点表採）がある。

重富廃寺など国分寺を除いた石見国内の寺院の共通性として、軒丸瓦はいずれも外区に鋸歯文を巡らし明確に組み合う軒平瓦がない傾向がある（第18図・林2000）。軒丸瓦の外区鋸歯文は、連続する斜線で一つの三角列をつくるもの（下府廃寺軒丸IV類と天王平廃寺・太い凸線と線の差あり）、外と内の圓線に2方向からの斜線で2つの三角列をつくるもの（重富軒丸1類）、これら2つが重なり2重の三角列をつくるもの（重富軒丸2類）がある。中心文様は天王平廃寺の軒丸瓦は3点しかなく、外区は1本の線鋸歯文で中心文様は8葉蓮華文の間から間弁より大きい花弁が8葉見える。いわゆる「のぞき花弁」と考えられ、平坦な1+8の蓮子の中房も併せ、石見国内にはない中心文様である。重富軒丸2類の單弁8葉蓮華文は創建期の單弁9葉蓮華文の1類からそのまま変化したというより、中房が突出した單弁8葉連弁文の下府廃寺軒丸IV類の影響と考えられる。外区凸線鋸歯文は下府廃寺軒丸IV類に従来の重富軒丸1類の外区線（2つの三角列）を加えて鋸歯線が増え、中心文様は簡略化したように見える。少なくとも7世紀後半から8世紀代に各地域の伝統的な繋がりの中でそれぞれ創作されたと考えられる。これらが時期差によるものは不明確だが、中心文様の簡略化等からみると重富軒丸2類が最も後出と考えられる。

国分寺を除いた石見国で最も瓦の種類が多い寺院は那賀郡の下府廃寺（石見6C~7期創建）で、後

に国分寺系の軒瓦も用いる国内唯一の補修型寺院である。他の寺院は軒丸が1～2種しかなく、非補修型寺院に近い。下府廃寺では金堂周辺で最も多い軒瓦は軒丸ⅣA類（12点）、軒丸ⅡB類（9点）、軒丸ⅠA類（6点）・軒平ⅠA類（3点）、塔跡周辺では軒丸ⅠA類（8点）、軒丸ⅡC類（7点）、軒丸ⅠB類（5点）、軒平ⅠA類（9点）、軒平ⅡB類（6点）となる。このうち外区に殊文をもつ軒丸ⅡC類、石見国分寺でも出土する軒丸ⅡB類・軒平ⅡB類は後出で補修によるものである。

このうち下府廃寺軒丸Ⅳ類は金堂跡周辺で最も多く出土しているが、他の瓦に比べ文様が直線的でやや新しいと見られ金堂造営の最終段階か補修瓦と考えられる。塔跡と金堂はほぼ同時期に造営が進み、早い段階に金堂で軒丸Ⅳ類が多く所用されている。同時期かやや先行して瓦当面の凸凹が少ない天王平廃寺と重富軒丸Ⅰ類が造られたと考えられるが、前述のとおり中心文様や鋸歯文の造りは下府廃寺軒丸Ⅳ類とは異なる。凸線と細線、瓦当面の凸凹の差もあり、地域伝統的な外区鋸歯文の情報とそれぞれの中心文様を組み合わせて創出された可能性がある。

また、全点ではないが下府廃寺出土瓦の平瓦凸面調整を見ると格子・平行叩き38・繩叩き37・ナデ14・離砂付繩叩き12・ハケ7・ケズリ3と、格子・平行叩きと繩叩きが最も多い傾向にある（註4）。全体で土師質のものが多い。重富と共に通すナデ・ハケ調整の丸平瓦は下府廃寺にも（第17図・52～55）など一定量見られる。この平瓦は重富ほど粗雑な印象はないが、土師質で厚みがあり斜めの粘土板貼り合わせ痕が残る同一系譜の技法である。しかし、端部調整は重富に比べ凹面をぐく浅く削るものが多く、後出の国分寺の繩叩き1枚造り平瓦にもある。分割面糸切丸瓦の凸面調整はナデのみでハケメのものは確認できなかった。凸面ハケメの丸瓦は未確認で、通常の丸平瓦の凸面仕上げは明らかに丁寧で重富廃寺とは印象が異なる。重富廃寺の丸瓦は丸瓦凸面広端部を削るものが多いが、下府廃寺では凸面広端部と内面を削るものが共存し、国分寺では基本的に凹面広端部を削る。丸瓦分割面に糸切り痕が残る点は重富・下府廃寺で共通する。

平瓦の規格では重富廃寺が横長の正方形状（全長25cm前後・幅27cm）が多いのに対し、凸面格子叩き平瓦は横路遺跡出土品で長方形（全長38cm・幅25cm）になる。国分寺の繩叩き一枚造り平瓦（全長35.9cm・幅25.2cm）も同様である。平瓦の幅は変わらず、長さは格子叩きの段階から長くなる。

これらの類似点と差異を考慮すると、重富軒丸2類などを製作した別の瓦窯跡には同系統の軒丸瓦を製作できる下府廃寺系の技術指導者か、技術指導を受けた在地工人が少數いた可能性がある。

石見国での瓦生産や寺院造営は石見7期（7世紀後半）から始まったと考えられ、窯跡は瓦陶兼用の本片子窯跡（石見7～8期）、瓦中心の重富瓦窯跡（石見7期？）が古く、久本奥窯跡はやや後出である。寺院跡では下府廃寺（石見6C？～7期）、重富廃寺（石見7？～8期）、天王平廃寺（石見7～8期、塔は平安期か）がある。このうち、本片子窯跡と下府廃寺跡は出土須恵器、他は重富瓦窯跡の地磁気年代（AD.660±10）による時期推定である。中国地方での寺院造営は7世紀中葉までに備前・備中・安芸・伯耆、7世紀後半に備後・周防・長門・因幡・石見、7世紀末に出雲国で始まったと考えられている（妹尾2011）。

これらは瓦の生産年代と須恵器の年代・寺院での使用年代が混在しており、厳密な前後関係は比較しにくい。軒瓦からみた年代と創建期の系譜も不明確である。瓦の凸面調整の特徴から（A）凸面ナデ調整瓦が主体でハケ調整瓦を一定量含む本片子窯跡（註5）、重富瓦窯跡・重富廃寺と、（B）格子・平行・繩叩き瓦が主体で凸面ナデ・ハケ調整瓦も一定量含む下府廃寺・天王平廃寺がある（表5）。（B）は長い期間の瓦が含まれているが、下府廃寺は正方形の格子・平行叩き瓦、天王平廃寺は菱形の格子叩き瓦が多い傾向にある（註6）。天王平廃寺は石積基壇が補修されており、塔基壇土から前述の軒丸瓦が出土し、塔が後出である。塔ができる伽藍が揃うのは概ね平安時代以降と考えられる（註7）。

中国地方の7世紀後半創建の古代寺院では当初から格子・平行叩き瓦、格子叩きを縦横方向にナデ消す平瓦・横ハケ丸瓦がある。これらと地域性の強い凸面ナデ・ハケ調整瓦は、現段階でほぼ時間差ではなく各寺院と生産集団の特徴と考えられる。桶巻造りの繩叩き調整の瓦は格子・平行叩きと同時かやや後

出と考えられ、下府廃寺・天王平廃寺とともに多い。現段階では凸面ナデ・ハケ調整の瓦生産は石見7期（7世紀後半）に始まり、重富廃寺では凸面ナデ・ハケ調整瓦のみが使用され、下府廃寺・天王平廃寺では格子・平行叩き瓦と少量の凸面ナデ・ハケ調整瓦が同時期に所用されたと考えておきたい。

各寺院の壇越を郡（評）や郷との関係で見ると、寺院建立と各郡（評）の領域区分が併行し地域概念があったかは不明確だが、重富廃寺は後の那賀郡都於郷、下府廃寺は那賀郡か国府の造られる那賀郡伊甘郷、天王平廃寺は安濃郡波瀬郷か安濃郡の有力者との関係を想定できる。後の各郡（評）と郷の有力者による石見国内の伝統的な繋がりと、他国との関係の中で古代寺院の造営と維持を行ったと考えられる。国府と同じ那賀郡伊甘郷に国分寺・国分尼寺が造られても国分寺系軒瓦は郷内と隣接する都郷でしか出土せず、軒瓦の種類が多く長期に維持管理されたのは下府廃寺・国分寺・国分尼寺のみである。

重富廃寺は下府廃寺と同じ那賀郡だが山間部に位置し、石見沿岸部と安芸山間部（山陽側）の両方に接する。最も早く規格的な瓦製作技術が導入されたのは下府廃寺と見られるが、瓦の製作技法など那賀郡沿岸部以外にはあまり影響しないようである。同じ那賀郡でも7世紀後半～8世紀前半に石見国が立国されて東西で領域区分が進み、国の中央が那賀郡として設定されたなら郡内でも地域差が強く残っていた可能性もある（註8）。両寺は直線で約20km離れているが、地理上はさらに距離感がある。軒丸文様・丸瓦の糸切り分割など一部に沿岸部の下府廃寺の影響が見られ、平瓦は美濃郡本片子窓跡との類似点がある。山陽側など他地域の影響は特定できない。国内の伝統的な繋がりにあたる凸面ナデ・タテハケ調整の瓦や外区鋸歯文の軒丸瓦と、国を超えて広範囲で共通する凸面叩き目平瓦など、各地の瓦生産・寺院造営の技術者集団の繋がりや壇越間の関係を整理していく必要がある。

（柳原）

（註1）邑南（石見）町の湯谷悪谷2号穴について大谷晃二氏にご教示いただいた。石見銀山遺跡宮ノ前地区は大田市教委の御好意により実見。杯底部に板状圧痕は残らないが底径が大きく器壁が厚いもので、成形時から異なる特徴がある。周辺ヘラケズリの有無の差もあるが類例は芝窓跡・蔵地宅後古墳・下府廃寺跡などにある。

（註2）益田市杉追窓跡の須恵器は益田市教委の御好意により一部実見。窓の断面調査で窓内に組み合って置かれた蓋杯は天井部に板状圧痕・周辺ヘラケズリ（口径13.8～15.4cm）12点、回転ヘラケズリ（口径15.4cm前後）4点で、口径に差があり天井部の調整が異なるものは組み合わない。

（註3）美郷（邑智）町の熊見横穴群については大谷晃二氏にご教示いただいた。アーチ形で平面形が正方形に近い大墓1号横穴は熊見A号横穴、長方形の福原宅裏横穴1号穴は熊見B号横穴に類似する。

（註4）下府廃寺は10-1調査区（金堂北東隅）の瓦を中心一部を分類集計した。さらに集計点数を増やすべく叩き瓦は格子叩き瓦よりも多くなる可能性がある。

（註5）益田市本片子窓跡の遺物は益田市教委の御好意により一部実見。大半が須恵器で瓦は25点程しかないが、平瓦は最も重富廃寺に類似点が多い。丸瓦はほとんどなく、重富・下府廃寺のような側部の糸切分割痕跡もない。

（註6）大田市天王平廃寺の瓦は大田市教委の御好意により一部実見。塔が後出で時期幅が広い資料だが、出土地点が不明確なため一括して全体の約1/3を分類集計した。

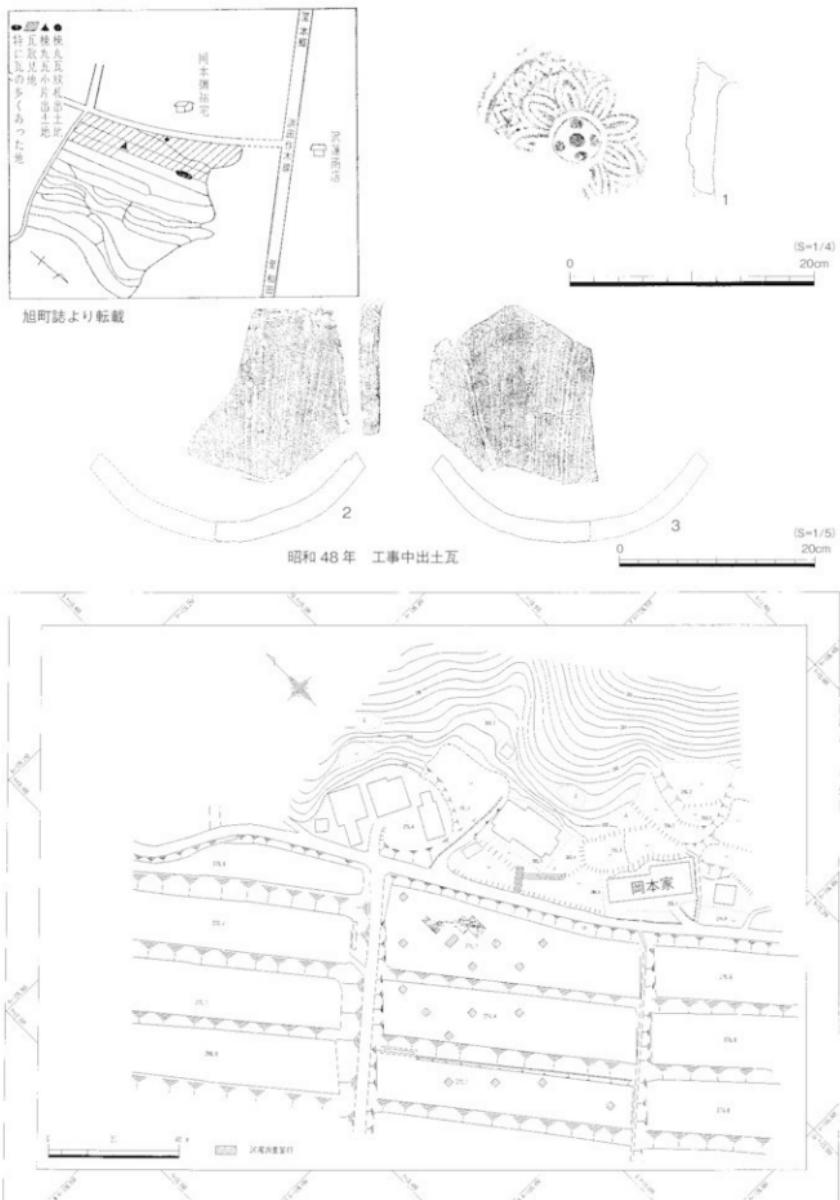
（註7）鳥根県埋蔵文化財調査センターの林健亮氏から天王平廃寺の塔は平安期に降ると考えられること、1枚造りの重弧文軒平瓦があることを御教示いただいた。

（註8）国評（郡）制の成立過程は平石2010を参考にした。那賀郡は国府がおかれたが、地域としての一体性に乏しい郡域と考えられている。国域の真中の那賀郡は郡内でも地形的に東の山地側へ突出し土器の様相など山間部の邑智郡に近い都於郷（旭町周辺）や中間にある広大な久佐郷（金城町周辺）、西の美濃郡に近い三隅郷（三隅町周辺）を含む。最も面積の大きい美濃郡は後に鹿

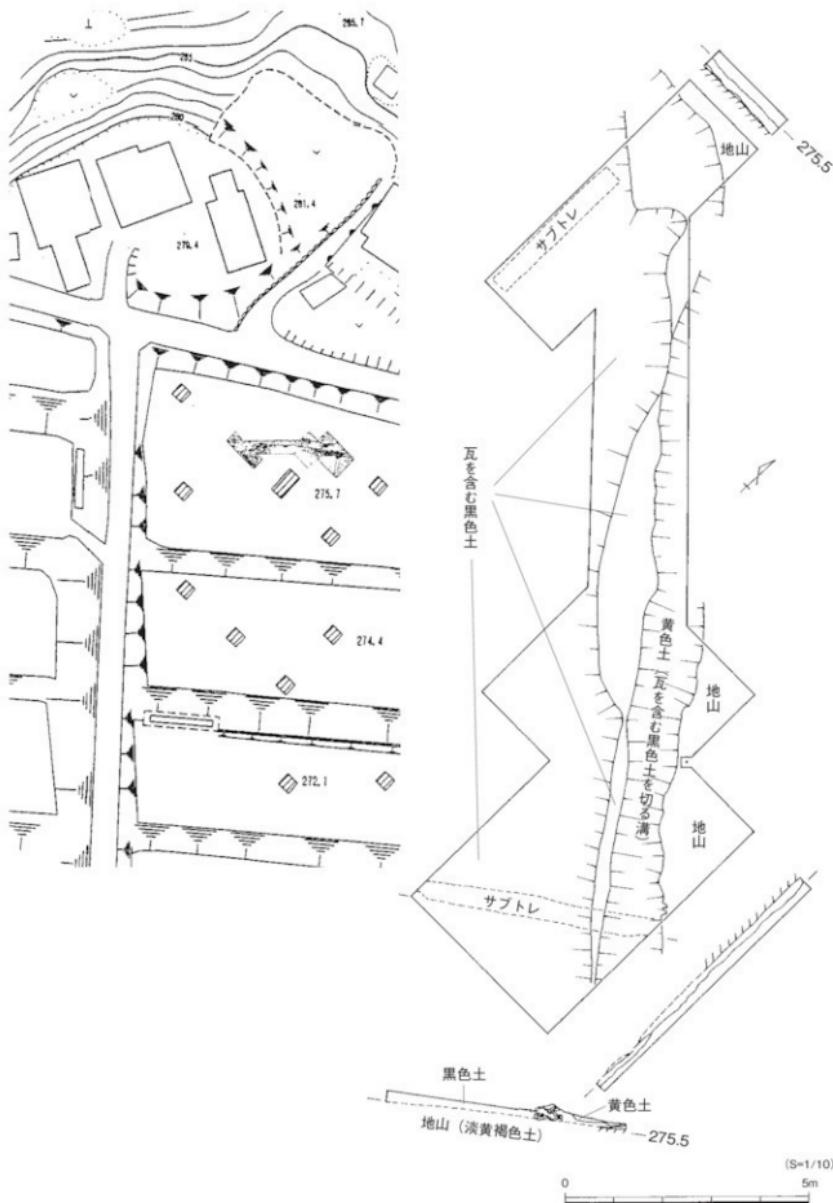
足郡が分割されたのに対し、邑智郡の次に広大な那賀郡は沿岸部の浜田に国府以後も行政的中心がおかれたが、成立時に一体性が乏しかったことや周辺に広大な郷を挟むこともあり真中にそのまま現在まで残った印象を受ける。

参考文献（63頁の旭自治区関連以外）

- 赤井和代2002「隱岐島出土の須恵器」「鳥根考古学会誌』第19集 鳥根考古学会
吾郷和宏1991「江の川中流域における横穴式石室の様相」「鳥根考古学会誌』第8集 鳥根考古学会
植野浩三1983「須恵器蓋杯の製作技術」「文化財学報』第2号 奈良大学文学部文化財学科
上原真人1997『歴史発掘11 瓦を読む』講談社
内田律雄1984「出雲刈山4号墳と嵌入須恵器」「ふいーるど・のーと』No.6 本庄考古学研究室
内田律雄・曳野律夫・松本岩雄・渡辺貞幸1991「鳥根県」『前方後円墳集成』中国四国編 山川出版
小笠原啓二・山内英樹2005「須恵器に残る圧痕について—杯蓋口縁端部の「刻目状圧痕」の観察—」「紀要愛媛』第5号（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
門脇俊彦1964「瑞穂古代史概観」「瑞穂町誌』第1集 のち「石見古代史概観」として門脇俊彦2002『古代文化叢書8 山陰地方における古墳群と地域社会』鳥根県古代文化センターに再録
柳原博英2010「石見国の須恵器生産と出雲產須恵器」「出雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性－」鳥根県古代文化センター
柳原博英2013「鳥根県西部における古代・中世の時期区分メモ」「山陰中世土器研究 1」山陰中世土器検討会
鳥根県古代文化センター 2009「めんぐる古墳の研究」
島根県立八雲立つ風土記の丘1998「八雲立つ風土記の丘」Na147・148・149合併号
妹尾周三1997「瓦からみた安芸と備後」「広島県歴史民俗博物館 研究紀要』第1集
妹尾周三1999「広島の古瓦」「考古学から見た地域文化—瀬戸内の歴史復元—」溪水社
妹尾周三2011「出雲へ伝わった仏教の特質—古代寺院から見た地域間交流とその背景—」「古代出雲の多面的交流の研究」鳥根県古代文化センター
田昭三1981「須恵器大成」角川書店
八賀晋1998「須恵器製作の一視点」「橘崎彰一先生古稀記念論文集」
浜田市教育委員会2008「歳次宅後古墳」
林健亮2000「古代石見の瓦造り」「八雲立つ風土記の丘 No161」鳥根県立八雲立つ風土記の丘
平石充2010「山陰西部地域の豪族と国制の成立」「出雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性－」鳥根県古代文化センター
平安学園考古クラブ1966「陶邑古窯址群1」
松江市教育委員会1993「伝字半加比売命御陵古墳」



第11図 重富廃寺跡 周辺図



第12図 重富廃寺跡調査区 平面図

凸面調整	平瓦(桶巻造)		丸瓦		軒丸
	1・2(工具ナデ)	4・5(ハケ)	1・2(工具ナデ)	4・5(ハケ)	
^{7世紀後半} ^{8世紀} 側削	1-a1-a5 (17)	4-a1-a5 (7)	1-d3-a1 (9)	4-d3-a1 (6)	軒丸1 (10) 範2 (重富系 ハケ・ナデ)
	2-b2-a9 (4)		1-a4-a1 (3)	5-d3-a1 (3)	軒丸2 (2) 範1 (下府系? 瓦当文様)
	1-b2-a5 (4)		1-a1-a1 (2)	5-a1-a5 (2)	
	2-a1-a5 (3)		1-b5-a1 (2)		
	2-b2-b1 (3)		1-d3-a5 (2)		
		5-b2-a9 (2)	2-a4-a1 (2)		
			2-b6-a3 (2)		
補修	繩叩き				国分寺・下府廃寺以外か
	平瓦 (6)		丸瓦 (3)		

下界線 発掘調査された瓦窯跡ではなく、寺跡のみで確認。別窯跡の可能性あり

() 破片数

4-a1-a5 (9) 脳土分析資料にあり

凸面調整	平 瓦			丸 瓦		
	側 部	端 部	側 部	端 部	端 部	
1. 傾方向工具ナデ						
2. 傾方向工具ナデのち 端部横方向工具ナデ						
3. 不定方向ナデ						
4. 傾方向刷毛目						
5. 傾方向刷毛目のち端 部横方向工具ナデ						
9. 繩叩き						
10. 自然軸・不明						
焼 成						
H. 土師質						
S. 須恵質						

a・1面取り、b・2面取り、c・3面取り、d・系切り痕がそのまま残る

第13図 重富廃寺跡出土瓦分類表

表4 重富廢寺跡出土瓦集計表

平瓦

凸面	2邊残 側部		数量	瓦空跡	重量kg	凸残	重量kg
	端部						
	a1	a5	17	○	93.07	493	81.77
	a1	a9	1	×			
	a1	b1	1	×			
	b1 · c2	a1		○			
	a1	b6		○			
	a1	b8	1	×			
	a1	c2		○			
1	a1 · a5	b6		○			
	a5	b1		○			
	b2	a5	4	○			
	b2	a3		○			
	b2	b1		○			
	b2	b8	1	×			
	b3	a5	1	×			
	b3	b1		○			
	b8	b6		○			
	a1	a5	3	×			
	a1	a3	1	○			
	a1	a5 · b1		○			
	a1	b6		○			
	a1	a10	1	×			
	b2	a5	1	×			
2	b2	a3		○			
	b2	a9	4	×			
	b2	a10	1	×			
	b2	b1	3	×			
	b3	a3		○			
	b3	a9	1	×			
	b3	b6	1	×			
	b4	a3		○			
	c9	a9	1	×			
	c9	b1	1	×			
	a1	a5	1	×			
	b2	a9	1	×			
3	b2	b6		○			
	b3	a3		○			
	b3	b1 · c2		○			
	a1	a5	7	○			
	a1	a9	2	×			
	b2	a3		○			
	b2	a5		○			
4	b3	b1		○			
	b3	b1 · b6		○			
	b3	c7		○			
	b4	a5		○			
	b6	a5		○			
4のち1	a1	b1		○			
	a1 · a5 · b6 · a3			○			
	b3	a5		○			
	a1	a3		○			
	a1	a5		○			
	a1	a9	1	×			
5	a1	a10	1	×			
	a1	e4		○			
	b2	a3		○			
	b3	a3 · a5		○			
	b4	a3		○			
10	a1	a1	4	×			
	a1	a9	1	×			
	計		62		93.07	841	81.77

破片

焼成	数量	重量kg
S	208	14.00
H	871	91.64
計	1079	105.64

總数

平瓦
破片数
重量kg

丸瓦

凸面	2邊残 側部		数量	瓦空跡	重量kg	凸残	重量kg
	端部						
	a1	a1	2	×	25.03	186	35.06
	a1	a5	1	×			
	a4	a1	3	×			
	a7	a1	2	×			
	b9		2	×			
1	b5	a1	2	×			
	b8	a5	1	×			
	b6	a1	1	×			
	c2	a1		○			
	d3	a1	9	×			
	d3	a3	1	×			
	d3	a5	2	×			
	d3	b2	1	×			
2	a1	a3	1	×			
	a4	a1	2	×			
	b5	a1		○			
	b6	a1	1	×			
	b6	a3	2	×			
	a1	b4		○			90
	a1	b4	1	×			
	a4	a1	1	×			
	a4	a3		○			
4	a7	a1	1	×			
	b5	a3	1	×			
	b6	a1	1	×			
	b6	a5	1	×			
	d3	a1	6	×			
	d3	a3	1	×			
4のち1	c2	a3		○			
4～5	d3	a3		○			
	a1	a5	2	×			
	a7	a5	1	×			
5	d3	a1	3	×			
	d3	a5	1	×			
	d3	b4		○			
10	a1	a1	1	×			26
	a7	a1	1	×			
	b5	a1	1	×			
	d3	a1	1	×			
	d3		1	×			
	計			59		25.03	302 35.06

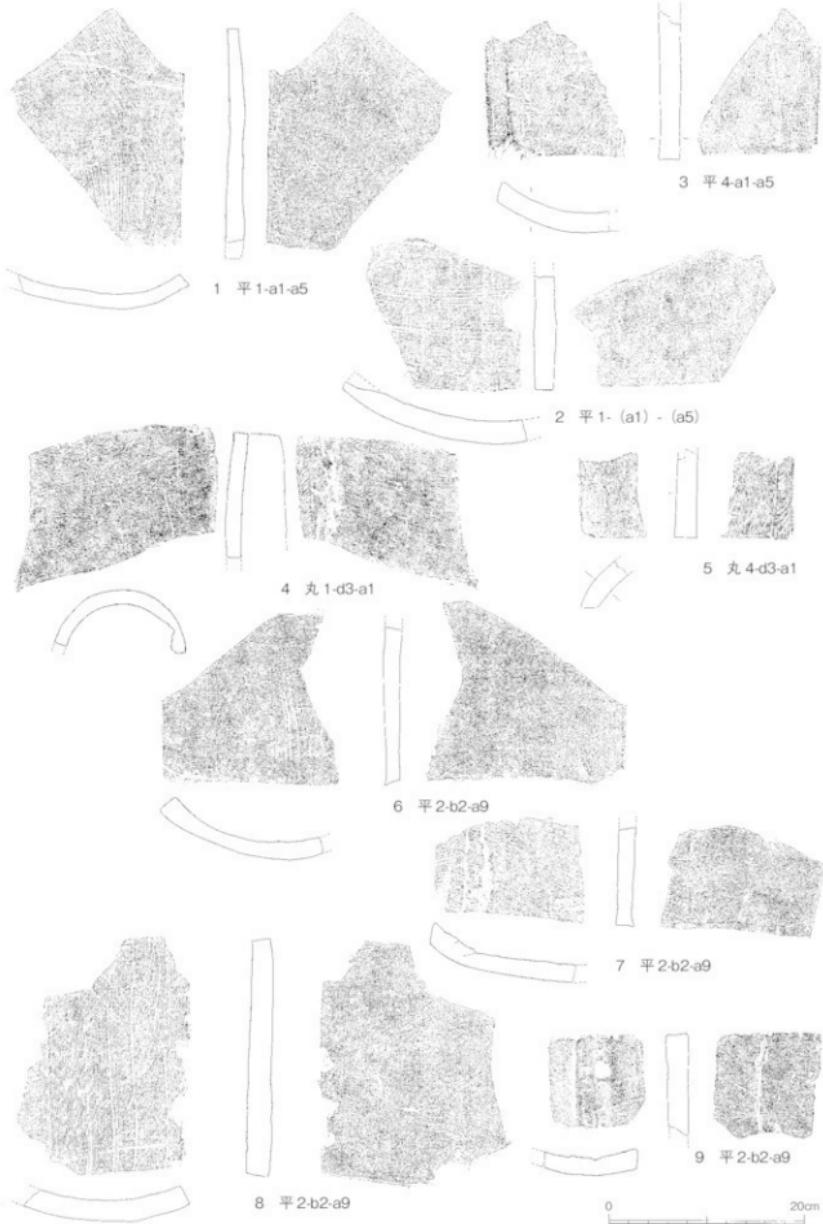
破片

焼成	数量	重量kg
S	41	2.76
H	151	10.18
不明	36	1.92
計	228	14.86

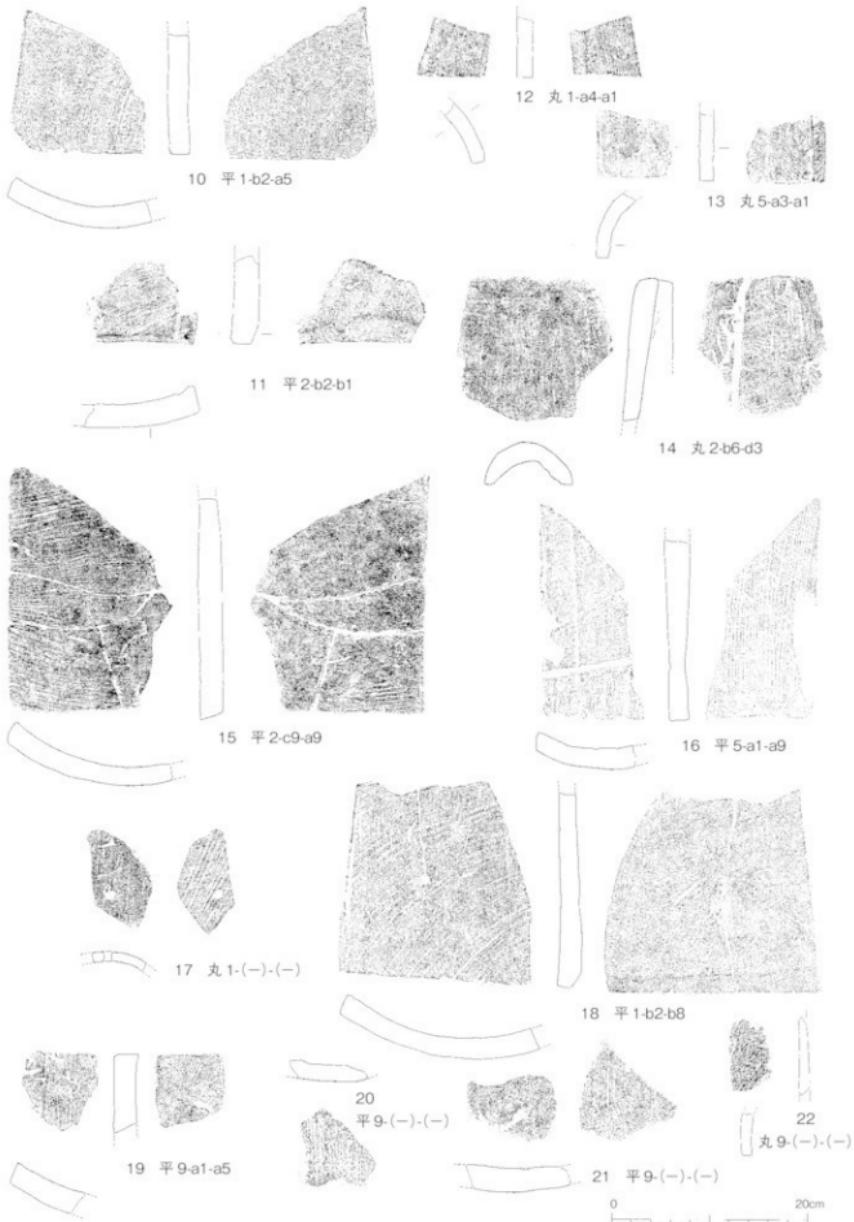
總数

丸瓦
破片数
重量kg

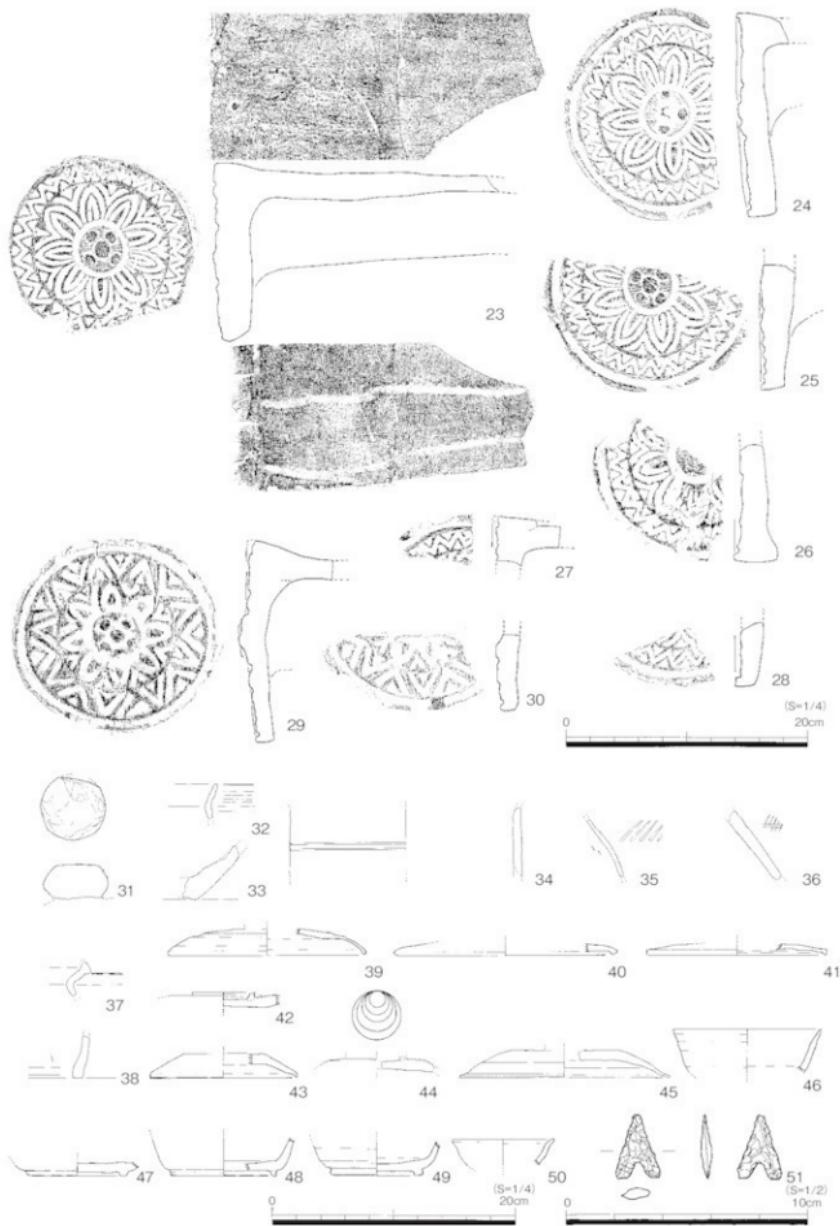
※ 9. 縄叩き平瓦6点、丸瓦3点あり。



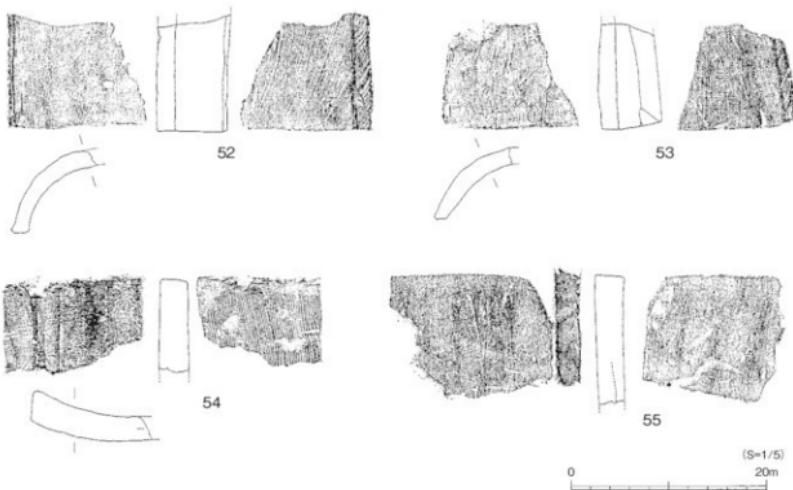
第14図 重富廃寺跡出土遺物(1) (S=1/5)



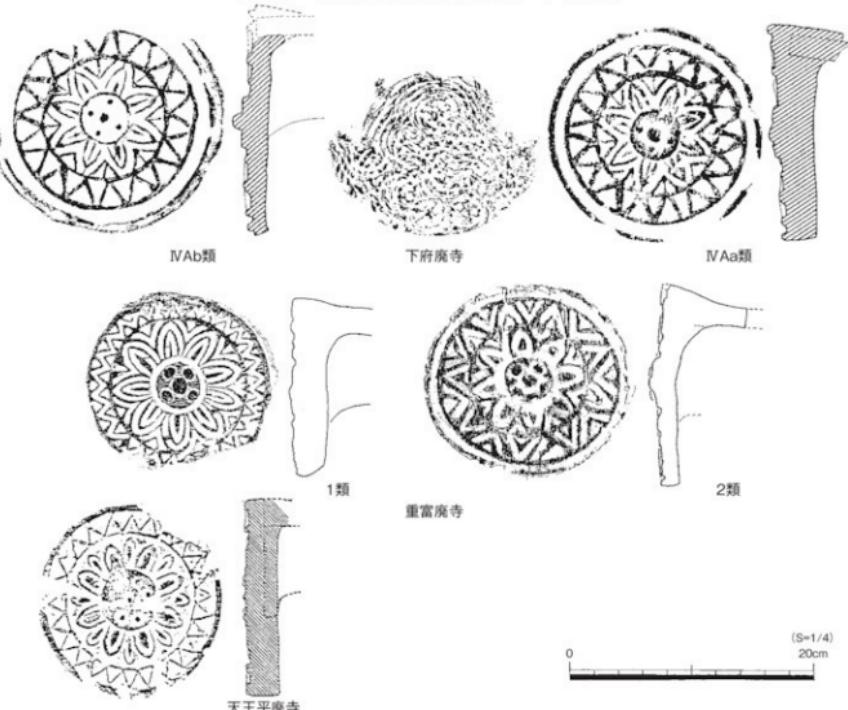
第15図 重富廐跡出土遺物(2) (S=1/5)



第16図 重富廃寺跡出土遺物(3)



第17図 下府廃寺跡出土瓦（凸面ナデ・ハケ調整）



第18図 石見国古代寺院の共通性のある軒丸瓦（各報告書より転載）

表5 石見國の主な古代瓦の特徴

	那賀郡 伊加郡(国府)	都農郡 都於郡	安濃郡 波瀬郡	美濃郡 答氣郡	邇摩郡 群治郡
白鳳～奈良前期					
下府廃寺	国分寺・石見國分 尼寺	寺瓦窯跡	久本奥 窯跡	重富廃寺	重富瓦 窯跡
凸面タテナデ平瓦(桶巻造)	△		○	○	○
凸面タテハケ平瓦(桶巻造)	△		○	○	△
凸面ヨコナデ平瓦(桶巻造)					△
凸面タテハケ丸瓦			○	○	△
凸面ヨコハケ丸瓦			×	×	△
凸面ヨコナデ丸瓦				△	×
丸瓦側面部差分割	○		○	○	×
凸面正格子・平行叩き平瓦(桶巻造)	○		×	×	×
凸面菱形格子・平行叩き平瓦(桶巻造)	○		×	×	○
外囲斜文の軒丸瓦	○1線		○1線	○2・3 線	○2線
凸面縦叩き平瓦(桶巻造)	○		○?		○
無段式丸瓦	○	△	○	○	○
有段式丸瓦	○	○	○	△	△
奈良後期～平安					
平瓦一枚造り(凸面縦叩き・難糸)	○	○	○	△	○
石見國分寺軒瓦	○	○	○		

浜田市教育委員会1993「下府廃寺跡」

浜田市教育委員会 2006『史跡 石見國分寺跡・県史跡 石見國分尼寺跡』

鳥根県教育委員会1995「一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1(庵伏山・半田浜西・二宮C遺跡・久本奥窯跡)」

鳥根県教育委員会1992「中国横断自動車道鳥島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV」

鳥根県教育委員会1970「天王平廃寺跡」「鳥根県埋蔵文化財調査報告書」第Ⅱ集

益田市教育委員会1982「木片子遺跡・木原古墳」

鳥根県教育委員会2008「中祖遺跡」「一般国道9号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1」

表6 中国地方の主な初期古代寺院(妹尾1997・1999・2011より作成・出雲石見伯耆は筆者追加)

	周防	長門	安芸	石見	備後	備中	出雲	備前	伯善	因幡
I 558～ 640頃	畿内への 波及	飛鳥寺・ 豐浦寺				末ノ奥 窯?				
II 640頃～ 660頃	先進地への 波及	山田寺・ 百濟大 寺		横見廃寺・ 明智地廃 寺		秦原廃 寺		貴田廃寺	太御堂廃 寺	
III 660頃～ 680頃	全国各地 への普及1	川原寺・ 弘明廃寺・ 多々良魔 深川廃寺			寺町廃寺・ 中谷廃寺・ 重富廃寺				等ヶ坪廃寺・ 折本廃寺	
IV 680頃～ 710頃	全国各地 への普及2	法隆寺 寺			天王平廃寺 (基礎建物)		教吳寺・ 来美廃寺・ 上院廃寺?			(683?)
V 710頃～ 740頃	全国各地 への普及3	垂原宮					新造院?			
VI 740頃～	国分寺の造営				国分寺・尼寺					

表7 旭町の古墳編年表

		編年基準		須恵器		施北部(木田)		施中央部(東宮)		小寺		福原										
		出雲・ 島根	出雲	石見	(益后部)	山ノ内		西つづらもて		東	宮原	等	1	2	3	6	9	11	12	1号 横穴	4	2
1080																						
5																						
412	6	TK73																				
7		TK216 ~TK308																				
471	8	TK23	1周	1			○95 ~105															
500		TK47																				
		MT15																				
9			2周	2				○4 ~5	○4 ~6													
550		TK10								●16												
588	10	TK43	3周	3				○7 ~9		○16												
600		TK209	4周	4	1					○14 ~15												
		飛鳥I	5・6a期	5・6A	II					○12												
650	未 周	終 飛鳥II	6b-c期	6B	III					●12												
		飛鳥III	6d期	6C						●12												
		飛鳥IV 平成I (余切り)	7周	7	V					●12												
			8周	8	V	1				●12												

出雲地域の編年基準は鳥取県教育委員会2003「鳥取県古代文化センター調査研究報告書16 宮山古墳群の研究」

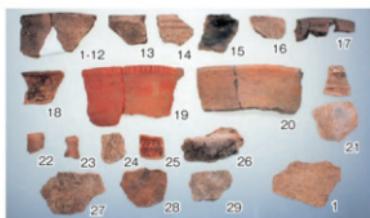
鳥取県教育古代文化センター・西風文化財センター2004「鳥取県古代文化センター調査研究報告書23 松江市東部における古墳の調査」を基に作成

凡例 ○円墳 ●前方後円墳 ■前方後方墳 ? 墓形不明 ◇ 横穴 数字は規模

石見地域の須恵器編年は柳原2010年を基に作成



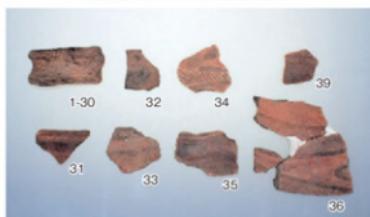
坂井原遺跡 緑帯文土器 1



坂井原遺跡 緑帯文土器 2



坂井原遺跡 緑帯文土器 3



坂井原遺跡 小池原上層式土器



坂井原遺跡 凹線文土器



坂井原遺跡 底部



坂井原遺跡 石器



山ノ内古墳群 12号墳周溝



山ノ内古墳群 34号墳周溝



山ノ内古墳群 34号墳周溝出土 石見型杯



やつおもて古墳群 9号墳



福原宅裏横穴群 2号穴



福原宅裏横穴群 3号穴



福原宅裏横穴群 工事中出土遺物



新塚古墳群 出土遺物



重富廃寺跡 軒丸瓦



重富廃寺跡 丸瓦



重富廃寺跡 平瓦



重富廃寺跡 繩叩き瓦



重富廃寺跡 瓦以外

第5章 浜田市治和町鰐石試掘調査

第1節 調査の経過

平成23年4月11日付で島根県合板協同組合浜田針葉樹工場より、工場敷地拡大のため文化財等の有無及び取扱いについての協議書の提出を受けた。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地の鰐石遺跡の北西約250mにあたり、また背後の丘陵地には鰐石古墳群が存在していることから、試掘調査を行った。

調査地は2地点で4m²、浜田市治和町口706・711番地にあたる。調査期間は平成23年5月9日から平成23年5月25日。また、試掘調査に合わせて、鰐石1号墳の略測等の鰐石古墳群の調査を行った。

第2節 調査の概要

試掘調査地は、昭和48年に発掘調査が行われた鰐石遺跡から約250m北西の谷部分にあたる。現在の工場敷地と周辺は既に造成が行なわれており、丘陵斜面も岩盤が多く露出し石を多く含む崩落土が目立つ。このため造成が行なわれていない谷の入口に1m×2mの調査区を2地点設定して調査を実施した。

T1（西側谷）

現地標高4m。地表下約0.45mから粘性が強くなり、全体的に黄色のクサリ角礫が混じる。地表下約0.85mからは黒灰色粘質土が堆積しており、湧水がある地表下約1.1mまで掘り下げたが遺構・遺物は確認できなかった。

T2（東側谷）

現地標高3.85m。地表下約0.3mから黄色のクサリ角礫が混じる黒灰色粘質土が見られ、湧水がある。地表下約0.85mからは地山と見られる角石の混じる淡灰褐色粘質土が確認できたが遺構・遺物は確認できなかった。

鰐石1号墳

鰐石遺跡西の標高約23mの丘陵尾根上にあり、丘陵頂部からは約17m下った位置にあたる。平地からの比高は約20mである。平地から山道に沿って丘陵頂部を目指すと確認できる。円形の高まりと大型石が多く露出しており、横穴式石室をもつ円墳と明確にわかる。また墳丘の後背には、丘陵切断部と思われる浅い周溝があり、いわゆる山よせの円墳の特徴を有している。墳丘は東西の直径6.5m、南北の直径7.5mを測る。

石室の奥壁には小～中型石を横置きに積上げ、大型の石材は用いられていない。また石の抜取跡が1.3m×2.5mの範囲で確認でき、平面形は羽子板状を呈し、南東方向に開口している。なお、墳丘周辺には石材が散在しており、天井石と見られる大型石は幅約1.3m程である。

鰐石2号墳

鰐石遺跡北の標高約18mの丘陵頂部平坦地の南東端にあり、平地からの比高は約15.5mである。現地への山道はないが、周辺に畑跡らしき平坦地が多く残る。現在の平坦地が造成される以前は平地側から登れたとみられる。円形の高まりと大型石が多く露出し横穴式石室をもつ円墳と明確にわかる。2号墳は最大径8.3m程の不整形な円墳で、石の抜取跡は1.6m×3.5m程で主軸は東へ53°振り、南西方向に開口する。周辺には石材が認められ天井石と見られる大型石は1.32m×0.28m程である。

北側に隣接して7.2m×6m程の不整形な高まりがあり、南側に下った場所にも石材と直径4.7m程の高まりがある。断定できないが、古墳の可能性がある。

第3節 総括

試掘調査地點は昭和48年に発掘調査が行われた鰐石遺跡から約250m離れており、遺構・遺物は確認できなかった。標高は以前の調査地より約2m高い位置にあるが、土層の状況は角礫の混じる黒灰色の粘質土が堆積する湿地帯で、周辺も岩山のため崩壊しやすく生活には適さない環境である。

平成17年度の立会地点でも遺跡は確認されておらず、鰐石遺跡の範囲は北西側へ広がらないことを追

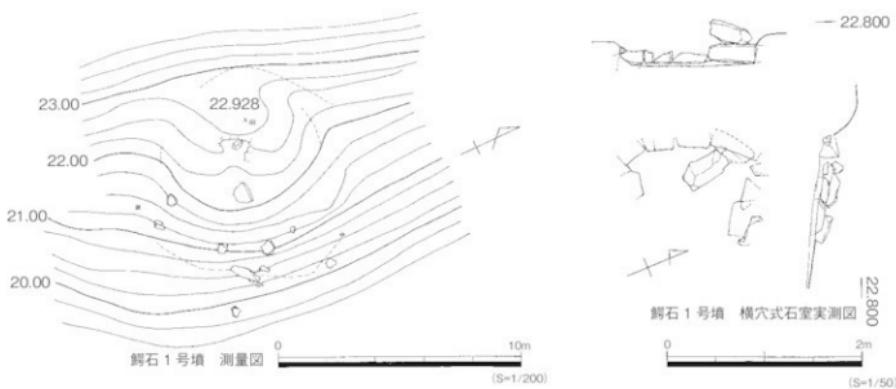
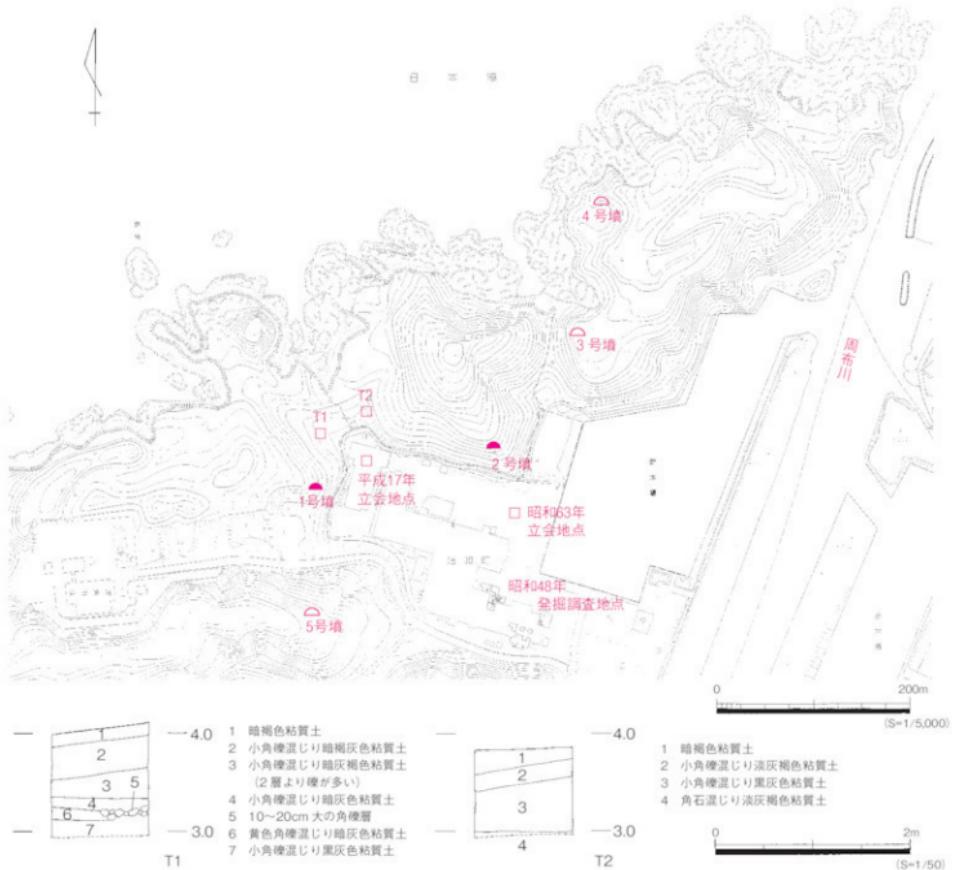
認できた。なお、鰐石遺跡出土の弥生時代前期の土器・石器の一部は浜田市指定文化財となっている。

鰐石古墳群は鰐石遺跡の西側及び北側丘陵にあり、北側は日本海に面する岩場になる。丘陵斜面と谷部に畑や水田跡の平坦地が各所に見られるが、岩盤が多く露出し石を多く含む崩落土で造られている。現在は畑や水田が荒廃し、竹や雑木で見通しが非常に悪い。昭和48年頃の島根県埋蔵文化財包蔵地調査カードによると、鰐石古墳群は4基確認されており西側から1～4号墳とされている。今回の現地踏査で石室と見られる石が露出する古墳は2基特定できたが、他は雑木のため確認できなかった。また、試掘調査地の南丘陵上にも新たに1基の古墳が確認でき、古墳群の分布状況をさらに整理する必要がある。

(藤田)

参考文献

- 前島己基1973「浜田市鰐石遺跡」『季刊文化財』第22号 島根県文化財愛護協会
柳原博英1996「鰐石遺跡について」『亀山』第23号 浜田市文化財愛護会
柳原博英1999「島根県鰐石遺跡出土の大陸系磨製石器類について」『田中義昭先生退官記念文集 地域に根ざして』
田中義昭先生退官記念事業会
柳原博英2005「浜田市鰐石遺跡出土遺物－弥生前期土器を中心に－」『古代文化研究』第13号 島根県古代文化センター
柳原博英2009「浜田市内の弥生遺跡紹介」「ここまで掘った！石見の弥生ムラ」島根県埋蔵文化財調査センター



第1図 鰐石遺跡・鰐石古墳群



T1（西側谷）調査前



T1（西側谷）調査後



T2（東側谷）調査前



T2（東側谷）調査後



作業状況



鰐石1号墳遠景（西側丘陵上・石室あり）



鰐石1号墳の横穴式石室



鰐石2号墳（東側丘陵上・石室あり）

報告書抄録

ふりがな	しまねけんはまだしいせきちずご（あさひじちく）・はまだしちわちょうわにいししくつちょうさ							
書名	島根県浜田市遺跡地図V（旭自治区）・浜田市治和町鰐石試掘調査							
副書名	平成23年度市内遺跡発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	榎原博英・藤田大輔							
編集機関	島根県浜田市教育委員会							
所在地	〒697-8501 島根県浜田市殿町1番地 Tel0855-25-9731 bunka@city.hamada.shimane.jp							
発行年月日	2013年3月							
ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所在地	コ一 下	北緯 度	東経 度	調査 期間	調査 面積 m ²	調査 原因	
鰐石遺跡	しまねけん 島根県 はまだし 浜田市 うわちら 治和町 じわいち 鰐石	32202	L54	34°86'89"	132°01'50"	20110509～ 20110525	4 m ²	試掘調査
鰐石古墳群	しまねけん 島根県 はまだし 浜田市 うわちら 治和町 じわいち 鰐石	32202	L55	34°86'86"	132°01'44"	20110509～ 20110525	試掘調査 地に隣接	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
鰐石遺跡	集落				遺構・遺物は検出され なかった。			
鰐石古墳群	古墳	古墳時代						
要約	調査地は昭和48年に発掘調査が行われた鰐石遺跡の北西約250mに位置する。標高は以前の調査地より約2m高い位置にあるが、土層の状況は角礫の混じる黒灰色の粘質土が堆積する湿地帯で、周辺も岩山のため崩壊しやすく生活には適さない環境である。遺構・遺物も検出されず、鰐石遺跡は北西方向には広がらないことを確認できた。鰐石古墳群に関しては、鰐石1号墳の略測を行った。							

島根県浜田市遺跡地図V（旭自治区）・浜田市治和町鰐石試掘調査

平成23年度市内遺跡発掘調査報告書

発行 島根県浜田市教育委員会 2013年 3月

島根県浜田市殿町1番地

印刷 柏村印刷株式会社